
パズル

平成飛脚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パズル

【コード】
N8402E

【作者名】
平成飛脚

【あらすじ】
大富豪、如月英将を中心にその家族達のドラマを描いたヒューマンドラマ。

如月 英将

東京都世田谷区。都内でも屈指の高級住宅街であるこの街の一角に立つ御殿。全身レンガタイル張りのヨーロッパ邸宅を彷彿とさせる外観。ザッと見ても庭園を合わせて300坪ほどの敷地。

近隣住人はこの館を皇居と呼ぶ。門から正面玄関までの距離がおおよそ20メートル。全室30部屋を超える2階建て住宅である。所有者は名家とされる如月家当主 如月 英将。大正時代末期に設立された如月製薬の3代目取締役を務める。連結売上高7000億を超えるメガカンパニーである。

現取締役の英将が先代から引き継いでから飛躍的に業績が伸び、西暦2000年現在では国内の業界トップに躍り出る。末端の社員を合わせると1万人を超える従業員を抱えていた。英将は芸能界、司法界、政界に至るまで影響を及ぼす。年間365日の9割を仕事に費やし数十年間そのペースを維持し続ける正に仕事人であった。20世紀後半に訪れたバブル崩壊にも動じず天才経営者の名を欲しいままにしている。

彼の一日は多忙だ。銀行の頭取からメディアに至るまで様々な人と会う。メディア上では評論家やスポンサーの顔を持つ。海外からの取材も少なくない。現場の人間に喝を入れるのも忘れない。それは首脳陣から営業、経理、開発部門に至るまで精力的に顔を出す。夜の付き合いも派手だ。銀座、薄野、栄、北新地から博多まで取引先への接待はバブル時代から何ら変わりはない。彼は接待を受けるのを嫌った。常に自分が中心で居たいのだ。己こそが正義であり、絶対でもある。それは数十年間の会社の実績で証明もしているし、他人に口出しされるのを激しく嫌う。

製薬会社は人件費もそうだが新商品の為の研究費（開発費）に膨大な金を費やす。大金を費やしたにも関わらず無駄に消えていく幻の商品も多い。だが1割、もしくはそれ以下の確率で1つの商品が生まれる。1度ヒットすれば長年に渡って会社に利益をもたらす。

彼の交友関係は広い。芸能界では売り出し、または売れないタレントのCM起用で数え切れないほどの女を抱いてきた。女達もそれで自分の夢が叶うのである。英将は自分が他人よりも見栄えが良く中身だけで女たちが群がってきているとは思っていない。ただ、ただ金なのである。金こそ力。権力こそ正義。この数十年間、内にも外にも自分に反発（意見）してくる者が少なからずいた。

会社の内部からのスパイも含め自分を陥れようとする人間には社会的に抹殺した。2度とその者達が表社会で見るとはなかった。なにせ芸能界、政界に限らず各業界のトップや官僚（警察含む）達をいくつも従えている。一人の人間を社会から消すことなど造作も無い事だった。裏社会の人間も例外ではない。ある極道の幹部が自分を強請ってきた。女性芸能人とのスキャンダルである。海外のリゾート地に複数別荘を所有しているが、そこで繰り広げられている不倫劇をネタに強請ってきた。国内でも3本の指に入る極道の巨大組織をバツクに強がっていたが、それからその男を日本国内で見たものは居ない。搜索願いすら組から届け出る事はなかった。当然ヤクザであるからそんな事を警察に頼む事もおかしな話だが、腐っても大組織（大企業）の幹部様である。

プロのアスリート選手と比べても遜色のない体格。60前とは思えぬ毛髪量と体力。下手なヤクザなら顔を背けてしまうような迫力のある顔つき。10年程前に自分に逆らい出世の目を摘んでやった官僚が居た。その男は当時与党内で有力だった政治家に泣きついた。

その政治家は経済ヤクザのカリスマと言われる男に、自分を製薬業界のトップから叩き落そうとする動きに出た。製薬業界は広いようで狭い。横の繋がりも大事にはしてきたが自分を良く思っていない人間も多かった。そういう人間達や拳句の果てには社内で自分と折り合いの悪い社員達まで取り込もうとしてきた。

その誘いに乗った者全てを奈落の底に叩き落した。首謀者の官僚、政治家、ヤクザの3人はそれぞれ制裁を受ける事となった。その官僚はイラン・イラク戦争や湾岸戦争で、治安が不安定になっていた中東の最前線に友好大使として送られる事になった。2000年現在、未だに帰国はしていない。その政治家の選挙区で対抗馬となっていた男を当選させ、2度と政界に復活出来ないようにしてやったヤクザは噂によるとコンクリート詰め、もしくは山に埋められたという噂が絶えない。誰もその真相を追う者は居なかった。長い物には巻かれるのである。

考えてみると生まれつき闘いと言う物が好きだったのかもしれない。先代を幼少時代から客観的に見ても自分より勝っているものはなかった。資質、判断力、実行力、忍耐力、精神力、体力。それは結果が証明している。各メディアは競って先々代、先代と自分を比較する特集番組を組んだ。結局は自分が如月製薬のターニングポイントであったという結論で終わる。メディアは、いや全ての業界に言える事だが己が可愛いから、自分が不愉快になるような番組は作らない。全ての人間は自分に媚びなければ生きてはいけないのである。

別名、「如月王国 国王、如月英将」。

何も弱点の無いように見える自分が唯一頭を抱える問題がある。それは政治家、極道、芸能人、投資家、そんな者達をものともしない自分に真っ向から刃向かってくる人間達が存在する。

如月家の人々である。妻の渚を重症筋無力症で約20年前に亡くした。それをきっかけに家族は瓦解したと言っても過言ではない。3人の息子と1人の娘が居た。その4人は例外なく自分に背を向けた。

どんな強大な敵よりも手強い同じ血を引き継ぐ者達である。身内だけにどれだけ憎もうが手を出せない厄介な人間達である。

妻の渚は自分が38の頃に重症筋無力症に侵され1年後に息を引き取った。製薬会社の取締役をしても難病の前では無力だった。この病気の中でもいくつかに分類されており、妻は成人第ⅠⅠⅠ型という難度の病気だった。妻が死んだ時に自分はスイスの避暑地でバカンスを過ごしていた。妻への愛情は無くなっていたのかもしれない。本音では自分が日本を出る時に顔は出した。が、その時は前に見舞いに行った時よりも元気そうに見えた。見えただけであって自分の前だけ元気に振舞っていただけなのかもしれない。

昔から渚はそういうところがあった。若くして如月製薬の重役を務めていた頃は飛ぶ鳥を落とす勢いで次々の女を渡り歩いた。地位も金も同世代の男とは比べようもなかった。寄つて来る女は女優、アイドル、資産家の娘等、煌びやかな世界に生きてきた人間ばかりである。その狙いは全て自分の持つ輝ける未来(金)であつただろう。その中で渚だけは自分を1人の男として見てくれた。出会いは自分が別の女と食事をしていた時に、彼女は別のテーブルに着いていた。もちろん別の男性を伴って。後に分かつたことだがその男は彼女の兄であり、妹の誕生日を祝っていたらしい。

生涯で一目惚れはあの時だけである。人は内に秘めているものが必ず外に出る。一般の人間にはそれが分からないかもしれないが、幼い頃から数多くの人間を見てきた。幼少時代には既にその人間の欲

望などが透けて見えるようになっていた。先代（父）に上手く取り入るうと必死でアピールしてくる人間の顔というのはみんな共通していた。渚の目はとても綺麗だった。心の底から笑い、本気で驚いたり、感情表現の豊かさにまず心を奪われた。

食事に連れていた女をそっちのけで渚に見惚れていた。トイレに行った際に運転手に連絡し、その女性を尾行するように指示した。結果、その女性は由緒ある剣道道場、天道家の娘であった。お抱えの探偵事務所の人間に大金を叩いてその女性の生活パターンを徹底的に調べさせた。中小企業の事務員をしながら家の道場を手伝っていたようだ。夜の街に繰り出すこともなく質素に過ごしていた。ある日彼女がいつも通っているスーパーで野菜選びをしている時に声を掛けた。

見知らぬ自分に対して明らかに警戒の色を隠せなかったが、正直にその誕生日を祝っていたレストランの話題をして多少の警戒を除いた。素直に好きだと伝えた。もちろん初対面の男にそんな事を言われて舞い上がる女性には興味はなかった。友達付き合いを半年ほど続けて交際に至る事となった。自分の性格は己が一番理解しているが、欲しいと思ったものはすぐに奪ってでも手に入れる性格であった。唯一の例外として渚を自分の手に入れる時は慎重に慎重を重ねた。道場にも遊びに行ったことがあったが、向こうの父親と兄は自分の事を最初から敬遠していた。人間の種類が違うのか、自分のようにレールを敷かれて生きている人間を敬遠しているようだった。

特に兄の天道 真は自分の顔を見ると煙たそうな顔をした。妹を溺愛しておりおそらくシスターコンプレックスという物なのだろう。結婚時には大反対をされた。泣いて懇願する渚に遂に折れて渋々結婚に漕ぎ着けた。子供には恵まれた。

長男の将太。自分のような立派な男になつて欲しいと「将」の字を付けようと提案したのは渚だった。2年後に長女の冥が生まれた。容姿は渚に似て美しく育つたが気の強さは自分に似てしまった。次男の仁も母親似で端正な顔立ちだった。末っ子の光寿は幼い頃から大人しかった。いつも絵を描いたり花や草をじつと見つめていては絵を描く事を繰り返していた。

光寿が生まれて何年かしてから渚は病に侵された。その頃を区切りに家族とのコミュニケーションは無くなったものと思われる。バブル崩壊により数々の大企業が無くなつていく中で、非情とも思われる大リストラを執行し、何処よりも早く無駄を省いた。そのおかげで現在では世界のメガカンパニーとして君臨していられるのだが、渚を失つてからの自分の心はポツカリと大きな穴が出来ていた。

まだ代表取締役就任してから間もない頃、先代の頃から居た重役達に陰口を叩かれていたのを知っていた。若造に何が出来るのかと先代から冷遇されていた者達がライバル会社の人間と接触していたのも知っていた。

英将は父の代の人間をほとんど切った。ライバル会社への寝返りを理由にだ。本音は組織の若返りを狙った物だった。側近には自分に忠実な人間を出来るだけ置きたかった。大リストラを執行し、信用の出来る人間で固めてから会社の業績は飛躍的に伸びた。飛ぶ鳥を落とす勢いの頃に自分の右腕として抜擢したのが嘉納 丈である。

初代、2代目に関してはどうも社員の格を重んじる所があった。つまり身分の低い者、学歴の無い者、それらの者は如月製薬の重役に入るのとは不可能であった。エリートを重んじる点を廃止し、能力の高い者を登用させるようにした。世襲制も廃止するよう宣言した。これによって周りの者達は頑張れば自分もトップに立てるんだとや

る気を起こすようになる。その中で自分の右腕に踊り出たのが嘉納だった。英将が48の頃に中途採用した男である。大学は出ておらず高校を卒業してから小さなドラッグストアで販売員をしていた。元々ハンサムで気さくな性格が幸いして店の売上は以前より3倍近くに伸びていた。

英将は同じ業界の動向を側近の数人に調べさせていた。どんな些細な情報でも自分の耳に届くように徹底させた。嘉納の働きによりそのドラッグストアは5店舗に増えた。そこから途方もない大金を叩き引き抜いた。気に入ったのは金だけで心を動かさなかった点、業界の行く末を冷静沈着に理解していた事、そして仕事に対して妥協が無かったのが一番英将の気に入る所となった。

嘉納が入社したのは彼が20代半ばを過ぎた頃である。将来的には娘の冥と結婚させようかと考えていた時期もあった。だが彼女にはその頃にボーイフレンドが居り叶わぬ事となってしまった。例え娘がその時に嘉納を気に入ってたとしても、嘉納自身が娘を気に入ったかは分からない。いや、拒否したであろう。適当な理由をつけて男の自分から見ても嘉納は惚れ惚れするようなハンサムな男だった。そして仕事も出来る。気配りも出来る。

結局、娘の冥は年下のくだらない男と結婚する。顔だけが取り得で冥に対しては金だけが目当てで近づいたとしか思えない男であった。当然、結婚する時には大反対をした。理由は金目当てだった事。結局結婚に踏み切ってからその男は如月製薬の重役入りを求めてきたその瞬間に首を掴んで罵ってやった。それからは度々娘にも暴力をふるうようになった。しばらくは娘も耐えていたようだが、次第にその男に愛想をつかして別れてしまった。しかし、本当は新しいヒモのような男が出来たからだというのを英将は知っていた。しかし特に気にもしなかった。

如月製薬は世界のメガカンパニーである。その動向は世界中が注目していたし、その長女が離婚だという話は一大スキャンダルである。新しいヒモの男に關してもハイエナ（マスコミ）が嗅ぎつけていた。それを記事にした記者を全て社会的に抹殺してやった。大手メディアも文句は言えない。例え弱小のゴシップ誌でも容赦はしなかった。

20世紀まで順調に伸びていた業績もバブル崩壊後は横ばいになりつつあった。年が明ければ21世紀へと移り変わる。新生如月製薬は海外事業へとシフトしつつあった。今後は国内だけでは業績を伸ばす事は不可能だと10年程前から嘉納と話し合ってきた。アジアを中心に嘉納を筆頭として海外に進出していった。今ではアジアの主要都市5箇所に工場と支社をそれぞれ作らせた。欧米進出もこの2、3年で現実化するだろう。嘉納の適応力は見事なものだった。海外の現地社員は日本人と違い勤勉性に乏しかった。だが、嘉納は各民族に合わせたスタイルを確立し、アジアのメディアからもその質の高い教育が取り上げられていた。

「嘉納。今一番業績の伸びている中国市場はいつまで膨れ上がるだろうか?」「しばらくは右肩上がりが続くでしょう。富裕層が劇的に増えています。もし2008年のオリンピック開催地が北京に選ばれるような事があれば尚更期待出来ます。」「欧米進出の前までに中国支社を最低3、4箇所増やしたい。」「それは充分可能です。よう。ただ現地で指導出来る人間を少なくとも10人は欲しいのですが。」「お前のように優秀な人間は稀にしかおらん。お前でこれはと思った人間を国内から10人選べ。」「分かりました。ところで本日は厚生省大臣の秘書との面会が昼からありますが、ご都合は宜しいでしょうか?」「ふん、どうせ碌な用件で来ていないのだからな。この国にはかつて国土という種類の間達が存在してだな。」

命をかけて革命を実現させ、国の為に命を削ってきた人間が多数居た。「はい。」「今では自分の保身と利権にしか頭を使わないクズどもの集団だ。国の利益の為にソフトな外交をやるのは分かるが、戦後の日本外交は正に土下座外交一色だな。国土を脅かされていてもニコニコしながら相手の大使にご機嫌をとつておる。」「頭の痛い問題ですな。」「本来外交というものはニコニコしながら握手をして、もう片方の手には刃物を隠し持つものだと思っていたが・・・」

何度考えても国には腹が立つ。国民から多額の税金を吸い上げて国に還元しようともせず、ただただ、官僚、役人達の懐に入つて終了である。消費税の導入は理解できるが果たしてそれで国が潤つたかどうかは疑問だ。英将は何れこの国のメディアを乗っ取るうと目論んでいた。メディアを手中に収めれば国や国民を動かすのは容易い。それにはもつと力が必要だった。

自分の年齢から考えて、精力的に動けるのはせいぜい後5〜6年というところだろう。跡継ぎは決めてはいない。如月製菓は如月家中だけで世襲制を執つてきた。無論、自分の息子たちが優秀であれば今にでも跡継ぎを発表してもいい。ただ人間の能力だけを見て人材登用してきた。残念ながら自分の子供達では4代目を継ぐのは夢物語だった。長男は会社の重役に置いてはいるがトップの資質はない。随所に甘さが垣間見える。次男はクズだ。噂によると裏社会との繋がりもあるらしい。末っ子は何を考えているかよく分からない。そもそもまともな会話すらした事もないのだ。

実力から考えると嘉納が1番適任だった。娘の冥を嘉納と結婚させ、嘉納に次期取締役を渡すのが1番現実的であった。それも叶わない。その日の昼に厚生省の大臣秘書と昼食を共にした。製菓の製の字も理解してはいなくせに、商品の質というものを熱く語ってきた。歳

は30を過ぎたばかりだろうか。はつきりとは言わないが、結局自分の懐にいくらか還元すれば厚生省は何も口出ししないという内容だった。こういうクズは嫌いではなかった。やり方によっては利用出来るからだ。経済1流、政治3流の国であった。

夕方に某私立大学で講演会があった。当たり障りの無いスピーチを数十分するだけで金が入ってくる。金だけではない。この中から優秀な学生が我が社に入ってくるかも知れない。英将は人材育成が全ての要素の中で難しいと感じていた。先人の優秀な経営者達もこれで頭を悩ませていたのだろうか？

夜には銀行の頭取との夕食である。こいつも考えている事が浅い。出来るだけ失敗をしないようにだけするのがこういう人間にとっては重要な事だった。話していても不愉快になるだけであった。

もうすぐ夏の季節だった。暑くなればスイスカカナダの避暑地に愛人を連れてのんびりしたいものだ。自分が数人の愛人を囲っているのはメディアも分かっている。記事に出来ないのは自分に力があるからである。かつては数十人からの愛人が居た。今では大幅に削った。自分も若くはない。社長室に置いてある地球儀を見ながらブラツクコーヒーを啜るのがお気に入りの時間だった。

如月 将太

中野の高円寺にひっそりと建つ灰色のマンション。築10年ほどだがそれ以上に老朽化しているように見える。マンションの住人のほとんどは学生、水商売の人間達で埋まっていた。まさかこの様な質素なマンションに世界に知られる大企業の重役が住んでいる事など他の住人達は知らない。

将太はこの人目につかない質素なマンションを気に入っていた。父とは対照的に煌びやかな世界が生理的に受け付けなかった。幼い頃から金というものに執着心はなかった。有り余るほどあった小遣いも使い道があまりなかった。その為、母親が自分の為に口座を作ってくれた。

「将太さんは将来、お父様の跡を継いで世界へと飛び立つ人になるのだから今のうちに貯金をしておきましょうね。」母はいつも優しくかった。本当は保育園の保父さんになりたかった。その夢を父にすると鼻で笑われた。「お前が保父だと？俺が何の為に前を育てているか分かっていないのか？何の為に他所よりも多めに小遣いをくれてやってるのか理解していかないのか？」高慢な父親の言動は幼い将太の心を著しく傷つけた。優しい母親に対しても家の手入れや料理など細かく指図しては気に入らないと怒鳴りつけていた。物心がついた時にはこの父親が好きではなかった。水と油。何から何まで合わなかった。

小学生の頃から自由に遊ぶクラスメイト達とは違い、週6日の学習塾に通わされた。成績は悪い方ではなかったが父はトップにならなければ認めなかった。「お父さん、今日の小テストでクラスで一番になったよ!」「まあまあ、さすがは如月家の長男ね。やはり父親

に似て聡明な子だわ。」横に居た母親もニコニコしながら喜んでいる。「ふん、たかだか1つの小テスト程度で浮かれていますのか。今回お前に点数で劣ったクラスメート達はお前に勝とうと次のテストの準備に取り掛かっているだろう。俺ならそうする。どうせなら学年で一番を取ってみる。」素直に父親から褒められた事など一度もなかった。

ある日運動会に来てくれるよう、父親に頼んだことがあった。自分も父親に気に入られようと子供ながらに必死だったのだ。「運動会？俺のびつしり詰まっている予定の中に、そんなくだらない遊戯に付き合わせると。そう言うんだな？お前は。」「僕はただ、お父さんに見てもらいたくて・・・」「お前の運動神経では他人に勝つのは不可能だ。勉強をしっかりとしろ。そこでトップにも立っていないのに運動会だと？笑わせるな。」「そんな・・・貴方の子供ですよ。将太さんは大好きなお父様に勇姿を見てもらいたいのですから・・・」「大好きなお父様か。それは間違いだ。こいつは俺の事を憎んでいる。それに何の取り得もないこのガキに何を期待する？」「取り消してください！今言った事をすぐに取り消してください！」「口答えするな！俺を誰だと思っているんだ？よくもそんな事が言えたもんだな？お前の生ぬるい教育でこんな草食動物のようなガキに育ってしまったんだ。ん？何だその目は？まさか俺を睨んでいるのか？草食動物も怒る事があるんだな？ハッハッハッ。」

何故あのような最低な男と母は結婚したのか？母はあの男の何処に惚れたのか？1度聞いたことがある。「厳しい人に見えるけどお父様はとても心の優しい方なのよ。」そう言っただけの女神のような笑顔で母は微笑んだ。「嘘だ！あの男に褒められた事なんて一度もないよ！」「ちゃんとお父さんと言いなさい！」「キツと厳しい表情を一瞬見せてからすぐに微笑んで、「貴方を立派な大人に教育しよう」と、わざと厳しく接していらっしやるのよ。」「それも違う！ただ僕の

事が嫌いなんだ。」「自分の子供が可愛く無い訳ないでしょう。私は貴方の事を愛しているわ。お父様もそうよ。」「母は聖人だったが聖人故にあの男に騙されたのだ。もし結婚していなければ自分は生まれてもいないし、大好きな母親と巡り合う事もなかったらう。

時は過ぎ将太は高校生になった。幼い頃から無理矢理通わされた進学塾の甲斐もあってそれなりの進学校に進むことが出来た。この頃には父と会話する事もほぼ皆無だったが、ある日好きな女の子の写真を見ながらマスターベーションしていると、父に見られた。不意に部屋に父が入ってきたのである。

「ほう。これは意外だな。ホモかと思っていたのにお前も異性に興味を持つようになったのか。」「勝手に開けるな!」「ふふ。でかい口を叩くようになったものだ。このオナニー野郎が。」「お前なんか死ねばいいんだ!」いつの間にか父に突っかかっていた。筋肉の固まりのような父に頬を殴られ床に倒れていた。そのまま父は写真を手に取り、「ふむ。この程度の女に欲情していたのか?お前のようなカスでも一応は如月家の長男なんだ。忘れる、この女は。大学生になれば上玉の女をお前に紹介してやろう。結婚前提でだ。どうだ?嬉しいか?」「・・・死ぬ・・・」「不敵に笑う父を見上げながら呟いた。腹の方に衝撃が走った。倒れていた自分の腹に父の蹴りがまともに入った。そこで執事の喜一が止めに入った。

「旦那様。いけませんぞ、御坊ちやまに何て事を・・・」「いやいや、これは愛の鞭だ。草食動物のようなこのガキが俺に刃向かってきた事を嬉しく思うぞ。ただ、オナニーはほどほどにな。夜中にひっそりやれ。」「まるで軽蔑しているかのような父の視線を見た時に何か切れた。後で喜一に聞いた話によると再度、父に殴りかかったが気絶させられるまで殴られたらしい。この事件以来、いつか父を殺してやろうと思った。まだ自分には力が足りない。しかし時が

経ては奴も弱ってくるだろう。今はチャンスが来るまで力を養うべきだ。

それから将太はスポーツジムに通った。必死で筋肉をつけた。大人になった今では他人と見劣りしないような立派な体を手に入れた。勉強の方も頑張った。東大が最低条件という厳しい父からの要請に見事応えた。ただ、父はそれを褒めようともしせず当然だと言わんばかりの表情だった。そんな父の反応には慣れていた。

大学生になるとアルバイトを始めた。地元の居酒屋に週末だけ入った。生まれてからずっと如月家の傘に守られた生活を送ってきた。アルバイトを始めてからは己の力で金を稼ぐという快感に酔いしれた。僅か月に数万円という稼ぎでも将太は満足だった。店の店長は飲み込みの早い将太を気に入りによくしてくれた。初めての彼女も出来た。店によく来る女性客の1人で年上だったが、愛想の良い将太を気に入り彼女の方から誘った。

初めてのデートで映画に行き、夕食を共にして酒も入ったところで彼女の方からホテルに誘ってきた。女を抱いた事のない将太は心臓が飛び出るような心境だったが、それでも平静を装って彼女とホテルへ入った。

シャワーを浴び、いざ本番へという所で肝心のアレが起きた。それでも彼女は優しくリードしてくれて将太の物を啜えると次第に大きくなってきた。それから彼女は将太の上にまたがり激しくピストン運動を始めた。ゴムをつけずに最後を迎えた為に彼女の中へ出してしまふ結果となった。幸いそれで妊娠する様なことはなかった。それから彼女とは頻繁に会うようになった。将太は決してハンサムと呼べる男ではなかったが、彼女に対して誰よりも優しくかった。そういう将太の思いやりがある所に彼女は惚れた。

将太は何れ彼女と結婚したいと思うようになった。彼女は将太が如月家の長男だという事を付き合ってからしばらくして知る事になったが、それでも今までとまったく変わらなかった。

「僕は将来、父の跡を継ぐ事はないと思う。弟も2人居るし飲食店を経営したいんだ。」そんな将太を彼女は優しく応援した。

ある日、父から応接間に呼ばれた。部屋に行くとブランデーを飲みながら父が待つていた。あの事件以来、父とは一切言葉を交わしていなかった。何も言わず父の正面に座った。

「学校の方はどうだ?」「別に。」「ふん、体を鍛えて強くなったつもりだろうがあまり生意気な口を利くなよ。アルバイトをしているらしいな?俺は最近喜一から聞いたが何故黙つていた?」「いちいち言う必要もないと思つたから。」「まあいいだろう。別にお前にそこまで興味がある訳ではないからな。それで、うちの会社に入る意思はあるのか?」「ない。」「ほう。では何になる?」「飲食店を経営したい。」「お前では無理だ。経営者にはなれない。」「では何故会社へ入る事を勧めるんだ?」「英将はグラスの酒を飲み干すと葉巻を啜えた。

「俺が英才教育をしてやろう。」「嫌いな俺にそこまで親切にしてくれなくてもいいよ。」「3代続いている如月家の栄光を俺の代で終わらせたくはない。」「仁か光寿に譲ってくれ。僕はあんたの跡を継ぐ意思はない。」「口に気をつける。ここまで育てたのは誰だと思つているんだ?」「母さんだ。」「母さんはもう居ない。それに俺が居なければここまで裕福な生活も出来ていないはずだ。」「僕は幼い頃から腫れ物に触るような扱いを周りの大人達から受けてきた。だけど大学生になり、アルバイトを始めてから自分の人生を

己で切り開くという快感を得た。「生意気に。」少し英将の口元が緩んだ。「人生を切り開くという快感の他にも女の快感にも溺れているんだろう?」「どういう事だ?」「最近お前は部屋に籠って自慰行為をしていないからな。」

将太の眉間にシワが寄った。拳を握り締め絶えた。「それで・・・あんたは何が言いたいんだ?」「女が出来たんだろう?良かったじゃないか。どうせその女に誑かされているんだろう。どこのお嬢さんだ?」「あんたが知る必要はない。」「大学に上がればとびっきりの女を紹介してやろうと言った事を覚えているか?」「ああ、あんたが僕のオナニーをこつそり覗いていたあの事件の時だな。覚えてるよ。」「くく、何故お前の自慰行為をわざわざ覗かなければいけないんだ?」「あんたは変態だからな。両刀の気があっても不思議ではない。」「言った瞬間に灰皿が飛んできた。将太の左側のこめかみをかすめた。

「ふふ。悪い気分じゃないよ。僕の挑発程度に反応してるんだからもうろくしたね。お・と・う・さ・ん。」「そこから父は掴みかかってきた。今では負ける気はしない。途中で喜一や弟の仁に止められるまで力で負ける事はなかった。

大学を出ると居酒屋のバイトで溜め込んだ預金と、銀行から借り入れた資金を元にレストランの立ち上げに取り掛かるうとした。しかし何故か預金から引き出せない。窓口で問い合わせると父の一声で引き出せないようにロックがかかっているとの事だった。何を訴えても銀行側は父の命令に逆らう事は出来なかった。晩に英将に会おうとするが海外出張に出ていた。英将の秘書に帰りのスケジュールを聞くと1週間は戻ってこないらしい。

店の場所やスタッフを集める段階まで来ていたのに全てが止まった。

あの男のおかげで。英将が結局戻ってきたのは1ヶ月ほどしてからである。その頃にはせつかく集めたスタッフも居なくなっていた。

「どうした？まるで俺を殺してやろうとでも言いたそうな面だな。」
皮肉な笑みを浮かべて将太に言った。「何をとぼけてるんだ？勝手に人の口座をいじるのは止めてくれないか？俺の事業が滅茶苦茶だ。」
「生意気に事業か。お前にはその器はない。俺の元で働け。一人前の男にしてやろうという親心が分からんか？」
「お前が親？今までで一番面白い冗談だよ。」
「まあ、諦める。今回の事で俺の力がどれほどのものか分かっただろう？政治家も警察もヤクザもマスコミも全て俺には逆らえん。」

確かにこの男の言う事は間違っていない。今までの男に刃向かって社会的に消された人間は数知れない。しかし明らかに英将の事を良く思っていない自分を何故会社へ入れようとするのか？世襲制を変えたいと思っている男が何故？

「後継ぎは会社の人間から選べばいいじゃないか。俺は必要ないはずだ。」
「お前は一応俺の長男という事になっているから居てもらわなければ困る。実際に俺の跡を引き継ぐ資質はお前にはないがな。」
「ゆくゆくは俺を表向きだけの後継者にしようって訳か？」
「賢くなつたな、将太。」
英将の口元は歪んでいた。

「なあ、俺の力がどうのと言う割には世間体を気にしているんだな。小さい男だな、あんたは。」
「全身の骨を折って欲しいのか？ガキが。」
「お前も耄碌したんだからそれは無理だろう。」
「何も俺が自ら手をくださんでもプロに頼めばお前の方から泣いて誤る事になるだろう。」
「自身では俺に勝てないと認めただな。いい事だよ。お前は全てにおいて過信するところがあるからな。」
「今後俺に対してお前などと言えない位に痛めつけてやろう。10万も握らせれ

ば喜んで引き受ける連中は居る。ただお前を痛めつけるだけで10万だからな。」「実の息子にチンピラを雇って痛めつけるか。いいスキヤンダルになるだろう。」「マスコミが俺に遠慮して表沙汰にはならんよ。」「インターネットの世界であんたの悪行を全て公開するよ。例えマスコミが遠慮してもそういう噂は常にあんたの周りで付きまとう事になる。プラスになるとは思えないな。」

「それでも決行すると言えば？」「やればいい。俺にも優秀なカメラマンの親友が居てね。あんたの悪行を一部始終撮らせる事にするよ。今までも気付かなかったかい？俺はあんたのネタをそこらへんのハイエナマスコミ以上に仕込んでいるんだが。」「頼もしいな、そのネタは公開しないほうがいい。俺の力をお前は舐めすぎている。」

その日はそれで終わった。あの男の言う通りいかなる証拠を提示した所で誰も見て見ぬ振りだろう。自分なりにあの男をどういう形で屈服させるか考えた。考えてみれば会社に重役として入る事により、あの男の姿が色濃く分かってくるかも知れない。中身から食い荒らすのも悪くない。そして社内で自分に付く人間、父に服従している人間を把握する事が大切だ。

外から闘うよりよっぽど早く潰せるかもしれない。何より、あいつの力をまだ自分はよく分かっていない。翌日、父に入社する意志を伝えた。

如月 冥

如月 渚にとつては待望の女の子が誕生した。名門如月家に長男の将太が誕生してからは、周囲のプレッシャーがある程度無くなった。自分としては早く女の子が欲しかった。

大きくなればまた変わるのだろうが、自分にそっくりな娘の誕生を嬉しく思った。夫の英将などは将来自分の秘書にしようと意気込んでいた。

小学生になる頃には近所では有名な美人として知られるようになった。成績は中の上といった所だが活発なところがあり、男の子に混じって野球やサッカーなどをやる始末だった。こういう面を母は喜んだが、古い考えを持つ父は良く思っていないかった。何より女は男の1歩後ろに下がってという考えを持っていた。

如月 冥。幼い頃の子、将太とは違い活発で休みの日ですらも、外に出かけては体を動かすことを好んだ。執事の喜一に言わせると祖母の（英将の母）凜が若い頃にそっくりだという。喜一は先代の頃から仕えている為に凜を除けば1番家の事に精通している。

中学に上がると体も女らしくなり、昔のように男の子と混じって遊ぶ事も少なくなっていた。元々美人だから同級生や先輩などから言い寄られた。しかし自分は如月家の一員だという事を兄弟の中で1番強く意識していた。自分と釣り合う男でなければ話にならない。高校生の頃には地元でも有名な美人になった。初めて付き合った高校の先輩は校内でも有名な美男子であり、成績優秀で誰もが羨んだ。

性に対する意識は他人よりも薄く、セックスを汚い行為だと思い続けてきた。いざ、彼氏がセックスに持ち込もうとすると拒絶した。まだ早いとの理由で。しかし正常な高校生の男にそれは酷でもあった。

高校1年の終わりに、彼氏が卒業祝いということで家でホームパーティーをするから来ないかという誘いがあった。何度も向こうの家族とは顔を合わせているし、何より彼氏の卒業祝いだから喜んで行った。行ってみると向こうの家族は家には居らず、尋ねてみるとパーティーの買出しに母と姉が向かっているから2人で待っていていようとの事だった。父は仕事で遅くなると。

少し酒を飲んで待っていると彼が傍に来て肩に腕を回してきた。そんな事は以前から当たり前の事だったので、気を許していると勢いでキスをしてきて胸の辺りを触られた。それを拒否すると無理やりソファに押し倒されて服を脱がされそうになった。抵抗はするものの、アメフトで鍛えた彼氏の力には及ばず、酒の力もあってか遂には生まれたままの姿にさせられた。

男との経験はもちろん初めてで、やがて彼の物が中に入ってきた時は強い苦痛を感じた。挿入しながら彼氏は、「本当の事を言つと家族の皆は海外旅行に出かけている。今日は誰も帰って来ないから俺たち2人きりだ。な、俺も今日まで我慢してきたんだ。」そう言いながら彼氏は満足そうな表情で腰を動かしていた。騙されたと思いつつも、もう自分は処女ではなくなったという事のほうがショックだった。自分の上で必死にピストン運動を繰り返す彼氏の顔を見ると、段々今まで抱いていた恋心が崩れ去り、もうどうにでもなれという気持ちになった。

セックスが終わると彼氏は自分を抱き寄せてきたが、気分が悪いと

服を着ると早々に家を出た。それから彼氏からの連絡を遮断した。それでも彼氏は収まりがつかず、遂には屋敷にまでおしかけてきた。執事の喜一がどれだけ追い返そうとしても彼は一向に帰ろうとしなかった。

そのやり取りの間に父の英将が帰宅してきた。理由を聞くなりその男の頬を父は殴り飛ばした。アメフトをやっていた彼氏が後ろに仰け反ると、馬乗りになって何度も殴った。無理やり殴られたと相手側の親が後日、乗り込んできたが酒を使って娘を無理やりレイプしたと逆に脅迫した。そう言われると相手の親も黙って身を引くしか方法がなかった。

冥は父に礼を言い、書斎を訪れた。

「お父さん、私の為にありがとう。困っていたのよ、嫌だと言っているのにしつこく私とコンタクトを取ってこようとする彼が。」そう言うと意外そうな顔をして父が冥の顔を覗き込んだ。「自ら男の家に上がりこんで酒を喰らってレイプされたなんて、如月家の娘としては失格だ。俺はお前の為にやったんじゃない。俺の名前を汚された気がしたから殴ってやったんだ。あんな力スみたいな男が初めての男か。」「何でそんな事を言うの？父親でしょう？」「今までにお前に迫ってきたこともあるだろう？男だからな。それを分かっているながら無用心にも男の家に上がりこんだお前のミスだろう。」「それは彼の卒業祝いだからと。」「だが家族は家に居なかった。おかしいだろう？何故分からなかった？お前も満更じゃなかったんだらう？」

冥は気付いたら部屋を飛び出し自分の部屋で長い間泣き続けた。未っ子の光寿が心配そうに部屋に入ってきたが追い出した。

（あいつは父親なんかじゃない。優しい母親を騙して結婚したんだ。そういえば以前にも兄の将太と殴り合いの喧嘩に発展していた事があったけど、今になれば兄のそういう気持ち分かる。もうあいつを父親だと思うのはやめよう。自分の人生は自分で切り開く。）

この頃から冥は男とは付き合うことも無く、以前から興味のあったモデルになりたいという欲求が強くなっていった。有名な私立の女子大に進むと某ファッション雑誌の読者モデルとして知られていくようになった。

母親から受け継いだ美貌と、ハリウッドスター並のスタイルを駆使してあれよと言う間に人気モデルへと成長した。彼女を預かるモデル事務所は彼女の持つポテンシャルに惚れこみ、歌手や女優の道を勧めてきたが冥は全くその気はなかった。

大学を卒業する頃には各ファッション雑誌の表紙を飾るなど知名度もグングン上がっていった。異性には全くといっていいほど興味が沸かなかった。レズという物にも興味は無い。

モデル事務所から独立したいと考えるようになったのは24の頃である。彼女はオリジナルのブランドショップを立ち上げて大成功を収める。店の出資は父が出してくれた。自分に、というより子供たちに冷酷な父も自分の商才に対しては認めざるを得ず、自分の思い描いた土地に店を出すことが出来、自分の理想通りの内装にも拘る事が出来た。世界の著名人である父にすれば小銭を出すようなものであった。

その頃くらいに父の右腕になりつつある嘉納と出会った。父はブランドショップだけに限らず、芸能プロダクションをやらないかと持ちかけてきた。自分の店がここまで人気が出たのは、自分のモデル

時代の遺産のおかげだと割り切っていた。その寿命も長くはない。女優やモデルは数年で飽きられてしまうのである。ただ、彼女のデザインしたバッグやヒール、財布など奇抜でありながら女性の可愛いという心理をくすぐったアイテムは売り上げも順調に上がっていた。

「お父様、私は今の店がとても気に入っています。せっかくの話ですが私は芸能界へ身を移す事はお断りします。」「もったいない話だ。ま、店も順調なようだし店舗拡大は考えているのだろうか?」「ええ、出来れば東京にあと2店舗。そして地方や海外にも拡大させたいという本音はあります。」満足そうに笑う英将を見るのは初めてだと嘉納は思った。嘉納に引き抜かれて数年経つが、他人を最初から信用しない所がある。自分に対しても全てにおいて心は許していないはずだ。だからこそ彼は今の地位に居るとも言える。

英将の血をより濃く受け継いでいるのは娘の冥だと嘉納は思っていた。末っ子は会った事がないのだが、長男の将太は同じ会社の重役でありよく知っている。頭のいい人間だが、人の上に立つにはリーダーシップが足りない。何より優しすぎる。次男の仁は男兄弟の中では1番容姿端麗であり、高校生の頃にはサッカーの名門校でスタメンを務めるほど運動神経にも優れていた。ただ人格に問題があった。自分より劣った容姿や運動神経を持つ人間たちを軽く見る所があった。

英将の母親は直に見たことはないが、冥を見ていると優れた美貌の持ち主であったのは分かる。

「ところで今日のお前は何か変だな。普段の言動とは違い、俺に対してリスペクトすら感じるのだがどういう風の吹き回しだ?」冥が少し動揺した表情を嘉納は見逃さなかったが、すぐに落ち着いた表

情に戻すと、「いえ、私はお父様の娘ですが今はビジネスパートナーですから。それに相応しい態度で接するのは当然だと思っています。」

英将は明らかに娘が嘉納を意識しているのを見抜いた。家で接する態度とは明らかに違う。無理も無い。嘉納は仕事も出来れば俳優並のルックスを兼ね備え、気さくな性格で女性を優しくリードするから女性から騒がれない訳がなかった。冥も異性に対して興味がないのに嘉納を前にするといつもの自分ではないとう自覚があった。彼に微笑みかけられると体全身に衝撃が奔ったように動けなくなる。

嘉納の母親は東欧の人間だと一度だけ父から聞かされた事がある。ハーフにしては見た目が純日本人とさほど変わらない。しかし流石に足の長さや鼻の高さなどは他人とはかけ離れている。端正なルックスを鼻にかけるわけでもなく、相手が緊張しないようなソフトな会話で異性を虜にしてしまう。肝心の本人は異性にさほど興味がある訳でもなく、仕事一筋に生きているように見える。日替わりで女性を金で抱いてるような父とは違い、そのストイックさが冥の惹かれた所でもあった。

しばらくして父から以前に在籍していた事務所の中から、テレビ栄えするモデルを用意して欲しいと頼まれた。モデル会社の社長は快諾した。弱小のモデル事務所からすれば願っても無いチャンスである。嫌いな父と仕事が絡むのも嫌だったが、親子という枠を除けば大企業の大物である。仕事を選ぶほど自分も偉いわけではなかった。新商品である風邪薬のCMにモデルを使ったかったようだ。本来は知名度のあるタレント、女優、俳優が起用されるが奇をてらって素人に近いモデルを使おうという嘉納の提案だった。

冥もそれは悪くないと思った。モデルの女の子達にとってもテレビ

進出への大きな一歩となるし、視聴者も見慣れたタレントなどより興味が沸くかもしれないと思った。その一度目の打ち合わせに六本木にあるフレンチのレストランで父と会う事に決めた。しかし開発チームの重要な役割を担うスタッフの1人が辞表を出してきた事により、英将は説得の為に名古屋へ飛んだ。代理で来たのが嘉納 丈である。

元々は彼のアイデアであったから彼が来るのは自然な事だったが、彼と初めて2人で食事をするのに胸がドキドキしている自分に気付いた。その日の彼はベージュのパンツに青と白の入ったストライプのシャツという、いつもとは少し違ったカジュアルな風貌だった。いつものスーツ姿も俳優にしか見えないが、こうやってカジュアルな服を来た彼もまたいい。冥は完全にこの男に惹かれている事を自覚した。彼が話し掛けてきているのに気付いたのは、テーブル越しに自分の手の上に彼の手が重なってきた時であった。

「放心状態のような顔をしていますね。どうしました?」「い……いえ、ここどころ充分な睡眠がとれていないものですから……少しボーっとしてたのかもしれませんが……」とつさに言い訳すると、冥に向ってニコリと笑い、「それはいけませんね。美を扱う仕事なのですからゆっくりと睡眠を取って下さいね。お酒は飲まれませんか?」「あ、今日は車なので遠慮しておきます。普段は飲めるのですが……」「それならうちの社員にご自宅まで運転させましよう。帰りはタクシーを拾えばいいですから。」「あ、でも……」「構いません。貴方はモデル事務所の立派な経営者なんですから。」そう言うと嘉納は携帯電話で1人の部下を呼び出した。30分もするとレストラン内に現れ、冥が鍵を渡すと一礼して出て行った。

食事は素晴らしい物だった。彼が予約を取ったこのレストランに来るのは初めての事だった。自分も学生時代から有名なフレンチやイ

タリアンを巡った事もあるが、隠れ家のようなこのレストランが六本木にあるとは知らなかった。多くの女性とここで食事を共にしたのだろう。だが美味しいワインが適度に回ってそんな事も気にならなくなった。嘉納との食事は楽しかった。前半はCM起用のモデル達の条件を聞いて、あれやこれやという間に決まってしまった。後は嘉納がよく使うレストランやバー。ワインの話題。学生時代から趣味だという演劇鑑賞。その一つ一つが相手を飽きさせず、もつと話が聞きたいという気持ちにさせられた。仕事でもこうやって営業を取るのだろうか？異性ならイチコロで彼の虜になってしまうだろう。現に自分がそうなりかけている。

「すみません、お手洗いに行つてきます。すぐ戻りますから。」そう言つて彼が席を立つと彼の歩いていく背中を眺めながらある妄想をしていた。

（もし今日彼に誘われたらどうしようか。）高校の頃に付き合つたアメフトの彼氏以来、男を知らなかった。あの事件から男に興味がなくなった。誰もが下心みえみえで自分の容姿か家柄にしか興味を示してくる男は居なかつた。大学の頃も友人に薦められた男性と何度かデートを試してみたことはあるが心が動くことはなかつた。嘉納はボスの娘ということもあつて下心を隠しているのか？それはない。こう見えてもそういうことは自然と見抜くことが出来るようになっていた。どういふ魂胆で男性が自分に近づいてくるのか？彼の場合、仕事の話をしている時は真剣な表情からも見て分かるように、それ以外の魂胆は見えなかつた。プライベートの話をしている彼は頼れるお兄さんの顔をしていた。それも嫌らしい物ではなく爽やかでそれでいてホツとさせるような気分にしてくれる。

（お酒の力なのかな。ちょっと彼に心を奪われそうになっている。もし……今日彼に誘われたら……思い切つて行っちゃおうか

な。)

その時に彼の携帯が鳴り出した。レストランであったから音量は小さい物だったが、今の自分には爆音にも聞こえるくらい響いていた。なかなか鳴り止まなかったがやがて留守番電話になったのかその音は止まった。いけない事だとは分かっているも気付くとその電話を手にしてしまった。まだ彼がトイレから戻ってきていない事を確認すると、着信履歴を覗いた。知らない女性の名前だった。すぐに携帯を元の位置に戻すと少ししてから彼は席に戻ってきた。

「いやあ、意外にトイレが混んでて。あれ？どうかしましたか？」
「え・・・いえ。何でもありません。雰囲気の良いレストランにいい気分になっていました。」それは良かった。ここは僕もお気に入りの場所なんで冥さんも良かったら使ってくださいね。」

(初めて名前で呼ばれた。しかしそんな事より先程の女性は誰だったのだろう。仕事かもしれないし彼女かもしれない。今日は週末だ。彼ほどの男を世の女性が放っておくわけもない。ワインの力でどうにかしていた。甘い幻想を抱くのは止めよう。)

しばらくしてレストランを出るとタクシーを嘉納が拾ってくれた。タクシーの後部座席に乗ると嘉納がドアの所に立ち見送ってくれた。
「今日は本当に楽しかった。ボスから小さい頃の写真を拝見させてもらった事があるんですが、本当に綺麗になられましたね。」ニコリと微笑んでそれからドアは閉まった。

まず綺麗だと言われた事にドキドキした。しかしそれよりも小さい頃の写真？あの男がそんなものを持ち歩いてる訳もないし、おそらく冷えた親子関係を気遣ってとっさに嘘をついたのだろう。そうい

う思いやりに対しても冥は素直に嬉しかった。

CMの仕事依頼、嘉納と顔を合わせることは滅多になかった。月日は経ち、冥も1人の男と結婚した。26の頃だった。嘉納も披露宴に駆けつけてくれて祝ってくれた。その時は一瞬でも幸せだった。だがその旦那がやはり金目当てだったと気付いたのは結婚後少ししてからである。元々は出版会社の社員だったのだが、結婚してから義父と話したいと言い出した。内容は自分を如月帝国の重役にしてほしいというくだらないものだった。見た目がハンサムなだけで何の内容もない男だった。もちろん恋愛をしていた頃は細かいことによく気付いてくれる優しい男だったが、それも全て重役入りの為だったのかと考えると自分自身に情けなくなった。

次第に自分に対して暴力を振るうようになった。父にそれを話すと旦那を半殺しにしてやると意気込んだ。その後は思い出したくもない。

自分が唯一心を奪われた男性、嘉納 丈。彼も中身は自分が相手にしてきたような、くだらない男だったのだろうか。もう2度と男に心を許す事はないだろう。如月家の跡取は兄か弟達に任せればいい。

冥が歌舞伎町のホストの男と付き合うようになったのはそれからすぐの事だった。

如月 仁 前編

王子様が誕生した。それは誰が見ても赤子ながら整った顔立ちをしているのが分かった。

如月家には長男、長女が既に誕生しており英将の頭には長男の将太に後継ぎさせようと考えていた。次男の名前は仁と名付けられた。長男の名前は英将の将にちなんで名付けられたものだが、仁の名前は母の渚が付けた。

長男には如月家を背負っていくという使命があるが、次男にはそのような気苦労はさせたくなかった。人を思う心の優しい人間に育って欲しいという母の願いであった。成長していく度に彼の容姿は周囲を魅了した。姉の冥も美人で有名であったが、探せば見つかる程度の美人なのに対して彼の容姿は異性を虜にしてしまうような妖しさがあつた。将来は芸能界に売り出せば人気が出るだろうと英将は考えた。

幼い頃から運動神経が半端ではなかった。兄の将太が毎日の学習塾に通う日々とは対称に仁は勉強があまり好きではなかった。英将も仁の成績の悪さに絶句したが、幸い次男坊であつた為に目をつぶるしかなかった。それ以上に幼い頃からやっていたサッカーで頭角を現し、小学校6年生時には都内でも指折りの点取り屋に成長した。

私立のサッカー強豪校からスポーツ推薦の話が来た。それも複数である。中学から推薦でいけば頭が多少悪くても高校まで勉学の問題もないだろうと英将は喜んだ。仁のサッカーに対する情熱はすごいものだった。学校の教科書を開くことが無かつたのに対し、サッカーの専門書、プロサッカー選手のビデオ、過去のワールドカップや

ユーロカップなどの名試合を飽きる事無く見つづけた。

学校ではもちろん放課後に部活を外が暗くなるまで練習して、帰宅して夕食を済ませると庭でリフティングやパス、トラップの練習を毎日続けた。リフティングはともかくパスやドリブル、トラップ、シュートなどの練習は相手が必要だった。始めの頃は兄の将太が勉強の合間をぬって相手してくれたが、すぐに物足りなくなり父に頼むとプロのコーチを専属で付けてくれた。

2年生の頃には公式のトーナメント戦にもスタメンで出場するようになり、地区大会でも最優秀選手に選ばれるようになった。学校からは10年に1人の逸材と期待され、先輩達からも2年でレギュラーというおごりがないどころか、素直でレギュラーから落ちこぼれた先輩の相手をしてやるという優しい一面もあつた為に大変可愛がられた。

結局3年になるとキャプテンに昇格し、チームを全国大会のベスト8にまで引っ張って行った。推薦で高校まで上がると他校の女生徒から騒がれた。ルックスが際立ち、サッカーの天才ともなれば騒がれない訳がない。最大時には10人以上の彼女を持つというプレイボーイぶりを発揮した。とっかえひっかえ女を梯子している姿を母は良くは思わなかった。何度も女を泣かせてはいけないと説教されたものだが、父の英将はそんな仁を見て「あいつはもしかしたら将太よりも俺の血を色濃く受け継いだのかもしれない」と密かに期待するようになった。

1年生でサッカー強豪校のレギュラーで、将来は日本もサッカーのプロ化に向って動いていた為にプロ選手への道も夢ではなかった。順風万番だった人生はほんの些細な乱れが原因で崩れ去ることになる。

軽い遊びで付き合ったはずの少女の兄がチンピラだった。

仁は部活の練習後、帰宅途中にあるゲームセンターで格闘ゲームをやるのが日課になっていた。いつものゲーム機に着くと後方に数人の男達が自分を取り囲んでいた。嫌な予感はそのものの、何か事があれば店の店員が警察に通報するだろうと予測し、何事もないようにゲームに勤しんだ。

ゲーム内の相手をやっつけたと同時にゲーム機のコンセントを1人のチンピラ風の男が抜いた。呆然としていると残りの男達が下品な笑みを浮かべていた。

「おう。お前なかなか上手いじゃねえか。現実もこういう風に相手を倒せたらいいんだけどな。」コンセントを抜いた本人が仁を見下ろしながら喋りかけてきた。即座に席を立つと出口の方へ向おうとした。足をかけられ躓いた。男達の笑い声が聞こえてくる。

「勘弁してくれよ。カツアゲなら他を当たってくれ。俺はただゲームがしたかったんだ。」言い終ると顔面を強く蹴られた。店員は全て見て見ぬ振りをしている。電話で通報するにも2人の男が店員を見張っている為に動けないのだ。

「お前な？ただゲームがしたかったっていうのと一緒に、うちの妹もただやりたかっただけなんだろう？」そう言うと腹の辺りを蹴られた。「まあ、ここじゃなんだからちよつと来いよ。」2人の屈強な体の男達に両腕を捕まれ引きずられていった。外に出た瞬間に助けを求める為、大声で周囲に向かって叫んだ。通り過ぎていくサラリーマン達やOL、他校生、主婦。全てが係わり合いにならない為に視線をそらした。それでも仁は精一杯叫んだ。遂には諦めて男達

に従って付いていった。

着いた先は作業後の工事現場だった。相手は総勢5名。1人はコンセントを抜いた男。2人は自分を引つ張ってきたガタイのいい男達。残りの2人は見張りや車の運転だけが取り得のような冴えないチンピラ達。

「さつきも少し触れたがお前がやり捨てした女は俺の妹だ。」「誰の事だ?」「お前、妹の他に何人も心当たりあるって面してるな?俺達にもお前の女わけてくれよ。」「ひ弱そうなチンピラ1人がこれ以下とないニヤケ面で喋ってきた。」「俺の妹は加代子。西島加代子だ。」「……確かにあんたの妹とそういう関係になったよ。だけれどやり捨てって言うのは納得できねえ。」「2発立て続けに殴られた。

「お前に無理矢理ホテルに連れ込まれたとよ。泣いて俺にすがってきたんだ。まさか俺の妹が嘘をついてるとでも言いたいのか?」「ああ、絶対嘘だ。向こうから酔った勢いで誘ってきたんだ。」「今度は馬乗りになられて5発ほど殴られた。もう痛いという感覚が麻痺してきた。何発殴られたか分からないが酷い顔になってるだろう。こんなんじゃ家にも学校にも行けないとだけ思った。

「俺の妹がそんな立ちんぼの売春婦のような真似するわけないだろう。いい加減な事言ってんじゃねえぞ!」「口には出さなかったが、お前の妹なら納得だと仁は思った。」「お前、サッカーの有名選手なんだって?女泣かせの面してサッカーの才能まであるってか?いいよな、エリートさんは。」「直後に右足に激痛が走った。鉄パイプで1人の男が仁の右足をめがけて振り下ろしたのである。

「ぐあ!!!」右足を両手で抱えて転げまわった。「いい声だ。妹に

報告したらさぞ喜ぶだろうよ。」「……頼む……足だけは止めてくれ……。もうサッカーが出来なくなっちまう。チームの皆にも迷惑がかかるし……。なあ、頼む。」次に顔を蹴り上げられた。後の事はよく覚えていない。気付いた時には自分の部屋で目を覚ましたからだ。

兄も姉も弟も館にいる全ての人間が心配そうな顔で自分を見ていた。一人、父の姿だけはなかった。元々父とは会話は少なかった。ただサッカーの才能はとても喜んでくれた。サッカーに関わることなら何でも協力してくれた。足は複雑骨折だった。医者の診断ではサッカーをするまでに半年以上は安静にしなければいけないとの事だ。

全てを失ったと思った。自分にとってサッカーとは人生だった。どんな嫌な事があってもボールを蹴ってる時だけは忘れることが出来た。もう元のプレイが出来るようになるのは1年近くはかかるだろう。チームの監督はそれでも自分を待つとだけ言ってくれた。それが嬉しかったのか悲しかったのか分からないが涙が止まらなかった。

目が覚めてから2日後、父が部屋に入ってきた。

「生きてて儲けものだ。医者はああ言ってたがもうサッカーは出来ない体だ。」「ああ、俺もそんな気がしてた。」「輝ける未来をチンピラ風情がぶち壊したという事だ。そのチンピラ達と周りの人間にも、全てお前が受けた絶望と同じ物を与えてやろう。」「そんな事をしても自分の気は晴れないと理解していたが、若さゆえかあのチンピラ達に絶望を与えたいという意見は一致した。

父には自分のサッカー人生を壊したチンピラの妹の話全て伝えた。怒りのせいかな、言う必要もない事まで伝えた。

「そうか、女遊びが原因か。ま、俺の血を継いだと言うっしかないな。将太や光寿と違ってお前は男兄弟の中で俺が一番似ている。」それがどうしたと仁は思っていた。ただ、あのチンピラ達の絶叫が聞きたい。あの女を皆の見ている前で陵辱してやりたい。だが悔しい事に体が動ける状態ではない。虫の好かない父親だが、今奴らに復讐するのにこれだけ頼もしい父親は居ない。

最初に絡まれたゲームセンター。連れて行かれた工事現場跡。男達の服装と特徴。そしてリーダー格の西島加代子の兄。これだけで十分に割り出せた。まずは妹からだった。なにせ通っている女子高まで分かっているのである。校門の前で父の子飼いである男が加代子に喋りかけた。放課後、多くの女生徒が校門から出てくる中で、加代子は何故自分が大人の男性に呼び止められたか分かっていたいなかった。実はもう1人車で待機させてあった。

「西島加代子さんですね？少しお話が聞きたいのですが・・・」「すみませんけど私、彼氏と待ち合わせているから。」「そういう訳にはいきません。なにせ人1人の人間が貴女のせいで重症を負ったのですから。」「重症？誰が？」「如月仁という男性はご存知でしょうか？」明らかに加代子の目が警戒の色に写った。

「誰だか分からないけどあたしに手を出したら兄が黙ってないよ。」「チンピラのお兄様の事ですか？丁度良かった。その方にも用事があるのです。今彼は何処にいますか？」「大声出してもいいの？」「構いませんとも。貴女が不利になるだけの事ですから。我々は何処の誰かお宅の教師に説明する事は出来ませんが、お宅は自分の教師に如月 仁様に対しての暴行事件をどう説明されますか？なんなら私が大声で説明してみせましょうか？今すぐにでも！」

加代子の顔が引きつっているのが分かった。父の子飼いと言われる男

は刑事崩れだった。加代子と対面している男の外見は一般人とそう変わらない。体格が人より恵まれているだけだ。もう1人は校門から100メートルほど離れた所に車を停車させている。この運転手はヤクザ崩れである。父からトラブルの時の為に金で飼われている。加代子は大人しく男に従い車まで付いて行った。

車が走り出すと同時に加代子は何故大人しく自分が従ってしまったのか後悔した。だが遅かった。町から遠く離れた所へ車は無情にも進んでいく。気付くとあるマンションの前に車は停まった。

「ここは・・・」「ここに仁様が居られます。ささ、こちらへ。」もう仁に会って詫びるしか方法がなかった。何とかして兄にこの場所を教えなければ自分はどうなるか分かったもんじゃない。しかし先程校門の所でもこの男は兄を怖がっているように見えなかった。運転手の男は兄と同じ香りがした。多分ヤクザだろう。マンションの9階の一部屋に入ると車椅子に乗った仁が笑顔で迎えた。

「よう、久しぶり。」「仁・・・あの・・・何て言ったらいいか・・・」「久しぶりに会ったのに何でそんな顔してるんだ？何かやましい事でもあったのか？」「もうサッカーが出来ない体になってしまったんだよね・・・」「お前が頼んだんだからな。当たり前だろう。」「仁の顔は明らかに狂気に満ちていた。」

「私はただ！仁が他の女といちゃいちゃしてるのが我慢できなかっただけよ！私はその他大勢の女にはなりたくなかった！」「加代子、俺はな、サッカー界では天才と謳われていた。自分自身でも満更じやなかったよ。勉強は苦手だったがサッカーなら自分の人生を切り開けると思っていたよ。」「分かるわ、で・・・でも・・・」「黙れ、売春婦が。お前は俺を酒に酔わせて無理やりホテルに誘ったよな？俺がいつお前を無理やりホテルへ連れ込んだ？お前の意思で俺を連

れて行ったよな？」「それでも言わないと……兄が……」「兄はお前の事を清纯な妹だと思ってるんだろ。あんなカスの妹なんだからそんな訳ねえのにな。」「兄の悪口は言わないで……あんなんでも私には……」加代子は涙を流し始めていた。

「一応言つとくが、今の俺に涙とか言い訳は一切通用しない。俺は人生を壊された。だからお前の人生も、お前の兄も、そして周りに居た全てのチンピラ達にも代償を払ってもらう。」「そんな事しても貴方の為にならないわ。」「お前自分が助かりたいからって奇麗事言つなよ。もうお前はアウトだ。諦める。その前にお前の兄の居場所を教えてもらう。」「出来ない……」「いいんだよ。自分から言いたくなるから。その内な。」「

「三浦！」そう呼ぶと刑事くずれの男が反応した。「お前最近たまたつてるだろ？こいつ今から好きにしていぞ。」「あ、いや……そこまでは旦那様からは……」「俺の意見は親父の意見と同等だ。これで文句を言うくらいなら親父は最初から復讐にお前等を駆り出す事もなかったはずだ。」「はあ。あまり気が進みませんが……」「とか言つて股間がもう爆発しそうなんじゃないか？女子高生だぞ？」

三浦は加代子をベッドに押し倒すと無理やり制服を剥ぎ取った。泣き叫ぶ加代子を仁はビデオカメラで撮影を始めた。服を脱がされながら加代子は仁に向かって睨みつけた。

「あなた、絶対殺してやるから……」仁は口元を綻ばせながら撮影を楽しんでいた。陵辱は一度で終わらなかつた。「三浦、田之上と交代しろ。今度は車でお前が待機だ。」「はい。」「しばらくすると田之上と呼ばれる男が部屋に入ってきた。先程のヤクザ風の男だ。仁は車椅子に乗っている。三浦が出て行ってから田之上が来るまで

逃げ出すチャンスはあった。車椅子の仁など問題にならない。ただ仁は驚く事に銃を加代子へ向けていた。何故素人が銃など持っているのか。

次は田之上にレイプされた。その模様も全てビデオ撮影されていた。加代子はもう何も感じなかった。「おい、泣き叫べ。面白くねえよ。」諦めた表情の加代子は仁に向かって言った。「仁、あんた今度は車椅子じゃ済まないよ。」「いいね、今回、俺を痛めつける依頼をした時もそんなドスの聞いた声で兄におねだりしたんだろ？田之上、そいつ少し痛めつける。多少ならいい。」田之上は三浦とは違い仁に対して従順だった。拳を真上から加代子の鼻に振り下ろした。

「ぎゃ！」悲鳴が部屋中に伝わった。「いいねえ、迫真の演技だ。最高のAV女優だなあ。」鼻血を流しながらも仁を睨みつけた。「あんた、兄はヤクザよ。」「自慢にならねえよ。お前を犯してる田之上もヤクザだよ。破門されてるけどよ、なあ、田之上。」田之上は返事はせずニヤリとただだった。「好きなだけ犯せばいいわ犯した分だけ、あんた達全部兄に殺してもらおうから！」田之上の手が加代子の首元を掴んだ。苦痛に歪んだ加代子の顔を仁が撮影する。少し経つと首元から手を離れた。「ゴホッ！ゴホッ！！」加代子が唾を吐き出した。「汚ねえよ。」田之上が一言漏らしながら鼻へ向けて再び拳を振り下ろした。

「あははは！いいぞ、最高の作品だ。題名は・・・そうだな。加代子16歳、こんなのも嫌いじゃない。でどうだ？安っぽさがいいだろ？」「あんたクズだね・・・」泣きながら仁を睨みつけた。「お前の兄とどっちがクズだ？言ってみろ？」「私は絶対兄の居場所は吐かないから。」田之上の拳がまた鼻にめがけて落ちてきた。「居場所は吐かなくても鼻血噴いてんじゃん。我慢大会だな、こうなる」と。「女子高生拉致監禁。レイプ。障害。脅迫。あんた人生終わ

「お前1つ忘れてるぞ。殺人が抜けてるって!」「!?!」
「なあ、生きて帰れると思ったの?居場所言わなかったらお前の価値なんてねえよ。あ、女優が初めてで最後の作品だって事でこのビデオは価値を増すかもな。それもいいな。」

「悪魔……」
「悪魔に変えたのはお前だつて。お前の兄はどうしてやるのかな?それと世の中は如月家を罰する事は出来ない。これが力だよ。世が世ならお前は大名を怒らせたようなもんだ。」
「お願い……もう勘弁して……」
「やっと分かったか?兄は何処だ?」

その頃、西島徹は足立区にあるアパートに居た。

如月 仁 後編

一本の電話が部屋中に鳴り響いた。

ヤクザと言ってもチンピラ程度じゃ食べていけない。悲しい話だがアルバイトでもしなければ生活すら出来ないのだ。

家は裕福な方だった。現に妹は私立の高校に通っている。自分と違って頭が良かったから出来れば自分とは真逆の人生を送ってほしいものだ。不動産を営む父親に反発したのは16の頃だった。喧嘩に明け暮れて地元の暴走族の集いにもちよくちよく参加した。

その暴走族の出身である先輩が今の組を紹介してくれた。始めはいい服着て、いい物を食べて、いい女が抱けるといっただけで入った世界だが、美味しい汁を吸えるのは上だけで下っ端は泥水舐めてでもシノギをこなさなければならなかった。

よくヤクザの上の人は温厚で話の分かる人間が多いというが、そんなものは当たり前である。自分に余裕があるから他人に優しくする余裕も出てくる。チンピラは上からのノルマを果たさなければどうなるか分かったもんじやない。自然と牙を向けないと自分がやられるのである。

工場のアルバイトも最近は休みがちだ。今鳴ってる電話もバイト先か借金の催促だろう。俺は果たしてこのままでいいのか？いい訳がない。それは分かっているが学もなく、芸もない自分はヤクザ家業がお似合いなのだろう。

そのヤクザの世界だってこれからは学がなければ上には行けない。

親に反発せず黙って大学まで出ていれば、少なくとも今のような現状にはなつてなかつただろう。

電話が1回切れて数分してからまた鳴り出した。

「うるせえな……」無視して冷蔵庫から缶ビールを取り出すと一気にそれを飲み込んだ。一飲みで缶の半分以上を空けた。テレビをつけるとくだらない再放送のドラマが放送していた。別に興味は無かったが電話が鳴っている間、なんとなくボーッと観ていようと思つた。

あまりにも電話がしつこかつた。この時間だとバイト先からではなさそうだ。いつもは1回で鳴り止むはずだ。借金取りの電話の可能性が高かつたが、何となく出てしまった。

「……もしもし。」「……お兄ちゃん?」「何だ、加代子か。驚かせやがって……」「この時間に家に居るって事は……またバイト行ってないの?」「気分が悪いだけだ。それよりこんな時間に電話なんてどうした?珍しいな。小遣いが欲しいのか?今苦しいから無理だな。へへ。」

「今……ある人と一緒なんだけど……」「は?誰だ?」「俺だよ。」急に話し手が男に替わつた。「誰だ、てめえ。」「冷たい事言つなよ。俺の人生ぶち壊したくせに。」「あ?もしかして……てめえ、妹と何処に居やがる!今から行ってぶちのめしてやるよ!」「焦るなよ。こつちもお前と会いたいんだ。家は何処だ?」「こつちから行ってやるよ!場所は何処だ?妹に手出してやがつたらお前の命は無いからな。」「俺は口は出しても手は出してないよ。ま、手遅れだがな。」「はあ?」「いや、こつちの話だ。まあてめえのオンボロ小屋に行くのも気が引けるから待ち合わせって事でどうだ

？」「上等だ！」「お兄ちゃん！来ちゃ駄目！」「加代子！」「勝手に発言するんじゃないよ……おう、悪い悪い。で、お前のオンボロ小屋が西新井にあるんだよな？」「それがどうした？殺すぞ、てめえ。」「そんな生意気な口聞いたらお前の妹をこの場で殺すぞ。」「絶対に手を出さんじゃないぞ。」「だったら立場を考えろ。その悪い頭でよ。」「……手は……出さないでください……」

「やれば出来るじゃねえか。じゃ、今から3時間後に俺を可愛がってくれた工事現場に來い。残りのメンバーも全員連れて來い。これが条件だ。」「他の奴らは関係ねえ。」「俺の人生を壊したのに関係ねえだと？お前の妹をどうしてやるうかな。」「分かった……3時間後だな？」「そうだ。じゃあな。」

電話が突然切れた。受話器に向って叫びつづけたが後の祭りだった。電話を握り締めたまま徹は立ち尽くしていた。

日が暮れる頃に徹達は例の工事現場に辿りついた。

「なあ、俺達全員呼び出すって事は相当おつかない奴を連れてるに違いねえ。」「ひ弱そうな男が徹に心配そうに言った。」「哲。びびってんじゃねえぞ。俺等5人はガキの頃から誰にも負けなかつただろう。覚えてるか？中3の時に残留孤児の奴らに拉致られたのを。」「あの時はさすがに終わったかと思つたな。」「下品な笑みでもう1人の達夫という線の細い男が答えた。」「ああ。3人まとめてぶつ殺されると思つたが賢次と郁夫が日本刀持って助けてくれたよな。」「徹は言いながらガタイのいい男2人に視線を向けた。

「あいつ等の根性は普通の日本人とは比べ物にならんからな。日本刀持つてても不安だつたぜ。」「賢次と呼ばれる男はその時を思い出すように言った。」「あの野郎、あれだけ痛めつけられても俺等を呼び出したんだろ？必ず厄介な奴を連れてるはずだ。でも大丈夫。俺

の兄貴が駅前のパチンコ屋で遊んでる。最悪兄貴を呼んだらあいつも終わりだろう。」徹が自信に満ち溢れた表情で皆を安心させた。

「しかし徹が筋者で良かったぜ。誰ともめてもお前の兄貴には逆らえないもんな。」達夫が安堵した表情で煙草に火を点けた。「筋者って言ってもな・俺は見習いだし。給料すら碌にねえ。何をやってても半端もんだけど、この稼業でいつかは自分の組を立ち上げてやるよ。」その時は俺等は幹部にしてくれんのか?」郁夫が笑いながら尋ねた。「ああ、お前等はダントツで幹部候補だ。どの暴走族の喧嘩自慢達もお前と賢次にはお手上げだったもんな。」そんな話をしてしているとフルスモークの黒いセダンが近くに停車した。

「あれか。」徹がその車を睨みつけるように凝視した。中から屈強な体をした男が運転席から降りて、助手席に後部座席のドアを開けて折りたたみの車椅子を横に添えた。直後に仁が痛々しい姿で男に支えながら車椅子に乗り移った。しかし加代子の姿が何処にも見当たらない。

田之上が車椅子を押しながら2人は5人の前に現れた。「よう、加代子はどうした?その冴えない面した男がお前を守ってくれるのか?」「田之上、馬鹿にされてんぞ?」仁は車椅子から徹の方へ視線を向けながら言った。「構いませんよ。どうせ冴えない面してんのは生まれつきですから。」5人が一斉に笑うと哲が前に出てきて仁を見下ろした。哲と達夫は自分たちが優勢だと分かるというも態度がでかくなった。喧嘩では頼りないが悪知恵は働く。そして徹に対しては常に従順だった。

「おい、お坊ちやま君。サッカーが駄目になったから今度は不良の真似事か?やめとけよ。向いてない事やっても時間の無駄だぞ。」

「お前、絶対この中で金魚の糞だろ?喧嘩弱そうだもんな。1人だ

「つたら絶対そんな強気な事言えないタイプだろうな。」賢次と郁夫が一齐に笑った。「おいおい、哲、お坊ちゃまに馬鹿にされてんじやねえよ。」徹も言いながら笑っていた。

「てめえ・・・また懲りずに痛い思いをしたいみたいだな?」「おいおい、無理すんなよ。恥ずかしいからって自分の力量を超える発言はやめとけ。なあ、田之上。」「ふふふ。」「おい、てめえも笑ってんじやねえよ、間抜け面がよ。」「なあ、雑魚。あ、名前知らねえから雑魚って呼ばせてもらうよ。田之上に喧嘩売るのはやめとけ。お前だつて仲間が居ないと俺1人にも喧嘩売れねえだろうが。俺はな、厳しい練習に耐えてきたんだ。そこの不良には負けねえよ。」哲は顔を真っ赤にして仁を睨みつけていた。

そこで徹が哲の前に出て仁に向って言い放った。

「俺はこう見えても隅田会の人間だ。お前のような坊ちゃんでも知ってるだろ?」仁は田之上に顔を向けて言った。「だって。こんなカスでも隅田会みたいな大組織に入れるもんなのか?甘いな、極道の世界も。」「いえ、どうせチンピラでしょう。おい、徹君って言ったかな?バツジ持つてるか?正式に認められた人間なら持つてるよな?ま、どうせこんな時間にこんなカス連中引き連れて暇を持て余してるんだから大した人間でもないだろうが。」「隅田会舐めてるのか?ああ!」「だから隅田会は舐めてねえけどお前は大したことないだろ?」言った瞬間に徹の右ストレートが田之上の顎を的確に捕えた。

田之上は何も無かったような表情で笑っていた。徹は背中に嫌な汗が流れたのが分かった。賢次や郁夫にはサシで敵わないが、これも地元では有名な不良だった。自分の右ストレートをまともに喰らって立ってられた人間は今まで居なかった。

「お前さ、田之上は破門されたとは言え、お前と違って本物の極道だったんだぜ。レベルが違うから止めとけ。」上等だよ。賢次！この野郎をぶっ殺せ！！」賢次は田之上に負けない体格をしていた。田之上の目の前に立ちはだかると左ジャブを軽く放った。まともに田之上の鼻に当たると渾身の右ストレートをもう一度鼻に向けて放った。

直後に徹を始めとする4人の少年達は目の前の光景を疑った。右ストレートを放ったはずの賢次が田之上の足元に転がっていた。カウンターパンチがまともに賢次の顔面を捕えたのである。

「だから言つたら？田之上はそこらの不良程度じゃ話にならないって。もつとまともな奴居ないのか？」郁夫が徹の耳元で囁いた。「徹、お前の兄貴って奴を今すぐ呼べ。俺や賢次では相手にならねえ。俺が時間を稼ぐから早く！」何をコソコソやってんだ？本当に弱いな、お前等。」「あんま調子に乗ってんじゃねえぞ。おい、田之上とか言つたな。確かに強いよ。それは認める。お前の言つた通り俺は正式な隅田会のメンバーじゃねえ。けどな、俺の兄貴がこの近くに居るんだよ。呼んでもいいか？それで無理なら諦めるぜ、俺は。」田之上は口元を緩ませて右手を広げて勝手に呼べというような仕草を徹に無言で伝えた。

徹が電話で兄貴分と話し終えて仁を見下ろした。「お前等、本当のヤクザが今から来る。この人は隅田会でも幹部候補ナンバー1と言われてる人だ。終わったぞ。それと加代子の姿が見当たらんがあれは何処だ？」「そこらのホテルでうちの三浦って奴とよろしくやってるんじゃねえか？お前の妹・・・相当好き者だぜ。最初は嫌がってたのに今じゃ俺らのダッチワイフ状態だからな。」仁が人とは思えない表情で徹を見つめた。「その話が本当ならお前は絶対に生

かしちゃおかない。あいつは俺の宝物だ。」「宝物なら大事に閉まっておくもんだぜ。あんなビッチ、野放しにしやがって。だから俺のサッカー人生の幕が下りたんだからな。」「もう一度ビッチって言ってみやがれ!」「bitch、bitch、jap、jap、ranranran」陽気に仁は歌いだした。それを見て田之上が爆笑していた。

徹が掴みかかろうとするのを郁夫が抑えた。哲や達夫が不安そうな顔でそれを見守っている。「安心しろ。妹はうちの三浦って奴とあの車の後部座席に居るよ。ただし鉄砲をお前の妹の脇腹辺りに向けてるがな。」「何もしてねえだろうな?」「後で妹に聞いてみるよ。その代わり、お前が生きてたらの話だけだな。」「

10分ほどすると真っ白なベンツが工事現場脇に停まった。中からオールバックの40代と思われる男が出てきた。角刈りの青年が脇に付いてこちらへゆっくりと歩いてきた。

「おい、徹。こいつらか?お前よお、もう少しで確変が当たるところだったのに・・・いちいち呼び出すじゃねえよ。ま、それが目的で来たんだけどな。えっと、この車椅子の子が仁君か。お金持ちなんだって?今日はたつぷりとお前の親から絞りとってやるからな。」「4人の少年達はもう大丈夫だと言わんばかりの笑みを浮かべていた。」「

「田之上、このおっさん知ってるか?うちの親父から金をふんだくられるほど大物なのか?」「さあ、ヤクザ稼業を長年やってましたが見た事もない面ですわ。どうせ小物でしょう。」「おい、兄ちゃん。てめえも同業者かい?お前みたいな雑魚が俺を知ってる訳ないだろうから教えてやるよ。俺は隅田会本部、板倉つてもんだ。」「誰だそれ?」「田之上が馬鹿にした顔で笑った。」「隅田に喧嘩売ってるのか?」「隅田の人間は看板で喧嘩するのかい?本当に強い人間なら

俺に今頃突つかかってきてるだろう、最初からな。」脇に居た角刈りの青年が銃を取り出した。「これでどうだ？まだ強気な発言が出来たらいいんだが。」板倉は田之上を笑いながら見た。

「おい、徹。」仁が呼びかけた。「てめえ、この期に及んで俺の名前を呼び捨てしてんじゃねえぞ。」「あ、いやいや。気を使って教えてやろうと思っただが……別に俺等2人を殺してもいいんだけどよ。それじゃうちの親父から金は取れねえよと思っただが……心配するな小僧。ヤクザが人殺すのに躊躇してたらヤクザじゃねえよ。」「そんなにやる気満々なら何で関西勢の進出を指咥えて見るの？やっぱあんたも関西ヤクザは怖い？中国人マフィアにも頭があらねえじゃん。」「そんなに死にたいのか？」「サッカー出来なくなつた時点で俺は死んだよ。これからは新生、如月仁の誕生だ。」

「如月……お前……もしかして如月製薬のガキとか言うんじやねえだろうな？」「どうしたの？だつたらお前に不都合な事でもあるのか？」「飯田！銃を下ろせ。」「え？でも……」「角刈りの飯田と呼ばれる男は躊躇した。「そいつを弾いたら俺等どこるか組自体の存続も危ういぜ。おい！徹！」「え、はい！」「てめえ……もう少しで隅田が吹っ飛ぶところだつたじゃねえか。何で如月製薬のガキだつて言わなかつた？」「いや、製薬会社の社長だからつてびびる事ないつすよ！」「お前はそんな事だからいつまで経つても半端もんなんだよ。こいつのおやつさんはうちではどうにもならねえ。一声で万の極道を動かせるくらいの権力を持つてる。俺は降りたぜ。平和にパチンコでもやってくるわ。後はお前等で何とかしろ。飯田！行くぞ！」「何もなかつたように板倉達は車へ向つた。」

「おい、弟分を放っておいてもいいのかい？こいつの妹もまだ俺たちに囚われたまんまなんだぞ。」田之上が板倉の背中に向けて言っ

た。「俺はな、この地位に上るまでにお前の想像を絶する苦勞をしてきたんだ。それをこのガキや妹の為に捨てられるかよ。好きになな。」振り返りながら言うと板倉は車へ歩いて行った。徹の両目は大きく見開いて板倉の方を見つめていた。

「兄貴・・・俺を見捨てた・・・？」「徹君。1つ勉強になつただろう。俺もな、お前みたいに純粹に生きてた時があんだよ。でもな、映画のような任侠は今の時代にはねえよ。俺も金の亡者になつた兄貴に捨てられたんだよ。最も俺の場合はそいつの耳を食いちぎつてやつたけどな。」徹はその場に両膝をついてしゃがみ込んだ。

「徹。お前も可愛そうな奴なんだな。お前に1つチャンスをやるとお前等5人共が俺に忠誠を誓うなら今回の事は大目に見てやつてもいい。妹も無事に帰してやる。どうする？」哲が慌てて徹の方へ駆け寄つた。「なあ、徹・・・この人の言う通りにしようぜ。どの道俺らに生き延びるチャンスはねえって・・・」徹は立ち上がると哲を殴りつけた。「俺はな！どんなに惨めでもこいつらに媚びる事なんてしねえ！」田之上が徹の腹に右フックを入れた。「うう・・・」
「徹は倒れこんだ。倒れこみながら泣いた。「悔しいか？俺の気持ち少しでも分かったか？」仁は満足そうに微笑んだ。残りの3人が土下座して仁に詫びを入れた。「お願いします！何でもしますからこいつとこいつの妹を助けて下さい！」「てめえら・・・勝手な事言つてんじゃねえ・・・ぞ・・・」「徹！諦める！俺等じゃどうしようもねえんだよ！踏んだらいけない尻尾を踏んじまったんだよ、俺等・・・」郁夫が徹に向つて叫んだ。

「お前の仲間はこの言つてるがどうする？こいつ等は本当にお前の事を心配して言ってくれてんだよ。本当の仲間まで捨てる事はねえわな。」田之上が徹を諭すように言った。「くっ・・・」徹は地面に這いつくばりながら泣いた。「今日一日ゆっくり考える。妹は先

に返してやるよ。「仁はフルスモークの車に向って右手を上げた。直後に中から男と加代子が出てきた。

「加代子！」徹は叫んだ。ゆっくりとこちらへ近づいてきた。「話はずきましたか？」三浦が穏やかな表情で仁の前に立った。「お兄ちゃん……ごめんなさい……」徹の胸で泣きじゃくる加代子を抱きしめた。「何もされなかったか？加代子……」「……うん……大丈夫……」「本当だな？本当に何もないんだな？」何もなかったどころか徹底的なまでの陵辱を受けた。しかしそれを兄に今言ってもどうなる訳でもなかった。

「とりあえず今日は帰ってもいいよ。俺も大体気が晴れた。それと徹、落ち着いたら連絡してこい。その時は他の4人も全員連れて来い。」「俺等を……どうする気だ……？」「徹は怪訝そうな表情で尋ねた。「食うわけじゃねえ。おまえ等は俺の人生を潰した。よって俺の人生を修復する義務がある。」「修復って……？」「早い話、俺の手足になってもらう。手足って聞くと悪いイメージが湧くかも知れんが、悪いようにはしない。ヤクザ稼業も辞める。俺があの板倉って奴に話は通しておく。お前の妹が俺の連絡先を知ってるから必ず連絡するんだぞ。」「……分かった……」

徹から連絡が来たのは2日後だった。

如月 光寿

如月光寿は4人兄弟の末っ子として生まれた。既に2人の兄達が居た為に会社を継ぐ必要も無かった。

幼少から口数が少なく物静かだった為に次男の仁や長女の冥とも合わなかった。長男の将太にしても特別仲が良い訳ではなく、年も離れていた為に兄弟達は光寿については何も知る事無く育ってきたと言ってもいい。

父の英将などは「こいつは本当に俺の子か？」と何度も側近の人間や妻に言ったものである。ただ母である渚だけは彼の理解者であった。渚は子供全員に平等の愛を与えた。しかし、人間というものは家族、兄弟であつても相性というものがある。渚が一番可愛がったのは光寿かも知れない。自分の体が弱つてきた頃に出来た子であるから一層可愛いし、性格も一番おだやかで何より花や動物を可愛がる姿を見ていると、渚の体を侵している病気の事も忘れることができた。例え一瞬でも。

容姿は父、母を丁度ミックスした感じだった。将太はどちらかと言うと父似である。冥と仁は母似だ。ただし、上3人の性格は父から濃く遺伝していると思われるが、光寿だけは母親からその優しさを受け継いでいる。頭も悪くない。どちらかと言えばスポーツなどは嫌いだった。スポーツが嫌いというより人と争うことを嫌った。末っ子なので生き馬の目を抜くような父の会社には無理に入る必要もなかったし、幼い頃から動物に囲まれて暮らしたいと願うようになった。

その光寿が中学生の頃から獣医の見習いのバイトを始めたのは自然

な成り行きだった。彼より美男子な同級生はいくらか居たが何故か彼が一番もてた。彼はもてている自覚も無ければ異性に興味がなかった。かといって同性愛でもなく、ただ人と関わるのを嫌った。当然男子生徒からは敬遠されるし、光寿をもてはやしていた女生徒達も次第に彼の存在を意識しなくなっていた。唯一彼の幼少からの幼馴染である美咲に対してだけは何とかコミュニケーションが取る事が出来た。理由は彼女の父である松山司郎が獣医であり、動物好きな光寿はよく美咲の家に通った。目当ては動物である。司郎も動物を心の底から可愛がる光寿がまた可愛かった。

娘の美咲から聞く所によると他の生徒達はもちろん、教師や他の家族に対しても心を閉ざしているという。唯一会話をする美咲自身も腹の底が見えないようだ。診察室を訪れては何でも手伝いたいと懇願する光寿を見ていて、美咲の言う事が信じられなかった。やはり動物にしか興味が無いのだろうか？美咲は理解出来ないようだが、司郎は光寿の気持ち少しは分かった。自分自身も若い頃から他人と接するのが得意な方ではなかった。人間は生まれつきそれぞれの性格がある。これは一生変わらないものと環境や訓練で変わるものがある。

美咲は夏休みの思い出や旅行に行った事など楽しそうに語る。しかし光寿は世界にはこんな珍種の生き物が居るだとか動物園に行った話だとか、全てが動物絡みの話しかしなかった。獣医の司郎としてはそんな光寿が可愛いのだが、まだ若いのだからもつと彼は人とも接する事が必要だと光寿に説いた。彼は司郎の言う事には一応耳を傾ける。だがやはり他人とは一線を引きたいようだった。何度か家族の事も聞いてみたが彼は苦しそうな表情をするだけだった。もう何年もその事には触れていない。高校生になると本格的に司郎の助手を勤めるようになった。彼の助手としての成長はすごいものだった。病は気からというのが動物に対しても愛情を持って接することを

しなければ、例え知識が豊富でもこの仕事は勤まらないと思つて
いた。彼はその点で天性のものを持つていた。怪我や病気で運ばれて
くる犬、猫、小鳥などどんな動物達とも心を通わせる事が出来た。
言葉が通じなくても気持ちで会話するのである。プロである司郎も
当然それは分かつていたが、動物達からの信頼という意味では光寿
に敵わなかった。

彼は動物が嬉しそうだったり悲しんでいたり喜怒哀楽を読み取る
のが天才的であつた。彼にそれを褒めると友達になればすぐにそん
な事は分かれると満更でもない笑顔を浮かべた。その能力を何故人に
対しては發揮出来ないのかという野暮な質問を彼にはしなかつた。
やはり人間向き不向きがあるのである。娘の美咲が光寿に友達以上
の感情があるのを父の司郎は知つていた。父としては何とも微妙な
気持ちだつたが、光寿が相手なら不満はなかつた。むしろ彼等がく
つついてくれれば願つたり叶つたりである。

しかし肝心の光寿は異性に興味を示さなかつた。美咲とは会話をす
るとはいえ、中学2年の頃に2人で動物園に行つた時も彼は動物に
夢中で美咲が不機嫌で帰つてきたのを覚えてる。しかし美咲も自
分に似て頑固であり、周りの友達が高校生になると皆彼氏を作つて
いったが、光寿以外の男には見向きもしなかつた。可愛らしい顔を
していたから多くの男子生徒から人気があつたが、全て好きな人が
居ると突っぱねてきた。そんな健気な娘を見ていると何とか光寿と
は上手くいつて欲しいという父の願ひがあるが、彼には動物しか見
えてなかつた。

高校3年生になる頃に大学へは進学せず、ここで働きたいと言つて
きた。

「光寿。免許もなく獣医にはなれないんだ。」いつから彼の事を光

寿と呼び捨てにするようになったかは、はっきりと覚えていないがそれだけ自分と濃密に接しているのだと分かった。「僕は先生の下で勉強して資格を取ります。」「いや、まず獣医学を儲けてある大学を卒業しなければならぬんだ。」「獣医になるのに夢中でそんな事考えていませんでした・・・。」「獣医になるのにそんな事も調べなかつたのか？頭はいいのにどこか抜けてるんだなあ。」無垢なこの若者に司郎は好感を抱いた。

「この国には獣医学部がある大学がいくつかある。東京なら・・・そうだな。東京大学、東京農工大学、私立なら麻布、北里、日本大学、それと・・・日本獣医生命科学大学かな。」「先生はどこを卒業されたんですか？」「私は東京農工大学を出てるよ。」「じゃあ僕もそこを目指します。」「そんな単純な事でいいのか？」「先生を尊敬してます。」「世界中どこに居てもどこの獣医学部を卒業しても、君がしつかりしてれば立派な獣医になれる。」「はあ。」「それに大学へ進学してからもここで働きたいのなら私は止めない。私も君が居てとても助かっている。じっくりお父さんと相談しなさい。」「父・・・ですか。」

父の、いや家族の話になると彼は暗い表情をする。それは昔からそうだったし彼は極力家族の話題には触れたがらない。「大事な進路だ。やはりお父さんと話し合ってから進路を決めるべきだ。君は自分の意思を通せばいいと思う。」

その日の帰り、光寿は父と最後に口を交わしたのはいつだったのか考えていた。もしかすると小学校くらいから一度もまともに話していないという気がする。家族の中で母だけが救いだった。将太はどこか神経質で自分とその点は似ていたが、父からのプレッシャーなどで余裕がなかったように思える。それには多少の同情があった。歳も離れていた為に深く関わる事はなかった。仁や冥もおよそ自分

の性格とは合うはずがなかった。母が死んだ今、家族で言葉を交わすのは祖母の凜だけだった。その凜も容体が芳しくない。

不意に肩を叩かれた。振り向くと美咲がいた。ずらつ子のような表情で笑っていた。「ねえ、お父様に相談するんでしょ？進路の事。パパに聞いてちゃった。」「うん．．．気が重いんだけどね。」「性格が合わないのは仕方がないと思うわ。親子といえどもうちは友達感覚だけど、光ちゃんの家は特別だもんね。」「光寿の顔に憂鬱の色が芽生えた。」「あつ、変な意味じゃないよ。でもそこに生まれたんだから仕方のない事だと思うよ。それにお兄様達も居るんだから光ちゃんは好きな道を自分で選べる自由があるわ。」「確かに美咲の言っただ通りだった。将太は自分の意思で父の会社に入ったわけではない。仁は才覚はあつたがあ的事件以来、裏の世界へ入ってしまった。冥も自由気ままである。

「美咲．．．」「ん？」「実を言うと美咲が羨ましかったんだ。あんな優しいお父さんが居て．．．何回もこの人が僕の父だったらって思った。」「それをパパに言っただけなら喜ぶと思うよ。光ちゃんの事を息子のように思ってるもん。」「本当に？」「娘の私から見てもそう思うけどなあ。何か光ちゃんにはデレデレしてるし。普通は可愛い娘が連れてきた男友達を助手に雇うかなあ。ま、光ちゃんも特別だったかもしれないけど。性格変わってるもん。私に全く興味を示さないし。」「．．．いや、興味って．．．でも感謝しているよ。美咲と出会えたからお父さんとも出会えて、自分の将来が決まったようなもんだからね。」「ねえ、光ちゃん。」「え？」「光ちゃんが確実に獣医になれる方法が1つだけあるわ。」「え？何？」「でもこれをしたからといって光ちゃん自身が獣医学部のある大学を経て、農林水産省の国家試験に通らなければ意味はないんだけどね。」「もつたいぶるなよ。何なの？」「私と結婚する事。」「数秒だったがかなり長い沈黙のように美咲は感じた。」「ご

めんね！変な事言つて・・・冗談よ。私は光ちゃんが好きだし、でも光ちゃんには興味がなく動物に夢中で・・・」言いながら泣いていた。

泣いている美咲を衝動的に抱きしめていた。美咲の事が異性として意識した記憶はない。しかし1番自分に身近な異性だったのだ。母を除いては。不意に抱きしめられた美咲は動揺しかけたがすぐに光寿の背中に腕を回して胸に顔を押し付けた。何故だか分からないがずっと泣いていた。数分経つたくらいだろうか、光寿が優しく腕を放し美咲の肩に両手を置いた。

「なあ、美咲。今まで動物に夢中で自分の事しか考えていなかった。美咲はいつでも僕の味方をしてきてくれたもんな。いつだか何でこんなに美人なのに他に彼氏を作らないのかなって考えた事もあった。でも万一、美咲に彼氏が出来ていたらやっぱり悲しい気持ちになつたかも知れない。」「えっ？」「こんな事を喋る光寿を見た事が無かった。それどころか光寿に抱きしめられたのである。いきなり思い出して恥ずかしくなってきた。」「あつ、あの・・・もう遅いし帰るね。光ちゃんもお父様に相談するのしつかりね。」急に振り返つて美咲は駆け出した。「美咲！」背中から光寿が呼びかけてきた。もし、大学受かつて卒業して、国家試験通れば・・・結婚するかもね。僕は美咲以外の女性を知らないから。気をつけて帰りなよ！」そう言つて光寿は背中を向けて駆け出した。

その背中をずっと美咲は見続けていた。「光ちゃん・・・」今度は悲しいからではなく、嬉しくて涙が止まらなかった。

如月邸に到着したのは午後8時を回っていた。父が自室に居る事を喜一に教えてもらった。ノックをした。

「誰だ？」「光寿です。少しお話があるのですが。」「入れ。」扉を開けると寝床にもたれながら読書をする父の姿があった。この部屋に入ったのは幼い頃に家を探検していた頃以来無かったので、10年以上ぶりになる。

「珍しいな。お前が俺の部屋に訪れるのは。もつとも、他の子供達も訪れることはないが。」皮肉そうな笑みを浮かべ光寿を見てきた。

「実は僕の進路の事なんです。東京農工大学に進む事に決めました。」「獣医学部があるからか？」「ええ・・・」意外だった。何故父がそんな事を知っているのかが。「意外だという顔をしてるな。お前が同級生の父親がやっている獣医の診療所に顔を出している事くらいは喜一から聞いている。」「そうでしたか。」「お前は末っ子だ。幸い、将太が会社に居るし。お前は好きな道を進んでもいいと思っっている。ただし、農工大学は駄目だ。東大に行け。」「何故農工大学では駄目なのですか？」「お前は如月家の男だからだ。」

「将太兄さんが卒業しているじゃないですか。」「目指すならトップを狙え。」「必ずしも東大がトップだとは思いませんが。」「確かに。ただ環境は素晴らしい。獣医学でも素晴らしい環境で学ぶべきだ。」「農工大学も素晴らしい環境にあると思いますが。」「ふん、友達の父親に吹き込まれたのか？」「違います。僕の意志です。」

英将は少しの間、何か考える振りを見せた。「ならば今度の実力テストで学年トップを取ってみろ。お前が言うように東大だろうと農工だろうとお前次第で立派な獣医になれると俺も思う。ただしお前次第だ。分かるな？」「分かりました。必ずトップを取ります。もし達成したら約束して頂けますね？」「二言はない。」「失礼します。」少し礼をして光寿は自室へと戻った。

部屋に入るなりベッドへと横たわり両手を頭の後ろに置いて目を閉じた。今日、司郎と話した事を思い出した。そして美咲との会話。最後に父。美咲を抱きしめた事が今になっては信じられない。何故そうしたのか？やはり自分は彼女の事が好きなのだろうか？好きなのは間違いない。他の異性と関わるなら美咲がいい。でも本当に好きなのか？それは自分が獣医を目指していて美咲の父が獣医だから仲良くしていないか？いつだったか動物園にデートに行った時も美咲を怒らせた。今となっては完全に自分が悪かった。年頃の女の子だから自分よりも動物に夢中になっていたら怒るだろう。そんな事を考えて少し笑ってしまった。

しかし美咲よりも父と会話した事の方が大きい。何年ぶりに喋ったのか？父が自分の事を少しでも知っていた事の方が大きかった。兄に対する仕打ちなどを見てきたから人間ではなく悪魔だと思っていた。母が大好きだった反動で父の事は敬遠していた。母が亡くなってからはいつでも自分は孤独だと思っていた。しかし本当に孤独だったのは父だったのではないか？自分には美咲や司郎が居る。祖母の凜も自分の事を可愛がってくれる。兄達や姉だつて仲がいいという訳ではないが自分をいじめたことは一度もない。

そんな事を考えている内に眠りについた。

3年の一学期の実力テストで見事に光寿は学年トップを取った。生まれて初めてではないかと思うくらいに勉強した。父もその結果を知り後は自分に任せると言ってくれた。これを機に、光寿は父の見方が少し変わったような気がした。近寄りがたいのは以前のままでしたが。大学も無事合格した。

農工大学は都内から多少離れていたもので大学の近くで部屋を借りた。美咲と男と女の関係になったのもその部屋だ。新居祝いだと言って酒を買ってきた美咲は突然家に訪れた。「まだ未成年だけど。」「もうすぐ19になるのよ。大学生なんだし今私達2人きりなんだから問題ないわよ。せっかくのお祝いを無駄にしないで。」「2人きりという自分で言った言葉を美咲は気に入った。

「実は・・・酒を飲んだことないんだ。一度だけ、仁兄さんが部屋に入ってきて無理矢理ビールを一杯飲むように強要してきた。その時は顔が真っ赤になって体が火照って・・・それから覚えていないんだ。下戸なのかもね。」「仁さんって2番目のお兄さんね。ハンサムで評判よ。素敵なお兄さんを持つて光ちゃんは幸せね。多分酒も飲めないようじゃ立派な男になれないって気を使ってくれたんじゃないの?」「美咲と全く同じ事を言ってたよ。」「ほらね。」「仁が今ヤクザまがいの事をしているのは美咲には言ってる。サッカーを断念して自分で事業をやっているとだけしか。

「せっかく幼馴染の美咲が買ってきてくれたんだ。一杯だけ飲もうか。」「・・・」「美咲が拗ねた顔して黙りだした。」「どうしたの?」「幼馴染?」「だってそうだろ?」「・・・」「光寿は少し考えて「せっかく美女がお酒を買ってきてくれたんだ。一杯お付き合いますませんか?」「ふう。完璧ではないけど良しとするか。」「どんな言葉が欲しいんだ?」「光ちゃんには何を言っても無駄。」「そう言うつと膨れた顔をしながら美咲も今の状況を楽しんでいた。

「ふう。気を使って耐ハイにしてくれたのはいいけど・・・やつぱりお酒は体に合っていないのかなあ。」「光ちゃん顔が真っ赤ね。お茶ここに置いとくから。」「ありがとう。でも美咲は何でそこまで飲めるんだ?」「ふうふう。パパの相手をしてきたからね。」「いつから?」「内緒。」「悪い奴だなあ。」「ねえ。」「ん?」「いつ

だったか・・・私と結婚するかもって言ってくれたよね?」「言っ
たっけ?」「もう!言っただじゃないの。私を抱きしめてくれて・・・
・覚えてないの?」「抱きしめたのは覚えてる。ていうか、ちよっ
と頭がクラクラするんだ・・・横になっていい?」「いいけど今
日は光ちゃんと一緒に寝るから。パパには友達の家泊まるって言
つてあるし。」「はあ?ま、美咲ならいいけど。」「誰だったら駄
目なのよ。」「あんまり耳元で大きな声を出さなくて・・・」「気付
くと美咲が自分のすぐ傍に居た。頭が痛くてボーっとするのに美咲
のいい香りが変な気分させた。

どちらからか分からないが初めてキスした。明かりが付いているの
に2人は気にもせずお互いを求めた。お互いが初めて同士だった。
「お前・・・初めてだったのか・・・」「光ちゃんはもしかして・・・
・」「いや、初めてだよ。お前は可愛いからそんな事はないだろう
ってちよっと思ってた。」「可愛いと言われた事に気をよくしたのか
美咲はずっと光寿にくっついてた。

「やっど・・・叶った。」「え?」「光ちゃんは私のもの。」「物
扱いか?」「私は小さい時から光ちゃんが大好きだったのよ。」「
本当に僕の事を考えてくれていたんだと気付いたのは・・・遅いか
も知れないけどあの進路の時だよ。」「遅すぎ。」「美咲は笑いなが
ら唇を重ねてきた。「痛かったか?」「ちよつとだけね。でも嬉し
い気持ちの方が強くて全然気にならなかった。歯医者の方が痛い。」「
「僕は女の子と付き合っただけじゃないから彼氏としてどうかとは思
うよ。」「覚悟してる。それに私も光ちゃんが初めての彼氏よ。」「
父も母をこんなふうに愛しいと感じていたのだろうか?もし美咲が
居なかつたら自分は獣医の道を進んでいなかっただ可能性が高い。そ
れに人を好きになるという感情も芽生えなかつたかも知れない。

兄の仁がヤクザ2人をメッタ刺しにした事件を起こしたのは丁度そ

の頃だった。

ラビリンス 前編

1995年の春、如月家の次男である如月 仁が新宿歌舞伎町でヤクザ2人と騒ぎを起こした。仁は高校生の頃に起きた忌まわしい事件以来、刑事崩れの三浦、元ヤクザの幹部である田之上を従えてBARの経営を始めた。あの事件によって西島 徹以下5名もその傘下に入った。

BARの出資金は父の英将が息子を絶縁する手切れ金として5億円支払ったものだった。その金で歌舞伎町の一角にBARを立ち上げた。ビルの1フロア全体を占めており、約40坪ほどの大型店であった。店長に三浦、用心棒に田之上、徹等5名は店のスタッフである。

表向きはBARであるが実態はホストクラブのそれと変わらない。仁のアイデアで5名をホストになるよう指示した。

「なあ、仁さん。本当に俺達をホストにするつもりかよ。」「お前は俺に付いて行こうって決めたんじゃないのか?」「いや、まあそうなんだけどよ。経験がねえからどうすりゃいいか分からねえよ。」「それは俺も一緒だ。BARを経営するなんてな。俺も23だ。徹はいくつになつたつけ?」「26だ。ホストにしちゃ高齢だぜ。他の4名も一緒だ。」「歳はアイドルじゃねえんだから関係ない。要は器量だ。俺から見ても前等5人はまともな格好すりゃ中々のもんだと思うぜ。」「そうは言ってもよ、賢次や郁夫なんかは田之上さんに憧れてる。ホストなんか辞めて用心棒家業したいつてよ。」「あいつ等は武闘派だからな。でも武闘派のホストも悪くはないと思うけどな。まずは俺に付いて来い。キャッチ行くぞ。」

仁は他の4名を差し置いて徹だけをキャッチへ同行させた。まずはリーダー格である徹を教育しようという考えだった。

大通りに出ると街はネオンの光に包まれていた。サラリーマン、水商売の女、中国人を筆頭とする外国人達、ヤクザ、警察、学生。この街は金さえ払えばどんな種類の人間も拒まない。

「キャッチって言うてもさ・・・どうすりゃいいんだよ。」「お前、女をナンパした事ねえのか?」「いや、そりゃあるけど・・・」「同じ要領だ。それが商売だっという違いだけだよ、ま、みてる。」「前方から20代後半と思われる水商売風の女がこちらへ近づいてきた。仁は早速その女の横に並び、声をかけた。

「お姉さん、今から出勤?」「キャッチは飽きたから勘弁してよね。」「仁はいきなり女の左手を優しく握り、「5分だけ時間頂戴。」「離してよ、急いでるんだから。」「言いながら仁の顔を初めて見た女は、心なし歩くスピードが落ちた。「あんたの言う通り、俺はキャッチさ。だけど誰でもいいって訳じゃないんだぜ。俺も男だ。女は選ぶ。」「その基準は?」「そうだな。俺の心にガツンと響いた女だ。」「女は遂に立ち止まり笑い出した。「結構可愛い顔してるのね、この辺のホストは見栄えだけなら日本一の質だと思うけど、あなたかなりいい線いってるよ。」「ありがとう。もし仕事に向ってたんだったら足を止めちまって悪かったな。これ、受け取ってよ。」「どこの店?」「渡した名刺に女は覗き込んだ。

「ラビリンズ?」「うん、単刀直入に言うとBARベースのホストクラブだよ。低額にしてあるから仕事帰りでも良かったら来てよ。」「そうねえ、安くしてくれるんなら考えてもいいわ。」「一回目は信用が欲しいから前金でいいよ。気に入ってくれたらまた来てくれればいいし。」「ふふふ。名刺は頂くわ。名前は仁って言うのね。」

またね、仁。「女は去っていった。

「すげえな、仁さん。俺なんてとてもあんな上玉の女の足を止めることなんて出来ねえ。」「見た目は着飾っても女は誰でも特別扱いされたいものなんだよ。」「だけどそれは仁さんのルックスあつてのもんだろ?」「お前、スーツ着てる今と昔のお前じゃ段違いだぜ。相当お前もいけてるよ。とにかく店に連れ込もうなんて考えたら駄目だ。女友達と話すくらいでいいから名刺渡すだけでも渡せ。重要なのは笑顔と褒めることだ。褒めるのもありきたりじゃ駄目だ。」
「そんなの俺は分からねえよ。」

「もう1回見てろ。いや、今度はお前も後ろから付いてこい。」女子大生風の女2人がBARから出てきて立ち止まっている。即座に仁は女達の前に立ちはだかった。

「店探してるの?」「あ、カッコイイ顔してんね?ホスト?」「1人の女が少し酔った口調で返事した。「まあね、でも立ち上げたばかりで客探してるんだけど、どうせなら可愛い子がいいじゃん。」
「ははは、由美、どうする?」由美と思われるもう一人の女はホストと言う職業に抵抗を感じている様子だった。「あ、あの・・・」
徹が由美の前に立ち、「俺等、ホストだけど・・・俺、実はキャッチ初めてなんだ。」「嘘ばっかり。」由美が疑わしそうな表情で言葉を返す。

「マジだ。チャージは3000円でやってるけどあんたが来てくれるならチャージ代は俺が持つてもいい。」「何でそんなに親切なのか分かんない。悪いこと企んでるんでしょ?」「いや、あんたが初めてお客だつてのが1つ。」「2つ目は?」「あんたに惚れた。」

結局、その2人組は名刺だけを受け取るという条件で帰ってしまっ

た。

「徹よお、やるねえ。まさか惚れたなんて言うとは思わなかった。」
笑いを堪えながら仁は言った。「だから嫌だったんだよ、キャッチ
なんて。」「いや、お前は素質あるよ。あの女は絶対に店に来る。
それが明日か明後日かは分からねえがな。」「来ねえよ。」「賭け
るか?」「何を?」もし来たらその日のキャッチは全部お前がやれ。
3日経つても来なければその日のキャッチは俺だ。」「よし。忘れ
るなよ。」

翌日、徹指名で由美と名乗る女性が来店した。それからの徹は水を
得た魚の如く、キャッチを成功させて店のナンバー1になった。2
ヶ月目には新たなホストのメンバーを4人増やした。仁はあまりホ
ストの数を増やしたくなかった。管理がしやすいという理由が一番
だが、下手に何処かに飛んでしまうようなホストは最初から必要な
かった。少なくとも実力重視で選考していった。

店の売り上げは3ヶ月目には歌舞伎町全体のホストクラブでも5本
の指に入るほどになったのである。

ラビリンス 中編

ラビリンスの売上は他店の存亡に関わるほどになりつつあった。そうなってくるとライバル店達は面白いはずはなく、元々歌舞伎町の老舗ホスト店であったセラヴィと源氏のオーナー達は追い詰められていた。

その対策を練るべく職安通りのバーで会合する事になった。参加者はセラヴィのオーナーである明と店長の遼。源氏側からはオーナーの隼人と店長の博が集まった。

約10坪ほどの小さなバー。その中にボックス席が2つ用意されていて奥にあるボックス席に4人は座った。

「この店は俺が下っ端のホストの頃から使っていたんだ。マスターには随分とつけてもらったしお世話になってる。」明が始めに口を開いた。「隼人と博にはまだ紹介してなかったな。こいつは店長の遼だったんだ。よろしく頼むよ。」名前だけは聞いてるよ。やり手なんだって？」隼人が笑みを浮かべて遼に言った。

遼は軽く頭を下げた。「セラヴィの店長やってます遼です。若輩ですが宜しくお願いします。」「遼さんはいくつ？」少し軽そうな感じの容姿をした博が尋ねた。「21です。」「若いなあ、俺なんて26でやっと店長だもんなあ。最初の頃なんて田舎に何回帰ろうと思ったか。」「運が良かったんですよ。俺が入店した時、あまり売上あげてるホストが居なかつたんですよ。」「出来る男が言うとは違いなあ。噂では遼さんが入ってからセラヴィの売上が跳ね上がったって・・・」「博、もういいだろ。他所の売上なんか気にしてるようでは駄目だぞ。」「オーナー、今日の会合は他所の売上についてで

すよ。」博は隼人に向って勝ち誇った顔をした。

「博の言う通り、今日集まってもらったのはうちの客がラビリンスへ流れていることだ。しかもうちのナンバー2までもが引き抜かれた。ま、勝手に出て行っただけと言ったほうが正しいがな。」明が忌々しい表情をしてジャックダニエルを喉に流し込んだ。

「お宅のナンバー2っていうと和夫だよな？ 奴が抜けたのは知らなかったな。ラビリンスのオーナーはまだ若いんだろう？」「まだ20代前半・・・うちの遼やお宅の博とそう変わらない年齢だろう。」
「たいしたもんだな。しかも絶世の美男子と聞いたが。」隼人はキヤビンを一本啜えて火を点けた。「名前は仁。年は23歳。僅か4ヶ月前に店を立ち上げて今ではナンバー1の店になりました。」遼が隼人に言った。「そこまで調べているんだな。おい、博。お前もそのくらいは探っておかないと駄目だぞ？」「すいません、オーナー。」博はシユンとなって顔を下に向けた。

「とにかく、ラビリンスの影響でうちの売上は3分の2にまで落ち込んだ。食っていくだけなら問題はないが、このまま落ちていくと従業員を何人か解雇しなけりやならねえ。それは俺は我慢できない。俺を信じて昔から付いてきた連中だ。」「それは源氏も一緒だよ。なあ、明さん。狡猾なあんたの事だ。もう策は練ってあるんだろう？ それを俺達に相談したいんだろ？」「ああ、さすがに俺のこと分かっているな。隼人、お前は俺より年下だが誰よりも負けん気が強かったよな。昔から。」「昔あんたにぶちのめされるまではでしょ？」キヤビンを灰皿に押し付けるとソファにもたれかかった。

「そんなお前も多くの従業員を抱えて、生きていく為にはプライドだけでは無理だと言う事を自分の身で知った。」「そんな事よりどんな事考えてるんですか？ 明さん。最近年寄りのような口調になっ

てきちやっただからなあ、明さんは。「博はクスクスと笑ったが遼は無表情のままだった。「出来れば手荒な真似はしたくない。最近是中国マフィアの台頭で血生臭い事が多くなった。この街は。「先週なんて青龍刀持った男達がゴールデン街近くで走り回ってましたよ。おつかねえ。「博が縮こまった動作をした。

「そこでうちの宮崎は知ってるよな?」「お宅の用心棒でしょ?学生にアマで国体出たっていう。「ああ、その宮崎にラビリンスの店員を少々痛めつけるように頼んだ。「素人からすると宮崎は怖いでしょうね。「博がニヤニヤしながら言った。「その宮崎が、向こうの用心棒に手ひどく返り討ちにあつたんだ。「そんなおつかない奴が居るんですか?」「知り合いのヤクザに調べてもらったら、元今川会系列の田島組で幹部やつた田之上って男だった。「

「強いんですか?」「隼人が2本目のキャビンを啜えながら言った。「その男が幹部になってから田島組は急成長したらしい。兄貴分を殺して破門、数年ハコの中で服役してたらしいが。「何でそんな奴が仁って若造の下に付いてるんでしょうか?」「博が興味津々で尋ねた。

「その仁って男の背後を調べても全く分からない謎の男だ。天道仁。それだけだ、今分かっているのは。「ここの出身ではないかも知れませんが、今夜そいつのアジトまで尾行しようと思つてます。「遼が久しぶりに口を開いた。「俺も行くよ。なんか刑事っぽくてスリルありそうだし。「博、遊びじゃねえんだ。ここは遼君に任せておけ。「隼人がイラついた表情で博に言った。

「博さんにはラビリンズでナンバー1の指名を取ってる徹って奴を調べてもらいたいんです。「徹、ああ。あの生真面目な顔した暗そうな奴。何であんな奴がナンバー1取れるんだらう。キャッチしてるとこ何回か見たけど見ちゃいらねえ。素人同然だぜ。「そ

の素人にうちの客も流れているんだろうが。結果残してる時点で素人じゃねえよ。」隼人は博の頭をポカンと叩くと同時に立ち上がった。

「じゃ、尾行の方はそちらの遼君に任せるとして・・・うちはその徹って野朗を調べればいいんだな。攫うってのは駄目なのか？」「切羽詰れば仕方ないが、ヤクザ同士の抗争に発展しないようにしたい。なんせ今川系列の元ヤクザが居るんだ。どんなバツクが居るか分かったもんじゃない。俺はその田之上をもう少し調べてみる事にする。」明も立ち上がった。

会合が終わると明と遼は店の方へ向った。向う途中で遼が話してきた。

「あの博って男。あいつは向こうに捕まっちまえば何でも吐くでしょうね。隼さんの苦労も分かりますよ。」「お前とは違ってナンパな男だからな、博は。ま、あんな男でも源氏の連中から慕われているんだ。」「あんな男を慕う連中ばかりなら源氏も大した事ないですね。」「遼、気持ちは分かるが隼人は俺の古い親友だ。2度と源氏の悪口を言うんじゃないぞ。」「すみません、口が過ぎました。店に戻ったら今日のシフト確認して下の人間に指示してから早速仁の動向を追います。」「ああ、頼む。」

ラビリンスは相変わらず満員状態になっていた。店に居る従業員達は所狭しと走り回りシャンパンコールが鳴り響いていた。

「この調子なら店の増築か2号店も考えないといけませんね。」三浦は控え室で仁に言った。「もちろんだが今は足元をしつかり固めたい。精鋭を揃えようと思ったたらまだ時間が必要だ。まだまだ従業員

員の数も足りていないし、今やらなければいけない事を済ましてからだな。」「しかし、最初はおやつさんから独立するって言い出したときはびっくりしましたが仁さんに付いて行って正解でしたよ。」
「あの野朗をおやつさんなんて言うな。もう俺は如月家の人間ではなく天道の姓を名乗ってる。」「すいません。ところで今日新人の面接があるんですが立ち会えますか?」「今から内装業者と会わなければいけないからパスだ。お前と田之上でやってくれ。」「分かりました。今日は戻られますか?」「ああ、早ければ11時までに戻れる。それと新人達のキャッチがおろそかになりがちだから徹底指導させるように言ってくれ。」「もう立派な経営者ですよ、あなたは。」ニヤリと三浦が笑った頃には仁は背中を向けて部屋を出て行った。

仁は表に出ると真っ直ぐ東へ向った。世間は給料日を過ぎていたので街は人でごった返していた。人並みを潜り抜け、コーヒーショップに入ると仁はオールバックの背広を着た男の前に腰を降ろした。

「天道さん、お忙しい所を申し訳ございません。」「いや、店の改装は重要ですから。」「はい。噂は聞いておりますよ。この世界は狭いですからね、大変な売上とか。羨ましいものです。」「加藤さんでしたよね?加藤さんは夜の店を担当してるんですか?」「はい。ほとんどナイトの店を専門でやっております。ですから他の店からするとラビリンズの急成長は脅威でしょう。」「確かに何回か嫌がらせを受けたことがありますね。」「どこかヤクザには話を通してあるんですか?」「いや、うちはヤクザとはノータッチですよ。」
「それだと大変でしょう。あの世界の人間もシノギがありますからラビリンズなんて格好のカモにされるんじゃないですか?」「心配してもらって有難う御座います。ただ、うちはヤクザとは何の関係も持とうとは思いません。こちらで何とかやっていけますから。」
「そうですね。では、早速仕事の話に移りましょう。」

加藤と30分ほど打ち合わせをしてから店とは反対方向の方角へ歩いた。誰かが付けて来ているのは店を出てから感じてはいた。少し試してやるうと大通りからタクシーを拾った。「おじさん、高田馬場までお願い。」「はい、明治通りからでいいですか。」「ああ。」別に高田馬場に用事はない。ただ尾行してくる男を見極めようと思っただけだ。店を出てからコーヒーショップまでに一度不意をついて振り返った。確実に尾行してきている男を1人確認した。背丈は1メートル75センチくらい。自分とそう変わらない。顔はかなり離れていたのでよく分からなかった。

明治通りを大久保辺りまで進むと後方50メートルほどに250ccの単車がついて来ていた。フルフェイスを被っているが服装や背丈から先程の男だと分かった。高田馬場でタクシーを降りるとコンビニに入り立ち読みを装い男の動向を待った。男は用心深くタクシーを降りた場所から単車で待機しているのを確認した。丁度コンビニから見える場所にある。コンビニを出てから小走りで小道に入っ てやった。ここらは学生時代に遊んでいた事もあり多少の地理は頭に入っていた。小道を使いながら住宅街へ入った。会社帰りのサラリーマンやOLなどがポツポツと歩いている程度で人はそんなに多くなかった。

男は途中でバイクを置いてきたようで、確実に自分の位置を確認できる場所まで尾行してきていた。丁度、5、60メートル後方辺りのクリーニング屋前からこちらを伺っている。急に俺は走ってやった。百人町の辺りまで走るとあるアパートの中へ入り込み2階へ上がった。そこから下を見下ろすと男が右往左往して辺りの様子を伺っている。俺を見失ったようだ。

すぐに反対側の階段を奴に見つからないように慎重に降り、小道を

利用して元のコンビニ二辺りに戻って来た。単車が置いてあったのでタイヤの空気を抜いておいた。再びタクシーを拾って歌舞伎町へと戻った。

店に戻ると相変わらず店は活気に溢れていた。すぐに徹が近寄ってきた。

「今日面接に来た新人、なかなか使えそうだよ。セラヴィの和夫も加わったし何とか駒も揃ってきたな。」「そうか、キャッチの方はどうだ?」「ああ、ノルマを決めて達成出来なけりや家に帰れないようにしたから必死に走り回ってるよ。」「よし。じゃ今日も頼む。田之上は何処だ?」「一度自宅へ戻るって言ってたよ。」「そうか。」

田之上の携帯を鳴らすと3回の呼び出しで応答した。「ああ、仁さん。今休憩で飯食い終わったところですよ。」「今日、知らない男に尾行されてな。詳しい話は後ですからリスボンに来てくれ。」「分かりました。」

職安通りから一本入った小さな筋にある喫茶店がリスボンだ。歌舞伎町に根を張り出した頃からこの店をよく使っている。学生時代にはあまり飲まなかったコーヒーも今では日課にまでなっている。

色々とコーヒーを飲み歩いたが親父1人でやってるこの店のコーヒーが一番旨い。店内に入ると客は2組しか居なかった。窓際の席に座ると親父にアメリカンを注文した。最近はよく通っているので親父もただ頼いただけだ。

一組はクラブの同伴らしき男女達。もう一組はここらでは見かけない男2人だった。中国語を話しているようだから日本人ではなさそ

うだが、年輩の方の男から只ならぬ物を感じた。上手くは表現出来ないが、今まで畏敬の念を感じた年上は親父しか居ない。親父は大嫌いだったが他の人間とは格が違うのは認めていた。親父に感じるようなオーラをその男にも感じた。

男は俺の方には見向きもせずに向い合わせの若者と熱心に話している。そうする内に田之上が店に入ってきた。親父にバナナジュースを頼むと俺の向かいに腰をおろした。しかし元ヤクザの大幹部様がバナナジュースとは恐れ入る。田之上は酒が飲めなかった。昔アルコールを入れて渋谷辺りで暴れた事があつたらしい。その時から酒は絶つたと本人から聞いた事がある。

「尾行の話ですが。」「ああ、今日店から内装業者と会う為に明治通りに行くまでの道沿いにコーヒーショップがあるだろう。その頃から尾行されていた。」「心当たりは？やはり前にうちにちよつかにかけてきたホストクラブの連中でしょうか？」「十中八九そうだろう。背は俺と同じくらい。中肉で長くも短くもない髪形だった。遠かったから特徴はそれくらいしか分からない。」「上手く撒けたんですね？」「うん。百人町の辺りで俺を見失つたようだ。アパートの上から見下ろしたが色の薄いブルーのジーンズとトレーナーを着ていた。紺色だったと思う。」「哲が客のキャバ嬢から聞いたらしいんですが、ライバル店のセラヴィと源氏のオーナー同士は繋がっているみたいですね。」「源氏は知らんがセラヴィのオーナーって言うത്明って奴だよな。和夫から聞いたことあるが面倒見のいい奴らしい。」「かつてはここらのカリスマホストだったみたいですね。歳も30を越えたくらいだと思います。」「売上はうちが出来る前は源氏と人気を分け合うほどすごかったみたいだな。」

熱いコーヒーとバナナジュースが席に運ばれてきた。俺は熱々の内に飲むのが好きだ。ほのかな豆の香りが心地よい。少し口に含むと

三浦に連絡を入れた。

「今日は田之上を借りたいからお前が店のほうを仕切ってくれ。何かあればいつでも連絡していい。」電話を切ると田之上がマルボロに火を点けた。

「仁さん。俺はその明って奴が絡んでるような気がします。源氏のオーナーの名前は知りませんが明って奴には頭が上がらないらしいですから。」「そいつ、痛めつける。」「ええ。」何もなかったように田之上はバナナジュースを飲み干すとすぐに店を出た。奴のいい所は無駄な口を聞かずに実行に移すところだ。三浦はその点、用心深く皮肉の1つも出してくるだろう。ヤクザと警察の違いだ。

田之上が出てから数分するとさっきの外国人らしき2人組も立ち上がり店を出た。出る瞬間に俺の方に顔を向けてきて一瞬目が合ったが何もなかったように出て行った。多分素人ではないと判断したが、今の俺には関係ない。

午後22時を超えた。街は眠る事無く人の波が途切れない。いかなる不況も人間の欲望は止まる事はない。家に帰ってシャワーを浴びたかったがいつ尾行されているか分からない。俺はゴールデン街の方へ足を向けた。

昔に遊郭があつたのか知らないがそんなような雰囲気は未だに残している。都市開発の影響も無く、今でも昭和の臭いがするような界限だ。ベルというスナックに入ると50代くらいのママが笑顔で迎えてくれた。

「仁ちゃん、いらっしやい。最近顔見せなかったけど店が忙しいのね。」「ええ、おかげ様で。ビール頂戴。キンキンに冷えたやつ。」

この店に入ったのは店の客に連れられてだ。その客もスナックを一件経営しており紹介したいと言われてこの店に辿りついた。初めは軽いホストだと思われていたが2回目に1人で来た時は家族のように接してくれた。俺は人ごみが好きではない。こういう人気の少ないスナックやリスボンのような落ち着いた感じの店が好きだった。

「ママ。セラヴィってお店知ってる？」「大手のホストクラブね。あんたんところが急成長してるから困ってるんじゃないの？」「どうだろうね。明って人がオーナーなんでしょ？やり手だつて聞いたけど。」「明も変わったわ。昔は素直で可愛らしい子だったんだけどね。」「知ってるの？」「今はないけど私も1時期ホストクラブに通ったのよ。その時にナンバー1だったのが明。そりゃ飛ぶ鳥を落とす勢いだったわよ。」「ふーん。」「それで独立してセラヴィを立ち上げた。何年かして新人の遼って子が入ってきてさらにセラヴィは伸びたのよ。」「遼？」「今の店長ね。まだあんたより少し若いくらいよ。」「若いのに偉いな。」「あんたなんかその若さでオーナーじゃないのよ。」「俺なんて親の七光りさ。」「ただ金があつても増やせない馬鹿はそこ等に居るわ。あんたは立派にやつてると思うけどな。」

2杯目のビールを頼んだ。俺は何か情報が欲しい時はこのママに聞く。歌舞伎町は俺が生まれる前から居たらしいから年季が違う。裏で情報屋紛いの事もやってるらしい。それでヤクザの知り合いが多いのだろう。しかしこの店の中では対立するヤクザ同士も揉め事を起こさない暗黙のルールがある。それだけこのママは慕われているのだろう。俺も何故かこのママには頭が上がらない。昔は美人だったんだらうという面影も残している。

「仁ちゃん、彼女は？ここに来る女客があんたの話題で持ちきりよ。」

美形でホストクラブのオーナー。それでいて性格は男気に溢れてたらモテるわよ。あたしも若かったら放っておかないけどね。」「男気なんてないですよ。俺は臆病だから。」「もっと自信を持ちなさい。私はこう見えても人を見る目はあるんだ。」「ありがとう、ママ。ごちそうさん。」「万札をカウンターに置くと俺は立ち上がった。

「あなたね、いつも釣り貰わずに帰るけどそんなのはもっと親父になってからにしなさい。可愛げが無いのよ。」「いつも俺に情報を提供してくれてるしね。」「じゃ、サービスで教えてあげる。実はその遼つて男。さつき話したね。遼が私にあんたの事を聞いてきたわ。」「いつ?」「一昨日ね。まあ、セラヴィのオーナーでやり手だつて事くらいしか喋ってないけど。実際、私もあんたの事よく知らないしね。」「男は謎があるくらいがいいんですよ。」「ニヤリとして店を出た。

俺を尾行してきたのは遼だ。何となく直感だつたが間違いないだろう。後は田之上に任せるとして俺は源氏の事も探ろうと思った。携帯の電話帳から2週間前に行ったクラブの女の番号を探した。

「聡子か。俺が分かるか?」「仁。電話くれたの?カリスマホストから電話貰つて嬉しい!」「俺はオーナーだ。」「あたしを接客したじゃないの。」「美人限定で接客する事にしてる。」「へえ、悪くないね。で、どうした?今から客と同伴で時間があまり無いのよ。後じゃ駄目?」「いや、構わない。店が終わったら連絡くれ。飲みに行かないか?」「嬉しい。でも明日客とゴルフだから遅くなれないのよ。」「いいさ。一時間くらいどうだ?」「いいわ。2時くらいにあがるから明治通りのサリーってBARは知ってる?」「入ったことは無いが場所は分かる。サリーに2時頃行くから早く来いよ。」「了解。」「

電話を切ると誰かの視線を感じた。斜め向かいのビルの入り口にヤクザらしき集団が俺の方を見ていた。俺も見返したが何を言ってくる訳でもなく視線を逸らした。ここらじゃ隅田会か山内の連中だろう。中国マフィアをのさばらせてでかい顔をしているのが気に食わなかった。隅田会も山内の関東進出で手を焼いてマフィアどころではないのかも知れない。

気にせず2時まで時間を潰そうと駅のゲームセンターに行った。ゲームセンターと言えば学生の頃から好きだった。家に帰る前は日課のように通ったものだ。あの事件が起こるまで。その事件後に徹底達ともつるむようになった。今では俺の部下だ。格闘ゲームをやっていると途中で対戦の申し込みが来た。許可するとなかなか慣れているようで手強かった。パワーゲージを3分の1くらいに減らされたが何とか勝った。また対戦してきた。いわゆるゲーマーと呼ばれる人種も負けず嫌いで何度も挑戦してくる。

面倒だったが時間もあるしまた相手してやった。次はなんなく勝った。相手が立ち上がるとこちらの方を見てきた。

何か言いたそうに俺を睨みつけているが俺は無視してゲームを続行していた。「おい、あんた。」「あ?」「あんたのレベルはいくらくらいだ?」「はあ?」「僕はこのゲームでは一度しか負けた事がない。ゲームの神様と呼ばれる男だけだ。」「その神様とやった時の手ごたえはどうだった?」「僕も善戦したさ。でも刃が立たなかった。あんたこのゲームはどれくらいやり込んでるんだ?」「さあ、今日やったのも久しぶりだよ。半年ぶりくらいかな。」「嘘つけ! このオタク野郎。」「ツツコミどころが満載だったがあえて無視した。力士にこのデブと言われるような感覚だった。

ゲームをしている間その男はずっと俺を睨みつけていた。腕力任せ

の輩よりこういうタイプの人間が俺は怖かった。最近ではナイフを持ち歩いてる奴も少なくない。ゲームと現実の壁が壊れているのだから。わざとゲームに負けて立ち上がり店を出ようとするとその男は付いて来た。

「何だ？まだ用か？」「ライバルの名前を伺いたい。」勝手にライバル認定されたみたいだ。「先にお前が名乗れ。」「ふん。僕を知らないとはこの界隈の人間ではないようだね。僕は新宿の野良犬、仁って言うんだ。」まさか一緒の名前とは思わなかった。しかも新宿の野良犬という呼び名もセンスが良いとは思えなかった。むしろかっこ悪い。

「ほら。」名刺を奴にくれてやった。「むむ！君はホストか。僕の一番嫌いな人種だ。」「まあそう言うな。」「むむむ！僕と一緒に名前！君とはどうやら因縁のような物を感じるよ。」危ない香りだったので右手を少しあげてその場を立ち去った。

歌舞伎町へ歩いてる途中に携帯が鳴った。田之上だった。

「遼つてのを捕えました。今、車に乗せて後部席に寝かせてます。」
「よし、どこだ？」「靖国通り沿いにあるコンビニの向かいに車停めてます。」「すぐ行く。」

田之上の車を見つけるとすぐに助手席に乗った。外からはフルスモークで後部座席は見えない。横になっているから尚更だ。後ろを見て両手両足をくくられている遼を確認した。

「お前だな、遼つてのは。今日俺を付けて来ただろう？」「お前、俺のバイクのタイヤどうしてくれんだ！」「口答えするな、殺すぞ。」田之上が静かに言った。顔を見ると田之上に何発かやられたらし

い。遼も田之上を恐れてそのまま黙った。

「いいか、2、3質問に答えれば無事に帰してやる。お前も仕事があるだろう？明さんに怒られるぞ。」「てめえ……」「まず明の指示で俺を付けて来たのか？」「……」「遼が黙ったので田之上が百円ライターで鼻の辺りを炙った。「あちい！」「当たり前だ。」「田之上は冷静に遼を見下ろした。「明の指示か？」「もう一度聞きなおすと遼の首が頷いた。「源氏のオーナーとつるんでうちにちよっかいかけてきたんだな？」「また頷いた。

遼は先程、源氏の博の愚痴を明にこぼした事を思い出した。

あの博って男。あいつは向こうに捕まっちまえば何でも吐くでしょうね。隼人さんの苦労も分かりますよ

まさか自分がその身になるうとは思わなかった。どこかでこの仁という男を舐めていた。「以前に宮崎って奴を痛めつけたがお前んとこの奴だろう。奴は口を割ったよ。」「ああ。」「何故うちに手を出す？」「邪魔だからだ。」「なら営業努力をすればいい。うちに客が流れないようにお前の店を魅力的にすればいい。」「俺だってこんな真似したくねえよ！ただ明さんは俺の恩人だ。不良だった俺を拾ってくれた。お前はセンスがあるってな。嬉しかったよ、正直他人から期待されるような事は一度もなかった。でもあの人だけは俺を信じてくれた。」「その恩返しって訳か。でも俺からすりや姑息な真似をすること泥にしか見えないぜ、その明って男。」「何だと……ぐわっ！」「また田之上がライターで鼻を炙った。「遼。和夫は知ってるな？元々お前の店に居た男だ。奴も明の悪口は一言も言ったことはない。それだけ下から慕われていたんだろう。ただどな、最近の明はどうも臭いんだ。俺は会った事ねえがいい噂を聞かない。」「どうせ妬んでる連中の噂だろう……」「心なし、遼の

口調が静かになった。

「もういい。お前は帰れ。」「仁さん、それじゃ甘すぎます。徹底的に痛めつけないと。」「もういい。そんな事をしても負の連鎖に陥るだけだ。おい、遼。もう尾行なんかするな。もし俺の家が知りたいのなら友達になってから招待してやる。」「……………」「遼は先程の殺気はなくなっていた。」

「それと、明に伝える。姑息な真似はせずに会合しよう。伝えてくれ、いいな。」「……………」「田之上、手足を自由にしてくれ。」「はあ。」「田之上は不満そうだったが俺に従った。手足が自由になると遼は縛られていた手首を片方ずつ揉みだした。「ふふ、血が止まってたからしびれてんだろ?」「……………」「なあ、煙草……………」「くれないか?」「俺はやらないんだ。田之上。」「田之上に目をやると渋々マルボロを遼に差し出した。「悪い……………」「田之上が火を点けてやると3服ほどして車から出た。」

そのまま肩を落として歌舞伎町へと消えていった。

「いいんですか。少し甘くないですか?」「まあ痛めつけても事件になれば厄介だ。もうあいつは刃向かつてはこないよ。」

電話が鳴り出した。店の電話番号だった。「俺だ。」「仁さん、達夫です!さつき店の近くで徹がチンピラ達に因縁ふっかけられて攫われました。あいにく賢次と郁夫は店内だったので……………」客をほっとく訳にもいかないし……………」「それでいい。店は任せたから俺が何とかする。で、どちらの方向に連れて行かれた?」「コマ劇場の方です。哲が尾行してますので仁さんに連絡するように伝えてあります。」「よし。後は任せろ。」電話を切ると田之上にコマ劇場の方へ向わせた。

「お前、ここで車に居る。俺が辺りを見てくるから。」俺も行きますよ。向こうは集団でしょうから。」俺を舐めるな。チンピラ数人でびびるくらいなら最初からお前のような怪物を下には置かない。「ニヤつとすると田之上は頷いた。「じゃ、何かあつたら携帯鳴らしてください。この辺回ってるんで。」

コマ劇場辺りで様子を伺っているがいつもの光景だった。哲からの連絡が入った。「仁さん、徹が錦ビルに連れて行かれました。3階でエレベーターが停まってました。」よくやった。お前も店に戻れ。客が多いんだからな。「気をつけてください。恐らくあいつらは隅田会の人間ですよ。」ああ、任せておけ。」

次に聡子に連絡を入れた。留守番電話だった。「聡子、俺から誘って悪いが今日は無理になっちまった。明日にまた連絡するから今日はパスだ。悪い。」メモを残して歩き出した。

錦ビルの3階に行くと言っていないようなスナックやラウンジが並んでおり奥に1人の男が立っていた。見張りだろう。

「何だてめえは？ここは関係者以外立ち入り禁止だ。」関係者？ヤクザ以外って言えば、雑魚。」思いつきり顔を殴りつけると両手で顔を塞いだ。足を払って上から蹴りつけた。5、6回ほど蹴ると男は蹲ったまま大人しくしていた。何かと中から強面の男2人が出てきた。

「片岡！どうした！てめえがやったのか？」スキンヘッドの明らかに筋者と思われる男が怒鳴った。「俺以外に誰が居るんだ、ハゲ。徹を返せよ。」何のことだ？」スキンヘッドの隣に居た目の細い男が言い返してきた。「徹だよ。さっき俺のダチを拉致つたる？」

「隅田会が怖くないのか？僕ちゃん。」「関西のヤクザや中国人を抑えられないヘタレ組織に興味はねえよ。」言った途端に銃を向けてきた。

「素人じゃ触ったこともねえだろ？おい！遊びじゃねえんだよ！！」スキンヘッドの男が怒鳴り散らした。「お前人を撃った事あるのか？暴対法で縛られたヤクザなんて怖くねえよ。」「ヤクザはな、舐められたら終いなんだよ・・・」言いかけてる間に左ポケットに忍ばせたナイフで男の右手首を切った。

「うがぁ！」落ちた銃を足でエレベーターの方へ蹴った。それでもサッカーは天才と呼ばれた男だ。目の細い男は中に逃げ込んだ。俺はエレベーターの方へ急いで向い銃を回収するとそれを持ちながら中へと入った。

ラビリンス 後編

現場は凄惨の一言に尽きた。

負傷者3名。死者2名。何れもヤクザだった。現場は歌舞伎町の錦ビル3F。

このビル自体、隅田会が所有していた。男は鑑識の結果を待った。

この街にはアウトローと呼ばれる人間が多数生存している。この事件もただのヤクザ同士、あるいは外国人マフィア絡みの小競り合い程度にしかその男は考えていなかった。

鑑識からの意外な報告に驚いた。犯人は素人の男1人。歳は23。最近売り出し中のホストクラブ、オーナーである。名前は天道 仁。近隣の通報で駆けつけた現場の警官達の証言では一人血だらけのナイフを持って立ち尽くしていたという。その表情は鬼か悪魔にしか見えなかったという。

素人でもこういう男が居る。ヤクザは組織である。親が最優先でありシマを死守する為に命を賭ける。素人には関係が無かった。守るものは無い。これが素人の怖さである。ただこの男に関しては自分の従業員を守らなければいけないはずだ。

「現場に立ち尽くしていた容疑者の天道 仁。そしてその従業員の西島 徹という男。西島は酷く顔を腫らしていましたがその他に異常はありません。」「うむ。天道と西島の事をラビリンスという店の従業員達から聞き込みをしてくれ。」「分かりました！」

（天道 仁か。プロ相手に3人のヤクザを負傷させ2人を死なせた。
・・怖い男だ。）

「真田警視。警視庁で天道と西島の取調べが始まったようです。」
若い警官が報告に来る。「もう少し現場を見てから戻る。ありがとう。」

事務所内は簡単なデスクと椅子が3セットあり、粗末な応接用のテーブル、ソファが並んでいただけだ。電話線すらひいていない。

おびただしい血の跡が奥側の壁や床にびっしりと付着していた。負傷者の1人は顔を腫らした程度の軽症。彼は事務所前の廊下の隅で震えていた。1人は手首を切られて重傷。病院に担ぎ込まれて大事はないようだ。もう1人はわき腹を刺されたみたいだが何とか事務所から抜け出し救急車に担ぎこまれた。死んだ2人は体の至る所をメッタ刺しにされていた。

現場の警官達によると当人である天道はそれほど負傷はしていない。5人のプロを相手にである。

真田は数年前の事件を思い出していた。

毎日のようにヤクザが死んだ。一般人の死者も出した。背後にあったのは中国人マフィア同士の抗争である。中にはラテン人集団も関わっていた。この所、都内や関西、東海地方を中心に中国人マフィアの抗争がさらに激化している。そのほとんどの犯人が捕まっている。敵対している組織の鉄砲玉である。その影響で警察の警戒度は最高潮に達しており、ここ数ヶ月は沈静していた。例外としてまだ犯人の行方が掴めないケースもある。犯人の指名手配は済んでいた。警視庁が全力で捜査をした結果、マカッコという集団を突き止

めたのだ。その中心メンバーであるジョアキンという日系ブラジル人と名古屋市内でホステスをしていた松岡 麗子2名が全国指名手配になっている。

今回もそれ絡みかと思っただが相手が隅田会という事。そして犯人は現場から逃げずに立ち尽くしていた日本人の青年であった事。その青年がマカッコと関連していないかという僅かな期待は署に戻り崩れ去った。

「天道と西島の証言はほぼ一致しています。嘘をついているとも思えません。証言は今言った通りですが、一度真田警視からも聞き込みされてはどうでしょうか?」「ああ、そうするつもりだ。しかしマカッコが関連していないのか。物騒になってきたな、この街も。数年前のような血の雨がまた降らなければいいが。」

西島の取調室に入った。西島は真田の方をチラツと見ただけでまた床へ視線を落とした。あのような事件の後に散々取り調べをされて覇気を失っている様子だ。無理もない。

「西島・・・徹君だったね。私は警視庁の真田という者だ。先程から質問攻めで参ってる様だし、簡単な質問で終わらせるから正直に答えて欲しいんだ。煙草か、飲み物はどうだ?」「煙草が欲しいね・・・刑事さん、仁さんに会わせてくれよ・・・」「彼は重要参考人だ。そういう訳にもいかないんだ。」「付き添いの若い刑事に顎で合図するとその刑事は西島に煙草を1本渡し火を点けてやった。

「ふう・・・参ったよ。刑事さん。俺達はこれからって時だったんだ。」「店の事かね?」「そうだよ。俺は26でホストをすることは思わなかったが意外な才能を持ってたみたいなんだ。それを引き出してくれたのが天道 仁だよ。昔は対立した事もあったがもう何

も思つちやいねえよ。あの人はでかくなる。こんな腐れヤクザとの事件で無茶苦茶になりたくねえよ。」「隅田会とは何故構える事になつたんだい?」「どうせ対立するホストクラブ達が泣きついたんだろうよ。」「そのホストクラブとは?」「セラヴィと源氏って店だよ。」「同じ系列店なのか?」「いや、オーナー同士が繋がつて昔同じ店でホストをやつてたみたいだ。」「オーナーとは?」「明つて奴と隼人ってんだ。いけ好かない野郎達だ。俺らの店に客もホストも奪われたと思ひ込んで。俺達はただ頑張つただけだ。」「

「そのオーナー達にも任意同行してもらおう。明日にでもな。」「きつちり問い詰めてくれ。何か隠してるよ。神なんて信じた事はないが、誓つてもいい。仁さんは悪くねえ!俺をただ救出してくれただけだ。昔は対立してたけどよ。俺をここまでにしてくれたのは仁さんだ。普通ヤクザなんかに拉致られたらお手上げだろうよ、素人なら。でもあの人は俺を見捨てなかつた。俺もあの人に恩返ししないといけねえんだよ。」「徹は俯きながら泣いているようだ。

これが演技だとは思えない。この男は本気で天道という男を助けたいと思つているようだ。しかしヤクザとはいえ人間を2人殺した罪は消えない。

「徹君。君には今日一晩だけ泊まってもらわなければならぬ。それが終われば帰つてもいい。だから正直に答えてくれ。まずマカツコという言葉に何か心当たりは?」「マカツコ。マカツコ。何だよそれ。」「では天道。仁がヤクザ組織との関わりはなかつたか?」「ねえよ。どこのヤクザにもあの人は引かなかつた。シヨバ代払つてなかつたから目をつけられてたんだろ。」「あんなら警察は何であんなヤクザどもを野放しにしてるんだ?何処の国に堂々と事務所を構えてる暴力団集団が存在するんだよ。」「て言つても。俺も元ヤクザなんだ。」「ほう。」「だが正式な組員にはなつて

ねえよ。その前に捨てられてあの人に拾われたんだ。」「何処の組だ？」「だから組員じゃねえよ。隅田会本部の板倉って人の下に居たんだ。いずれ杯を貰えると信じて。」「その男なら警視庁でも有名な悪党だ。そんな男に捨てられたのはある意味ラッキーだったな。」「ああ、まったくだ。奴はクソだった。」

徹からこれ以上何かを聞き出すのを無理だと感じた真田は署から出す事にした。

問題の天道の部屋に入った。薄暗い取調室に粗末な椅子に座り、真田をチラッと見ただけで俯いた。

「天道 仁だな？私は・・・」「警視さんだろ？さっきの刑事に今からおつかない警視が来るって脅されたよ。」「口元は笑っていた。

「今回の隅田会の件に関して洗いざらい吐いて貰う。」「隅田の間だったのか。徹が所属してたところだよ、確か。」「ああ、彼からも先程聞いた。正式な組員ではなかったらしいし、彼は今回の事件では被害者だから一応明日帰ってもらおう事にしたよ。」「それは良かった。奴にはまだまだ働いてもらわないといけないからな。」「この期に及んで店の心配だけをしている天道を見つめた。余裕すら感じる。」

「相手はヤクザだ。しかも君の従業員を拉致して暴行を加えた。弁護士はつけるかい？」「ああ。もう手配してもらってる。」「ほう、誰に？」「うちの従業員にさ。こちらに非はない。」「2人死んでるんだがね。」「クズが2人だろ？」「天道の口元が緩んだ。」「クズでも人間だ。彼等にも家族は居るはずだ。」「そのクズの家族なんて知ったこつちやないね。大人数で1人を拉致して暴行を加えるなんてクズはね。俺はそれで夢を諦める事になったんだからな。」「夢とは？」「あんたには関係のない事だ。ところであんたらの敵を

2人もこの世から消したんだ。感謝状くらいは出るんだらうね？」
「俺をあまり舐めない方がいい。」「じゃ、どうするんだ？俺を殴るのか？どうするんだよ、刑事さん？」この男は明らかに怯える事無く笑っている。

「裁判が終われば君の判決が出る。それから刑務所という事になるがそれまでは色々教えてもらう。」「もうあんたの中では刑務所は決まってるのかよ。それと何が知りたい？女の口説き方ならレクチャーしてやるよ。あんたも歳の割にはイケてるよ。」不意に彼の胸倉を掴んだ。

「俺を舐めるなといったはずだ。お前みたいなチンピラは歌舞伎町に多数これまで存在した。ほぼ死んだがね。」「しかし生き残る奴も僅かに居るって事だな？」「いつまで突っ張れるかな？刑務所じやお前のようなひ弱で可愛らしい顔をした奴はホモの餌食になるだけだぞ。」「刑事が堂々とホモを使って脅すんじゃないよ。あんたこそ、俺を舐めてるんじゃないのか？」「その若さでホストクラブを立ち上げ、歌舞伎町一の売り上げにしたのはすごい事だと思う。しかし今のお前は自由の身ではない。諦める。」

数分した頃に意外な訪問者が来た。天下の如月製薬、嘉納という男だった。如月製薬では如月 英将の右腕と知られている男でテレビにも何度が露出している。若き如月製薬の常務である。署内に居る女性職員は皆彼に見とれてしまっていた。天道を残し、真田は嘉納という男と会った。「これはまた嘉納さんほどの人がこのような所までどういったご用件でしょうか？」「今、署内に居る天道 仁氏を保釈して貰いたく参上致しました。」「ハーフかと思われるその顔は確かに女性を惹き付けてしまうだろうと納得した。頭も良さそうだ。真田はこの男と天道の関係が読めなかった。」と、申しました。も殺人容疑でここに居る訳ですから。」「弁護士もつけてあります。」

片山弁護士はご存知でしょうか？彼の承諾を得ましたのでもうすぐこちらに到着する頃でしょう。」

片山 治夫。今までに一度も負けたことの無い国際弁護士。日本よりも海外でその実力を評価されている弁護士だ。このクラスの弁護士を何故天道に付けるのか？

「すみませんが、あなたと天道のご関係は？」「うちのボスのご子息ですから。」

頭に衝撃が走った。まさか先程のホストのオーナーがあこの如月 英将の息子だとは考えもしなかった。当たり前である。

「すると・・・天道という姓は？」「ああ、それは死んだ奥様の旧姓ですね。」「彼は何故わざわざ・・・」「それは分かりません。ただうちの社長が引き取って来いとこの事でしたので私が参上した訳です。あ、丁度来られたみたいですね。」署に1人の弁護士がやってきた。間違いなく片山国際弁護士だった。

「如月 英将様よりご子息の弁護を依頼されましたのでここへ覗ったのですが。」

結局上の官僚達から天道 仁、いや如月 仁を解放するよう命じられた。真田は全く納得はいかなかったが相手が悪かった。政治家をも操る怪物、如月 英将には誰も逆らえないのだ。

夜の歌舞伎町で起きたヤクザ絡みの事件。2人のヤクザを死なせた犯人が堂々と帰って行った。警察と威張った所でお上には逆らえない。堂々と帰っていく天道と付き添いの嘉納。弁護士と徹。その一行をぼんやりと眺めているしかなかった。

クラブセラヴィは今夜も大繁盛だった。ラビリンズという例外を除けば歌舞伎町で最も華やかな場所の1つである。店長の遼が険しい顔で店内に入ってきた。

「遼さん！探しましたよ。電話も何回もしたのに……」従業員らしき若いホストが近づいてきた。「明さんが警察に連れて行かれたって？」「ああ、事情聴取だと言ってましたけど？」舌打ちをして控え室に入った。

従業員の控え室には数名のホストたちが談話をしているところだった。「お前等、何を悠長にお喋りしてんだ？」「遼さん。丁度、オーナーの話をしたとこつすよ。大丈夫なんすかね？ヤクザ使ったって噂も流れてるし……」「お前等は目の前の仕事に集中しろ。さあ、行け！」肩を竦めながらホスト達はホールに戻って行った。

携帯を取り出し源氏の電話番号を検索した。（確か店長は博って奴だったな……）数回コールすると従業員が電話に出た。「ありがとうございます！源氏で御座います！」元気な若い男の声が響いた。「セラヴィの遼と申しますが、店長の博さんは居られますか？」「あ、遼さん。俺、重和です。昔セラヴィの体験でお世話になった……」「ああ、覚えてるよ。結局、源氏に入っちゃったけど、その後は元気にしてんのか？」「はい！俺もセラヴィに入りたかったんですけど……源氏が人手不足だったって……結局そのまま居座ったままなんすけど……博さんでしたよね？まだ今日は来てないんですけど……」「隼人さんは事情聴取か？」「ええ、そっちもですか。何もなけりゃいいんすけどね。」「俺の携帯は知ってるな？」「ええ、体験時の名刺が残ってますから。」「博さんが帰ってきたら連絡してもらおうように伝えてくれるか？」「分かりました。遼さんも

色々大変でしょうが頑張ってください。」

遼は電話を切ると店を若い者に任せて外へ出た。

ラビリンスでは仁と徹が帰ってきたのにも関わらず重苦しい雰囲気
が漂っていた。店はこの日の営業を中止して主な従業員だけ集まり、
仁が話し出すのを皆待っていた。

「今回、親父に連絡したのは誰だ？」店長の三浦が前に出た。「お
前か？三浦。」「はい。」「直後に三浦は吹っ飛んだ。仁の拳が三浦
の頬に命中したからである。「何を勝手な真似してんだ？」「しか
し……」「うるせえよ！」「三浦の腹に仁のつま先がめり込む。「
仁さん！止めてください！」田之上が止めに入った。「離せ！俺は
な、三浦。いくらかかってもいいから親父抜きでやれと言った筈だ。
」「最初はそうしようと思いましたが。だけど親父さんが……」
「介入してきたって事か？」三浦はゆっくりと頷いた。

「あの野郎、勘当したつてのにまだ保護者ヅラしてやがる。何なん
だ……」「でもおかげでこうやって徹も帰ってきた事だし……」
「哲が呟くと仁が睨みつけた。「あの男はこれで俺に借りを作つた
つもりだ。それが我慢ならねえ！」「でもヤクザを2人消したんで
すよ。親父さん以外にあの状況でチャラになんか出来ませんよ。」「
田之上が言った。

「俺は刑務所が怖くねえ。怖いのはあの男に借りを作る事だ。」「
それよりも今後の営業を考えた方がいいと思うぜ、仁。隅田の報復
も充分に考えられるし。」「徹が宥めるように言った。

少し落ち着きを取り戻した仁は咳払いをして話し出した。「三浦、

さつきはカツとなつちまつた。悪い。「気にしてません。親父さんと仁さんの関係はよく分かつてますから。」「もう親父さんと言うな。」「はい。」「今日の予約を入れていた客は次回に来店した時には会計は半額にしる。それと隅田の件だが必ずセラヴィと源氏が絡んでる。」「実は、源氏の店長を家に監禁してるんですが。」「田之上が仁の方へ視線を向けてきた。

「いつ拉致つた?」「今日の3時ごろです。オーナーの隼人が警察に連れて行かれたのがショックだったんでしょう。あちこちに路上で電話してましてね。出勤前だったと思いますが一応と思つて連行しました。」「抵抗したろう?」「少しばかり。まあ臆病な奴だったんですぐ大人しくなりましたよ。」「博つて奴に同情するよ。」「三浦が笑いながら言つた。

「何か聞き出せたか?」「すぐに吐きましたよ。やはり明と隼人が隅田の人間を頼つたみたいですね。」「セラヴィと源氏のオーナーが戻ったら痛めつけてやらないとな。どうせ警察ではいい加減なことを謳つてるだろうし。」「仁はグラスの水を飲み干すとソファに座つた。

「1つ気になることが。」「田之上が仁の前に来た。「何だ?」「どうも明つて野朗が頼つたヤクザは板倉つて男らしいです。」「徹達が虚を突かれたような顔をした。」「ほう、板倉と言えば・・・」「仁が考え込む。「仁さん!俺があ野朗をやります。」「やるつて何を?」「興奮する徹に尋ねた。「殺るんですよ。借りもありますからね。」「お前はやつと自分の足で前へ進もうとしているんだ。あんなチンピラ相手に人生を台無しにするな。」「自分で言いながら妙なものだ」と仁は笑つた。

「でも・・・奴はクズだが頭は回る男だ。今にもここを潰そうと企

んでる。やられる前にやろう！」「例え殺してもまたお前が警察に連れて行かれるだけだし、第2の板倉が現れるだけの事だ。この件は俺に任せてもらう。徹、お前は歌舞伎町一のホストになれ。」「え、いやでも・・・」「三浦！徹と力を合わせて店を守るんだ。俺は田之上と源氏の店長に事情徴収してくる。」コクリと三浦は頷いた。

田之上のマンションに入ると風呂場で手足を縛られていた博が半べそをかいていた。田之上は口に貼っていたガムテープを無造作にはがした。「いてえ！もつと優しく剥がしてくれよ！」田之上にやられたのだろう、博の顔は倍ほどにも膨れ上がっていた。

「なあ、小者。お前んとこの糞オーナーが隅田に泣きついたんだろ？情けねえ。ヤクザが居ないとうちの利益に勝てないんだな。」「へっ・・・この界限で生きようと思ったらヤクザ無しじゃどうにもならねえだろうが！」仁が博の顎を蹴り上げた。「うがっ！」そのまま後ろに仰け反り顎を押さえている。

「で、小者君。お前等が雇ったヤクザの二人は死んだ。3人は重症だ。頭は板倉だな？」博は仁を睨みつけている。思いつきり博の頬を蹴った。もう泣きそうな顔をしていた。「俺は昔サッカーではちよつとしたもんだった。本気で蹴ろうか？サッカーボールみたいにはいかないと思うが。」「分かった！分かりました！」「で、板倉が頭なんだろ？」「はい。俺は会った事すらありませんがうちの隼人さんとはいい関係みたいです。」「いい関係か。ヤクザ相手にいい関係なんて有り得ねえ。覚えておけ。最後は骨までしゃぶられて終了だ。」博は怯えた顔で仁を見つめていた。

「板倉の居場所は？」「それは隼人さんか明さんしか知らないと思います。」「お前死にたくないか？」「はい！死にたくありません。」

「「だつたら俺の言う事をよく聞くんた・・・」

真田がデスクで話し込んでいた。電話の相手は府警の山岸だった。

「ええ、ええ。そうです、マカツコは何の関係もありませんでした。最も奴が本当の事を言つてたらの話ですが。」「懐かしいな、今でも日本の警察はマカツコを壊滅させれずにいるが。ブラジル野郎達とはノータツチって事やな。残念や。」「しかし隅田がそのまま引き下がると思えません。なんせ2人も殺されてるんですから。」
「問題はその坊やが如月一族の次男って事やな。」「信じられませんでしたよ。確かに如月 仁という息子が居ますが父から籍を外されていました。」「なら何で今回親父は息子の不始末をチャラにしたんか・・・ってとこやな。」「はい。我々には分からない世界ですが如月一族相手となると隅田も及び腰のようですね。」「確かあそこの社長は山内の幹部と交流があるはずや。」「そうなんですよ。隅田も山内を敵には回したくないでしょうからね。ところで大阪ではどうなんですか?」「どうって何が?」「マカツコですよ。」「ふん。尻尾すら見えんわ。ちよつと今から連続強盗事件の聞き込みがあるもんでな、これで失礼させてもらうわ。」「お忙しい所すみませんでした。」「いや、なに。マカツコを追いつづけてる馬鹿正直な警察は俺等だけやからな。こつちも何か分かつたらすぐ連絡する。」「では。」

電話を切ると窓の外にあるビル群を眺めた。

この日の午前、如月製薬の社長室に仁と嘉納が居た。英将が入つてくると嘉納はすぐに直立した。仁は俯いたままである。「昨日はお前の家に仁を泊めてもらったそうだな。迷惑をかけた。」「とんで

もありません。」「ふふ、大企業の常務様の家は居心地が良かったぜ。」「おい、クズ。俺はお前を助けたわけじゃない。後々俺の名前に傷つくのを恐れたからだ。勘違いするなよ。」「それは良かった。あんたが親心なんて言い出したらシヨックで会社が潰れちまうかもしれないしな。」「今回だけだ。次はない。お前がどう野垂れ死にしようが関係ない。」「それはどうも。」「社長、話を仁さんから聞いたんですが・・・仁さんの経営される店は歌舞伎町で一番だったみたいです。」「それがどうした？ホスト稼業なんて水物だ。すぐに落ちる。」「あんたみたいに強欲さが顔に滲み出たらホストやつても通用しないだろうな。なんせ女が顔見れば逃げる。」「喋るな、クズが。」「

咳払いした嘉納がまた話を続けた。

「今回ヤクザを動員させたのはライバル店のオーナー2人だそうです。ライバル店は2店舗あるみたいですがオーナー同士が繋がってるみたいです。」「それがどうした。クズの世界に興味はない。今日お前に来てもらったのは金輪際俺との関係のないものにする為だ。今後はヤクザからの介入はお前の店には及ばんようにする。親心ではなくトラブルは困るのだ。」「あんたのお友達に頼むのかい？」「そうだ。山内の相談役に親しい人間が居てな。隅田もそれで引くだろう。今後は知らんが。」「人をクズ呼ばわりする割にはあんたもクズと仲良しじゃないか。」「ふん。ヤクザの世界もここが良くないと相談役にはなれんよ。」「人差し指で自分の頭を指しながら英将は言った。

ドアがノックされた。

「誰だ。」「将太です。」「入れ。」「長男の将太が社長室に入ってくると仁の方へチラッと目をやってから英将の前に立った。

「群馬の工場で作られている製品に毒が混入されてたようです。幸い私がチェックしましたので混入されていた物は全て取り除きました。」「全部という確証はあるのか?」「念の為に総動員でチェックを再度行なっています。今年に入って3度目ですから何か対策を考えないと。」「身内にスパイが居るのだろう。専務、怪しい奴は全て首を切れ。」「え?ですが・・・」「聞こえなかつたのか?」「はい。」「礼をすると社長室から将太は退室した。」

「社長、これは穏やかではありません。」「ふふ。この世界もあまり変わらないじゃないか。」「仁がニヤニヤしながら英将を見た。」「その下品な面はもう見たくない。早く出て行け。」「お前の下品な顔を棚に上げてよく言っぜ。お袋に似た事が唯一の俺の救いなのに。」「早く出て行け!」

仁が退室してから英将はため息をついた。」「社長、仁さんはお言葉ですが将太さんより資質があります。」「それで?」「社長の跡を担うのは仁さんしか居ません。」「何故そう思った?」「英将が微笑みながら質問してきた事に嘉納は意外さを感じた。機嫌が悪くなるだろうと思っただからだ。」

「昨晚、私の部屋に仁さんを泊めました。その時に酒をやりながら話してたんですがね、今回の事件の事を聞いたんですよ。私も弁護士と会う前に店の売上を軽く調べましたが、確かに仁さんの経営される店は歌舞伎町で一番の売上だったようです。従業員に対する心構え、営業、店に対しての内装、サービス。どれを取っても一流の経営者の器です。」「お前がそう感じたのならそうなのだろう。」「でしたら・・・」「しかし奴は底まで落ち尽くした。無理もあるまい。天性の素質があつたにも関わらず、サッカーが出来ない体になつた。」「ですから・・・」「まあ待て。将太は確かに専務までの器だろう。俺は本当は専門職をやらしたほうが奴にとってはい

気がする。仁はそうだな。この会社を継げば面白いとも思う。だが本人にその気がない事と・・・いや、お前に言う事ではないな。忘れる。「はっ・・・では群馬の工場の件ですが私からも調査してみます。「頼む。「嘉納が部屋を出ると英将は何やら日記のような物を取り出し、そして書き出した。

如月 光太郎

如月王国の若き専務である英将は25という若さであるにも関わらずその実力を如何なく発揮し、2代目の如月光太郎が崩御すればすぐにも次期代表取締役に就任するのは誰の目から見ても明らかであった。

アジア屈指の製薬会社である如月王国は初代の功績によるものが大きかった。光太郎はいわゆるお坊ちゃまであり、わがままに育った為、イエスマンしか周囲に置こうとはしなかった。息子の英将は幼い頃から聡明であった。

ある年の正月の親族で集った日に会社の重役達も家に招いて食事が催された。

その食事会で新製品の開発担当部長が現在開発中の薬品を商品化する為のレポートを光太郎に報告していた。各部長達や専務は商品化するにあたり、現在の問題点について討論を始めたのである。

戦後間もないこの時期で国内としては初の画期的な総合感冒薬として期待された商品だったので重役達も熱の籠った討論が展開されていた。もしこの商品が商品化すれば飛躍的に如月製薬は伸びるであろうと皆疑わなかった。

多くの問題点があげられたがその中でも最大に深刻だったのは副作用である。当然薬品には何らかの化学反応が起こって当然だった。この製品の最大の利点は従来の製品とは段違いの回復力にあった。頭痛、鼻炎、発熱などの症状を満遍なく治療出来る。医者が高額なのは新旧同じで、庶民向けの商品としては格段に優れた薬品であっ

た。これも大金を叩いて研究チーム達を支援した賜物であった。

モルモットの示す反応は最悪であった。もし人体にこの成分を入れると間質性肺炎、肝機能障害、喘息による薬剤アレルギー、脳出血などの可能性がある」と報告された。

「で、この問題点の改善方法は？」光太郎が言葉を発すると今まで討論していた重役たちが一斉に静まった。

「ないのか？」皆、顔を俯いて黙ったままである。扉が突然開いた。

そこには中学生になった英将がお茶を運んできた。「会議中だぞ！誰が入っていいと言った？」お母様から持つていくようにと。「

「ちつ、そこに置いて早く部屋から出るんだ。」「はい。」「盆に乗せられた茶の一式をテーブルに置くと、討論されていた用紙の内容を瞬時に彼は理解した。

「お父様。副作用の問題点である改善方法は投与の分量を減らせば良いかと思えます。」「何故その事を知った？」「この部屋に入る前に少し。」「盗み聞きしていたのか？」「すみません。討論中に入っていくのは失礼かと思ひ、静まった頃に入室しました。」「社長。」

突然開発部長である男が立ち上がった。「ご子息の意見は的を得ています。我々も分量を減らす事によってモルモットの反応を調べました。しかし人体による実験でなければ正確な事が分からないのです。」「何故それを報告しなかった？」「それは・・・」「人体実験を恐れたか？」「申し訳ありません。何かトラブルがあればせっかくのこれまでの研究が・・・」「判断するのはこの私だ。勝手な真似はするな！」怒り狂った光太郎は手元にある食器を床に投げ捨

てた。

「おい。」静観していた英将を呼んだ。「お前だ、英将。」慌てて気付いた英将が視線を合わせた時、光太郎は力いっぱい殴りつけた。周囲の重役達は光太郎を止めた。

「離さんか!」「いけません!」その時に妻の凜が部屋へ駆け込んできた。「これは何事ですか?」「貴様がこのガキを寄越したのか?勝手な真似をするな!」「私は親族や皆様の料理に忙しかつたので英将に言付けました。お気に障ったのなら私をぶってください。」英将の赤く腫れた頬を確認してから言った。

「二度とこの部屋に入室はならんぞ!2人とも出て行け!」「お父様、もしよろしければ私を実験に使っていただけませんか?」「英将が唐突に言った。「何だと?」「英将!早く部屋から出なさい!」「凜が叫ぶように言った。このままでは夫は英将を殺すだろうと確信したからである。何も怯まず英将は続けた。

「ただしこの実験のリスクは承知です。それを覚悟で言っています。」「何の真似だ?貴様。」「もし成功すれば僕を雇ってください。」「中学を終えた時点で。」「貴様・・・中卒で終わる気か?」「一年でも早くお父様のお力になりたい・・・」「言い終わる前にもう一度殴られた。

「手を出さないください!」凜が庇うように身を入れた。光太郎の額からはいくつもの汗の雫が床へ落ちていた。

少ししてから光太郎は席へ着いた。「凜、こちらの食事はもう良い。そいつを部屋から出せ。それと、英将。いいだろう。お前の賭け、乗ってやろう。」「あなた!息子を危険にさらすのですか?」「そ

いつが望んだ事だ。息子の気持ちを汲んでやったに過ぎん。」「普段から息子の気持ちを汲んだことはありましたか？」泣きながら凜が呟いた。「このガキは本気だ。体を張って如月製薬の躍進に貢献するという英将の気持ちを汲む。」

この騒動から1週間後に研究チームは英将の体を借りて試作品を服用した。英将はわざわざ寒い時期なのにも関わらず、薄着でこの日まで体調を崩すことに成功した。寒気の状態ですら薬を服用した訳だ。サンプルとして申し分ない。

服用してから数日すると英将の体調は良くなり始めた。問題の副作用に關してもやや強めの眠気が襲ってくるだけであった。

「素晴らしい・・・製薬業界に革命が起こるぞ！」光太郎は興奮を隠し切れなかった。翌週からさらに数人の社員を使って最終テストが行なわれたが成功だった。そこから商品化するまでであったという間だった。この風邪薬は爆発的に売れた。如月製薬が2代目の光太郎に就任してから初のヒット作品であった。価格も一般の消費者が購入出来る程度にリーズナブルであった。

もちろんこの功績によって英将を重役に入れざるを得なくなった。現役であった重役達は満場一致で賛成した。

庭の鯉に餌をやっていた英将へ凜は喋りかけた。

「何故あのような危険な真似をしたのです。」「お母様、何度も言うようにこれは我が一族の飛躍の為でもあったのです。1人息子の自分がリスクを背負うのは当然です。」「貴方の身に何かあればどうするのです！」英将は愛すべき母の顔を数秒ほど見つめた。

「お母様、英将はこの通り元気になりました。あの製品はお父様の最高傑作となるでしょう。」凜は複雑な表情で我が子を見つめた。こんな勇敢で聡明な子を主人は何故嫌うのかと常に思っていた。理由は一つ。英将が生まれる前に実は男子が誕生した。性格にはこの世に誕生する前に流れてしまった。凜は子を宿ることを許されない体になってしまったのである。光太郎のショックは相当だった。

如月家の血筋を絶やしてはならないと、以前から光太郎が目をつけていた若い女中に子を宿した。和姦ではなく無理矢理であった。貧しい娘は家族の顔を思い出しながら耐えた。そして英将が生まれた。英将が大きくなる前に女中はこの家から去った。多額の金を受け取ってである。

この事を知る人間は光太郎、凜、一部の親族。そして当時の執事だけであった。現在の執事である喜一がこの家に来た時には女中はすでに去った後であったから彼は知らない。メディアにも英将が妾の子である事を伏せる為に凜は家の中から英将が生まれるまで外出すらも避けた。

だが血の繋がってないとは言え、戸籍上で息子となった英将を凜は愛した。英将も強くそれを感じていた事だろう。光太郎からすれば妾の1人に過ぎなかった女の子供である。不思議と子が宿つたのはその女中だけであった。光太郎の女性関係は派手であった。凜もそれは承知していた。子を宿せない自分が悪いのだと言い聞かせたが何度も耐えがたい屈辱を胸に閉まっていた。

地元の中学を卒業した英将は父との約束通り、如月製薬の重役として入社したのである。天下の如月製薬の1人息子が中学卒業後に入

社というのは当時ちょっとしたニュースになった。世間は親馬鹿で入社させたのだろうと呆れ返っていたが、彼は2年で社内の人事、開発、営業、事務に至るまで把握してしまった。

頭の良い子供だとは思っていたが光太郎は妾の子が自分にとって脅威になるであろうと考えた。しかしその能力は社にとってかけがえの無いものであるとも考えた。

彼のプレイボーイぶりは目を見張るものがあつた。スチュワード、女優、財閥の娘、外国のタレントなど止まるどころを知らなかつた。そんな英将が25になる年に出会つた最愛の女性が天道渚である。

渚と初めてセックスをしたのは付き合いだしてから2ヶ月ほど経つた2人の初めての旅行の事である。英将は気にいった女はすぐにも手を出した。不思議と渚に対してはただ傍に居るといっただけで胸が張り裂けそうになつた。

天道家の両親からはあまり良く思われていなかった。娘の相手が如月製薬の次期社長ともなれば普通の家なら玉の輿である。しかし天道家はいわゆる古風な家柄であつた為にスキヤンダル塗れの英将を快く思わなかつたのは当然であつた。両親よりもさらに手強かつたのは渚の兄である天道真であつた。自分よりも1つ年下であるが剣道の腕は国内でも指折りとされており、性格も厳格で可愛い妹を誑かす英将を殺してやりたいとも思っていた。

何度も2人は衝突した。

「帰れ！外道が。」「お兄ちゃん！違うわ。お兄ちゃんはこの人を誤解しているけど本当は優しい人よ。私にとても良くしてくれるわ。」「お前は黙ってる！こいつの周りは女のスキヤンダルだらけじゃ

ないか！俺は許さんぞ！こんな男の嫁に行くなど天道家の恥だ！」

英将が真の前に立った。「何だ、貴様。」「私は確かに今まで本当に女性を愛するという事を知りませんでした。貴方の妹に会うまでは。誓つてもいい。必ずこの渚を幸せに見せます！」英将が頭を下げたのは父以外は記憶になかった。

「笑わせるな。そうやって今まで他の女にも同じ台詞を吐いてきたんだろう？俺がその気になれば刀を使うまでもなく竹刀でお前の脳天を叩き割る事も出来るんだぞ。」「構いません。渚の為に死ぬるのなら本望です。」「渚などと気安く呼ぶな、本当に殺してやるのか？」

「お兄ちゃん！私のお腹にはこの人の子が宿っているの・・・だからもう・・・」「何だと？」真の顔が真っ赤になった。「渚の言った事は本当です。私は責任を持って彼女と子供を育て上げます。ですから・・・」突然、英将の脳天に強い衝撃が奔った。渚が気付くと英将の額から血が流れていた。

「何てことを！」「うるさい！恥を知れ！お前は天道家の名を汚したんだ！」「認めてもらえないのなら仕方ないわ。」「渚、下がってる。」「私は貴方と一緒になれないのなら死んだ方がましです。」「渚の右手に果物ナイフが握り締められていた。

「そのナイフでどうするつもりだ？親の気持ち考えた事はあるのか、渚。」「落ち着いた口調ではあったが真はどこか取り乱していた。」「それじゃ、私の気持ちは考えた事があるの？最後に聞いわ。どうしても私達を認めてはくれないのね？」「認めん。」

その瞬間に渚はためらわず自分の喉下に果物ナイフを両手で突きつ

けた、かに見えたが真の竹刀が渚の両手を弾くのが先であった。

この騒動から数日後に英将は天道家に呼ばれた。正式に結婚を認めるといふ両親からの承諾を得た。兄の真だけが納得していない顔をしていた。

父の光太郎は重い病に伏せていた。看病する母の凜は結婚を喜んでくれた。父の光太郎は幼い頃から比べると英将に対する辛い仕打ちはなくなっていた。男として認めてくれたのだろう。結婚を報告すると自分はもう長くはないという返事が返ってきた。

そして会社を自分に託すとも。翌日に全ての重役たちが如月家に集められた。全ての重役たちの前で光太郎は3代目を英将に任せるとだけ言い、床に戻った。

それから1ヶ月しないうちに光太郎は天に召された。英将はこの時妻と代表取締役という2つを手に入れ、父のイエスマンだけであった無能な重役たちを解任し、新しい血を社内に注ぎ込んだ。如月製薬はまた若く生まれ変わる事になる。

英将に追い出されてから会社を出ると背後から駆け足で兄が走ってきた。

「無事のように何よりだ。」将太は仁の顔を見ると不器用な笑顔で笑った。「兄さんには心配をかけたね。」「俺はいい。おばあちゃんや喜一、冥や光寿も皆心配している。一度家に戻って顔を見せてやってくれないか?」「ああ、そりゃもちろん・・・でも兄さんが俺の事心配してるなんてちょっと意外だったな。」「俺はお前の兄

だぞ。「でもあいつの会社に入ってからまともに話した事なんか無かったしね。」「それより、お前の店は繁盛してるみたいじゃないか。さすがは如月家の男子だな。」「兄さんこそすっかり社会人だね。さつき社長室に入ってきた時なんて様になってたよ。」「からかうな。ところでお前はこの先、歌舞伎町の店でやっていくんだよな？今まで通り・・・」「え？あ、ああ。それがどうしたんだい？」「ならいいんだ。困った事があつたら俺に言ってくれ。出来る事は協力するから。」「兄さんに迷惑かけるような事はないよ。でも、ありがとう。」「

その日、如月家に戻ると祖母の凜は泣き出し、執事の喜一は散々と説教を垂れ、姉の冥には皮肉を言われて、光寿には二度と問題を起こさないように約束をさせられた。

久しく空けていた自分の部屋に戻ると三浦に電話を入れた。

「ご無事で何よりでした。」「お前の要らん世話のおかげでな。しかし今回は助かったよ。」「どうやらお父様からの圧力により隅田の方も手を引くようです。セラヴィと源氏もこの騒動でオーナー2人が警察に引つ張られました。」「厳重注意で終わったようです。最も隅田がこの2人を無事に済ますとは思えません。」「自業自得だろ。しかし死人が出たのによく警察は手を引いたな。」「死んだのもヤクザだからでしょう。今後は仁さんに対してマークがきつくなると思いますが。」「ああ。今日は実家に泊まるから明日の夜、店に顔を出すよ。従業員達にも宜しく言ってくれ。これからさらに大変だぞ。」「はい。」「

町田 京子

銀座7丁目に数ある高級クラブの中でも一際目立っている店がグレスフルスワンである。

ボックスは40席もありその一つ一つが贅沢なスペースで構成されている。従業員の女性達も軽く100名を超える。イレギュラーな出勤女性達を含めばそれ以上になる。

来る客は会員制になっており、企業の取締役や役員、芸能人、銀行の頭取や政治家までに至る。女性従業員の中には自分の客がどれほど大物かを競っている女性達も少なくない。

そんな中の1人である町田 京子は今日来る自分の顧客を周囲の従業員達に自慢していた。彼女達の自慢はいかに自分の顧客が金を持っているかによる。大学の進学を期に上京してきた彼女は卒業後、企業勤めを1年してから退職、友人の誘いで銀座入りした。元々容姿は恵まれていたので客は付いたが体を要求してくる者も多く、嫌気がさしてきた頃にあの客が来た。

如月製薬といえば学のない者でも知っているメガカンパニーである。その頂点に立つ如月英将の長男であり役員でもある如月将太が三橋銀行の偉い達と来店してきた。京子は奮えた。彼の容姿や立ち振る舞いには何も惹かれる物は無かった。大事なのは彼の肩書きである。もしうまく取り入り彼の第一夫人にでもなれば一生安泰である。彼女の物欲の前では高級クラブの売れっ子が稼ぐ給料でも無いに等しかった。

一方の将太といえば、学生時代に付き合った彼女と自然消滅してか

ら決まった女は居なかった。興味は父、英将をトップから引き摺り下ろし、自分が王になることであった。長女の冥はモデル事務所を構えるだけあつて華やかだし、次男の仁は絶世のプレイボーイである。末っ子の光寿のみが地味と言えど地味だが可愛い幼馴染の彼女が居れば、彼の容姿も悪くはない。お洒落をすれば仁とまではいかずともハンサムな顔立ちをしていた。

兄弟の中で長男である自分が一番冴えない容姿をしていたのは自覚していた。妹や弟達に対してコンプレックスを感じていたのも事実である。だが冥は女で仁はアウトローの道へと進んだ。光寿に至っては動物意外に興味はないという感じだ。やはり自分しか居ないのである。如月王国の頂点に立つのは自分であると言ひ聞かすことで多少の慰めにはなつた。

町田京子と出会つたのは昨年の年末頃に訪れたグレースフルスワンである。銀行の偉い達が銀座の中でもここは間違いないと接待で連れて来られた。内装、女性、サービスを含め確かに素晴らしかった。横に付いたのが彼女であり、それ以来彼女以外を指名したことはない。彼女の容姿、香水の臭いや振る舞い、言動など自分を満足させるに充分だった。何回か来店した後はアフター、同伴を経てプライベートでも会うようになっていた。女性経験はバイト時代に付き合つた女性を除くと皆無であつた。それ以外はピンクの店で性欲を処理していた。女性への不信が歳を重ねる毎に強くなっていく。

よつて、女性に対する積極性は無いに等しく彼女の方から自分のマンションへと誘つてきた。ベッドでの彼女も自分を夢中にさせた。長い足、引き締まつたヒップに形の整つた胸。感度も相当なもので目の前で喘がれると飽きる事無く彼女を抱けることが出来た。

ただ彼女の要求は日が経つにつれエスカレートしていった。最初は香水やちよつとしたブランドの洋服であったが、今ではダイヤ、高級車などを当たり前に要求するようになった。初めの頃は惚れた弱みとして承認していたが、いくら如月製薬の重役とは言え彼女の要求を聞いていればとてもじゃないが足りなかった。

その日も彼女が出勤する20時頃きっかりに来店し、水割りを頼張りながら彼女の体のラインを眺めた。いつ見ても飽きることはない。こんな女はそうは居ない。それを考えながらも今日告げなければいけない事を考えると憂鬱にもなった。

「今日は一段と見栄えがいいわね。前に私が選んだカフス、似合ってるわよ。」「そうか。」「どうしたの?」いつもより元気がない将太に尋ねた。

「実は前にお前が言ってたバッグな。ここ最近出費が酷くてしばらく抑えようかと思ってるんだ。当然そのバッグも買ってやる事は出来ない。」「なによ、約束していたのに。」「悪いが俺は財布じゃないし、お前のATMでもないんだ。もしそれでも納得が出来なければ別れてもいい。」ハつとした京子は急に泣きそうになり顔を伏せた。

「おい・・・俺はお前を愛してるがお前が俺を愛してるのは俺の肩書きなんじゃないかと思ってね。」京子との付き合いに会社の友人がアドバイスしてくれた。友人である彼の肩書きは将太の部下に過ぎないが年は近く、プライベートでもたまに飲みに行く仲だった。

「将太さん、最近銀座の女と付き合ってるんですよね?」「誰から聞いた?」「そんなもん、すぐ噂になりますって。ただでさえ女の影が見えない人なのに。」「ふふ。グレースフルスワンの京子って

女だよ。」「そう、その店。その子って・・・源氏名がリカじゃなかったです?」「知ってるのか?」「直接は知らないですよ。ただあの店では売れっ子ですし、俺も店には行った事あるんですよ。」「お前の稼ぎでか?古賀。」「人が悪いなあ。どうせ貧乏ですよ、俺は。連れてつてもらったんですよ。」「冗談だよ。で、京子がどうかしたか?」

その問いに少し間を置いて決心したかのように古賀は話し始めた。

「いい噂を聞かないんですよ。客を金としか思っていないし。もちろん、あの業界に居る女はまず金でしょう。指名されたりして彼女達も成り上がっていくんだからいいですよ。でもあのリカ、いや京子という女は引き出す金がもうないと分かると平気で捨てるんですよ。男を。」「ほう。」「明らかに将太の手が震えだしたことを古賀は気付いた。

「あ、すみません。もうこんな話聞きたくないですよね。」「途中で終わるのはフェアじゃないな・・・」将太の表情は先程と比べ余裕がなくなっただかに見えた。

「すみません、将太さん。気分を悪くさせるつもりはなかったんですけど・・・でもあの女はお勧め出来ません。俺、女房居るじゃないですか。あいつも昔銀座に居たんですよ。まあ、スワンのような一流店ではないですけど、そこそこ売れてたんですよ。」「それで?」「丁度、うちの女房がネオン街を卒業する頃に彼女は銀座入りしたみたいで。」「銀座も広いようで狭いからな。スワンの噂が古賀の女房にまで伝わってきたって事だな?」「はい。さっき言った金を引き出す件もそうですが借金もすごいらしいですね。カード地獄みたいですよ・・・金を引き出すなら客とも簡単に寝るようです。」「そんな女に夢中になってる俺を馬鹿にしてるのか?」

将太の顔色が真っ赤になっているのが分かった。

「待つてくださいよ。これは忠告です。」確かに古賀は自分を怒らせるような事をわざわざする人間ではない。ましてや自分は如月家の人間である。古賀もそこまで馬鹿じゃない。

そして高級ブランド品や外車を要求する彼女は、確かに古賀の言っている事は嘘ではないと思わせる。以前を振り返っても付き合ってからの数ヶ月間で彼女に費やした額は300万にもなる。恐ろしい金額であった。

泣き出した京子は少しすると顔を上げて笑顔が無理に作った。「ごめんね。将ちゃんは今お客様なのにこんな顔で。化粧室で顔を直して来てもいい?」「ああ。」京子が席を外すと同時にマルボロに火を点けた。ウェイターが飛んできて粗相がなかったか尋ねてきた。

「何でもない。俺がちよつときつい事を言ってしまったただけだ。すぐ彼女は帰ってくるよ。」安堵したウェイターは礼をして立ち去った。無理もない。店のママからは自分に粗相がないようにきつく言われているんだろう。

戻ってきた京子は正面に座ると笑顔に戻っていた。

「ごめんね、将ちゃん。さっきは取り乱してつい泣いちゃった。確かに私は無理な要求ばかりをしていたみたい。ついつい将ちゃんの優しさに甘えちゃった。でもね、将ちゃんに捨てられたら私は何も残らない。改めるから捨てないで。」この表情も全て彼女の演技なのか?古賀曰く、窮地を脱する為なら手段を選ばない彼女の話の聞

いていたから素直に信じる事は出来なかった。

「とにかく、俺はもう無駄遣いは出来ないという事だ。」「今すぐに私を信じてもらうのは無理だと思うけど・・・これからの私を見て欲しいの。それでも私が駄目だと思ったらその時は構わないわ。」よく考えると彼女の物欲には吐き気がするが、彼女の体を考えると捨てるのも惜しい気がする。改めると言っているのだから今は様子を見てからでも遅くはないと判断した。

「分かった。これからに期待するよ。今日はこれで帰る。」「店が終わったら家に行ってもいい?」「ああ。」「良かった・・・本当に良かった・・・」ポロポロと流れる涙を将太は信用していなかった。

深夜の2時前に彼女はマンションを訪れた。京子の高級マンションとは違い、自分のマンションはお世辞にも高級とは言えない。中には貧乏学生もこのマンションに住んでいる。もちろんマンションにはいくつかの部屋のタイプがあり、自分の所はこのマンションではかなり広めの方だが、如月製薬の重役としては粗末な部屋だった。

家上がりシャワーを浴びたいと言ったので軽く頷いた。シャワーから出てきた彼女はバスタオル一枚だけを纏って自分の横に腰を降ろした。やはりこの女はいい体をしている。高級売春婦だと思えばいい。そう考えると頭の中のモヤモヤが一気に晴れた。胸が痛かったのはバイト時代に付き合ったあの彼女だけだ。古賀に聞かされたときはさすがに動揺したが、自分もそれなりに耐久力が付いた。

一度そう考えるとこの女を無茶苦茶にしてやろうと思った。バスタオルを剥がしソファに押し倒した。乳首を舐め、そのまま下のほうまで愛撫した。彼女の反応は以前通り、もしくはそれ以上であった。

将太は興奮した。愛撫もほどほどに自分の物を彼女に入れた。こころなしか今までよりも彼女と一緒になつた感触が心地よかつた。たった数分で果てた将太は1時間後にまた抱いた。その夜は結局朝方5時までには及んだ。

8時に目覚まして目覚めた将太は横に彼女がいない事に気付いた。テーブルの上に置手紙がありその横には白飯、卵焼き、味噌汁が置かれてありそれぞれにラップがしてあつた。昼から友人と買い物があるから帰ると言う事と、愛してるという言葉が書き残されていた。

レンジで温めた彼女の簡単な手料理は旨かつた。今まで手料理を作つてもらつたのは無かつた。これも自分に気に入られようとしている行動なら可愛いのだが、全て彼女の演技だと思つたと手放しでは喜べない。ただ、彼女の体を独占出来るのを考えるとこの関係も悪くはなかつた。それに今だけかも知れないが無理な要求もない。

その日の仕事を終えたのは午後9時を回つた。父から依頼された書類の作成に予想してたより手間がかつたのである。その日は家の近所のスーパーで飲み物とトイレトペーパーを購入し帰宅した。

部屋の感じが違う事に気付いたのは靴を脱いでからである。床にはゴミが見当たらず綺麗に拭かれていた。テーブルの上やキッチン、バスルーム、トイレに至るまで全て綺麗に清掃されていた。思い当たるのは京子しか居ない。なんせこの部屋に入った女は京子のみであり、彼女はこの部屋のスペアキーを持っている。今度は置手紙などなかった。京子は今日も出勤のはずであるから、午後はこの部屋を訪れて店に出たのだろう。

2日後に京子がマンションを訪れた時に部屋の掃除について尋ねた。

「迷惑じゃなかった？」「いや、気持ちがいいくらいに部屋が綺麗になってたよ。」「良かった。迷惑なら言っただけ。」その日も飽きる事無く彼女の体を堪能し、翌日にはテーブルに朝食が置かれていた。掃除の方も見た限り週2、3回はここに訪れている。自分が居ない間に。

そんな生活が2週間ほど続くと将太の気持ちは彼女に傾いていった。ある日、古賀が京子と腕を組んで歩いているのを目撃したと冷やかされた。

「まだ付き合ってたんですね。ガツンって言うと思ったのに。」「言っただよ。それから改心したのか無理な事も言わなくなったし、えらく素直になったな。」「気をつけてくださいよ。それが彼女の手なんです。」「でも家に来るたびに朝食こしらえて、週に何回か俺が留守してる間、部屋を掃除するなんてお前出来るか？」「あの女なら余裕でそれくらいしますよ。なんせ目が\$マークになってるもん。あ、¥マークか。」「お前、そんなこと言っただけで彼女の体を堪能してる俺が羨ましいんじゃないか？」「体に関しては羨ましいです。」将太も思わず吹き出した。

「俺もな、今は何も要求されていないしあいつの体を利用出来る内は利用しよう」と割り切っているのさ。」「それならいいですけど、何か彼女、企んでる気がするんだよねあ……。」「まあまあ。何かあればすぐ切るさ。」

携帯電話が鳴り出した。古賀に断りを入れその場を離れてから受話器を取った。

「如月ですが。」「如月さん、返済日が過ぎてるんですがね。」

ああ、分かつてる。今後は遅れる事もない。「て言っても先月も同じ事言っていましたかね。」「もう先月までの出費がなくなっただから全額返済出来るよ。利息も当然な。」「ならいいんですが。なんていっても如月製薬の次期社長様ですからね。この程度の返済なんてちよろいもんでしょ?」「とにかく。来月の頭には返済出来るからこちらから連絡する。」「頼みますよ。上からプレッシャーかけられてる俺の身にもなってくださいよ。」「

軽く舌打ちをして携帯を上着の内ポケットに入れた。

ホスト

如月 冥は離婚して数週間は家に籠りきりになっていた。自身が経営する店は下の従業員に任せてはいたが、やがて心配になり無理をしても復帰するようにした。

復帰するきっかけとなったのは嘉納が慰めてくれたからである。部屋までわざわざ訪れて花束までくれた。気付けば彼の胸に飛び込んでいた。彼は優しく頭を撫でてくれた。それは5分だったかもしれないし15分以上の間、そうしてたかもしれない。とにかくその時は嘉納の事で頭がいっぱいになった。

店にも復帰し、ようやく本来の自分を取り戻せた頃くらいに弟の仁が歌舞伎町で騒ぎを起こしたらしい。幸い彼の命は問題なかったがヤクザを2人も死なせたらしい。本当に自分の弟なのかと疑った。店にも復帰して生活も落ち着いてきた矢先に精神状態がまた不安定になってきたのである。

不安定な精神状態に対して心当たりはあった。自分という人間は普段は強く見せてはいるが、結局男次第なのだ。学生の頃に付き合っていた彼氏とも、あの事件が起こるまでは幸せだった。

その後は嘉納への片思いである。離婚した旦那も最初は優しくかった。自分は結局、男1つで左右されるのである。本心はプライドが許さなかったが、出来心で訪れたホストクラブにお気に入りのホストを見つけた。もちろんホストという人種を理解してはいた。多数の女性との擬似恋愛が仕事である。

冥は遊び半分のつもりで1人のホストと恋に落ちた。

「今日も指名してくれてありがとう。仕事抜きで冥とは会いたくないけどそうもいかなくてね。」長身で細みのホストは言った。「構わないわ。仕事が忙しいのはいい事よ。私だって何もしていない暇な男なんか興味はないし。」俺、ホストやってて良かったと思ってるよ。最初はうまくやっていけるのかと思っただけど。「何で良かったと思えたの?」「冥と出会えたから。」財産目当てで言い寄ってくる男たちは皆軽かった。歯が浮くような台詞を惜しみなく吐き出してきたものだ。自分はもうそんな甘い言葉には落ちる事もなかった。しかし女と言うのは嘘だと解っただけでも嬉しいものではない。

目の前に居るホストは太治という名前だった。付き合うようになったから免許証も見せてもらった事があるが本名だった。何故本名でホストをやっているのか聞いた事があるが、親から貰った名前を偽りたくないとの事だった。そんな親思いの太治にますます惹かれていった。歳は自分よりも2つ下だった。

弟の仁とそう変わらない。だが年齢の割に落ち着いていた。

太治はナンバー1ではなかったがセラヴィという店の中で売れっ子だった。貴重な週一の休みも冥の為にいつも空けてくれていた。彼はあまり外出をしながらず、もっぱら彼の家で休日は愛し合った。たまの外出で食事に出かける時も自分の方が店をよく知っていたので先導する事が多かった。

付き合ってから2ヶ月ほど経った頃に太治は纏まった金が必要だと言ってきた。利息も高めでいいから貸して欲しいと相談してきたのだ。用途を聞くと母親の手術代であった。肺がんで入院する母の治療費の為に100万円が必要だと言う。彼の事を愛していたのと家のスペアキーを渡されていた事もあり、信用して貸したのだ。利息も要

らないと言った。

太治はその後も冥に何かと理由をつけて金をせびってくるようになった。

「ちよつと待つて。母の手術費と入院費、車の修理代やら最近の家賃まで。何故そんなにお金に困ってるの?」「うるさいなあ、いつぱしのホストがボロボロの車に乗れるわけないだろう?家賃だつてお前も半分住んでるようなもんなんだから、少しくらい協力してくれたつていいじゃないか。」「それにしたつて家賃にも困るくらいなら実家から通えばいいじゃない?私だつてそうしてるわよ。」「お前と一緒に居る空間の為だろ!」「それは構わないわ。ホテルに行けばいいじゃないの?毎月の家賃を考えたら・・・。」「うるせえ!何だつたら別れてもいいんだぜ?」

付き合つた頃から考えると太治の態度は急変した。

「何でそうなるのよ?私はあなたにとって何なの?」「彼女だよ。俺の事を愛してるんだつたら貸してくれてもいいじゃないか!」「最初に借りた入院費だつて全然返してもらつてないわ。」「色々お金が要るんだよ!少しすれば絶対返すよ!」「いい?これが最後よ。この20万円が最後。もう金輪際、貴方に貸す事はないわ!」「冥の目から涙が零れた。

「なあ、本当に感謝してるよ。」「急に太治は優しい口調になり肩に腕を回してきた。「私は財布じゃないわ・・・。」「分かつてる。本当に悪いと思つてるよ。すぐに返すよ。な?」「力を振り絞つて少しだけ頷いた。

「冥、最近俺たちご無沙汰だったろ?いいだろ?」太治の手が胸の

所へと伸びてきた。すぐに振り払い、拒んだ。「ごめん。今はそういう気分になれないの。」「俺の事が嫌になったのか?」「そうじゃないけど・・・バツイチの女と付き合ってくれてすごく感謝してるわよ。でも私が欲しいのは・・・」「悪かったよ。冥の気持ちも考えずに。外まで送ろう。」「

その日は店にも出ずに自宅へと戻った。顔色が悪いのを喜一が心配してきたが何でもないと行ってごまかした。

その夜は太治の事を考えていた。

「ねえ、貴方みたいに素敵な女性が何でホストクラブに来るの? -

「その素敵な服も冥だから似合うんだろうね。 -

「冥と居ると客って事を忘れそう怖いよ。 -

店に通い始めた頃を思い出していると、やはり太治もホストなのだろう。自分は客であってそれ以上でも以下でもない。

携帯電話のバイブ音がバッグの中から聞こえた。相手は意外にも弟の仁だった。

「もしもし、珍しいわね?」「何でそんな細かい声なんだよ。俺じや不満かい?」「私だって気分が優れない事もあるわ。」「少し間が空いて仁が喋り始めた。

「俺も仕事があるし、姉貴も知ってるだろうがあんな事件もあった。今は時間がなくてゆっくり姉貴と話してる時間はないんだけど、少し気になる事があってね。」「何よ?」「

カチツという音が聞こえた。「仁。貴方、煙草は吸わないんじゃないかなかった?」「ストレスつてのは怖いね。ノンスモーカーだった俺でもたまに吸ってしまうようになった。実は昨日からなんだけどね。」
「煙草は碌な事がないわ。止めときなさい。」「ああ、全くだ。」
「それで気になる事って何よ?」「参ったよ。相手が身内じゃなければ単刀直入に言えるんだが……姉貴相手だとこの話をするのは辛いよ。」「焦らさないでよ。どうしたの?」

またもや少しの沈黙があり煙草の煙を吐き出す仁の声が聞こえただけである。そして間もなくすると決意したのか軽快に仁は口を開いた。

「姉貴、セラヴィって店に通ってない?」冥は動揺した。電話相手の仁には分からなかっただろうが、それがどうしたと返答するまでに間が空いた。

「そのこのホストと付き合ってるんだって?」「プライベートを干渉されたくないわ。」「もちろん。姉貴の人生だし相手がホストというのは問題じゃないんだ。ま、本音を言えばホストの彼氏はお勧め出来ないけど。自分が経営してるだけに。」「たまたまよ。別に貴方がホストクラブを立ち上げたのは知ってたけど、あえて隠してた訳じゃないわ。」「姉貴の性格は分かっているつもりだよ。ただ、問題は太治ってホストなんだ。」

つい先程まで太治の事を考えてた頃に疎遠になっていた弟からの電話である。

「太治がどうかした……?」冥の声はさらにか細くなったようだった。「あまり評判はよくないね。」「例えば?」「仕事は出来るみたいだ。俺はセラヴィのオーナーと色々あつただけど、前の件

の手打ち以来はお互いの仕事の足を引つ張るのは止めたんだ。ま、俺は奴の邪魔なんてしたつもりはないけど。うちの店が潤えば自然とセラヴィは売上が落ちるんだ。仕方ないけど。」「太治の話をしてたんじゃないの?」「冥はややイラついた口調へと変わった。

「焦るなつて。その太治はオーナー曰く仕事は出来る男らしい。店に入つて1年も経つてないが指名も多く店からすると優良な従業員つて訳だ。」「そんな事知ってるわよ。」「ただ、ここ最近から太治の客からクレームが何件か入つてゐるみたいなんだ。」「どんな・・?」「金銭トラブルさ。心当たりないかい?」「・・いえ・・。他のお客さんとの話、彼は私にしないから・・。」「自分の彼女に金銭トラブルの話をする馬鹿はいねえよな。さすがに。今クレームが来てるだけで4件。合計すると300万は借りてゐるみたいだ。最も返す気もなさそうだけど・・。姉貴知らなかつたのかい?」「・・ええ。初耳だわ。」「良かった。まだ間に合つたみたいだ。奴は酷かも知れんが悪党だよ。いや、小悪党つて言つたほうが正確かな。」「ちよつと待つて!私の彼氏よ?その話は確かなの?冗談じゃ済まないわよ!」

自分が取り乱していくのが分かつた。相手は弟である。落ち着かなければ。

「姉貴・・。冗談でたまの電話にこんな事言わないよ。セラヴィのオーナーともゴタゴタはあつたが骨はある男だぜ。信用できる。太治の客の1人が裁判沙汰にしようとしてゐるらしい。弁護士一人にしても高くつくしね。その内姉貴にも強請つてくると思うよ。」「そんな事・・。」「姉貴!しつかりしろよ。奴はどうせ姉貴が如月家の人間だつて事を知つてるんだろ?いいカモだぜ。」「何であるにそんな事言われなきやならないのよ!」「落ち着け。俺がろくでなしのは百も承知だ。親父は殺したいほど憎いが、兄弟の事を考

えるとちゃんと伝えないとって思ったんだ。」「そのオーナーの情報は確かなの・・・?」「ああ、間違いないだろう。だって奴は売れっ子のホストなんだぜ? オーナーからすれば自分の店の売れっ子が金銭トラブルに陥ってるなんて俺に言うかな?」「何か企んでいるとか・・・」「俺等2人の間にヤクザまで入ってもめたんだぜ。それで親父の手が入って手打ちになった。奴も如月家に喧嘩売るような真似はもうしないよ。」「

仁の言ってることは最もだった。なぜなら数時間前に太治は金を求めてきた。しかも一度や2度ではない。母の手術費用は嘘なのだろう。やり場のない怒りと喪失感が襲ってきた。「ちよつと・・・頭の中がうまく整理出来なくて・・・」「無理もないよ。彼氏だもん。でも被害にあってないだけマシだと思わなきゃ・・・姉貴がい 아니라俺が間に入って別れさせてやるうか?」「待つて。私の口から聞いてみる。」「聞くタマじゃないぜ、奴は。」「どういう事?」
2本目の煙草に火を点ける音が聞こえた。

「どうも、奴の周辺がきな臭いんだ。はっきりと証拠が無いから言えないけど、店に入る前はホスト経験なんて無かつたらしいんだ。俺はホストの皮を被った詐欺師だと思ってる。それに・・・」「それに?」「奴は平気で女に暴力を振るうぜ。」「暴力は受けた事が無かつた。ただし、それ寸前までいきかけた事はあつた。先程もこちらが譲歩していなければ暴力を行使してきた可能性がある。」

「姉貴がどうしてもってんなら俺は引くよ。ただ・・・被害に遭えば余計に辛くなるだけだ。俺は姉貴の味方だからさ。何かあれば絶対に報告してくれ。」「・・・ありがとう仁。怒鳴ってごめんね・・・」「無理もないさ。気にしてないよ。じゃあな。」「そこで電話は切れた。」

受話器も握り締めたまま、しばらく冥は呆然としていた。

失踪

兄が歌舞伎町で騒動を起こしたのも父の手によって片付けられたのは知っていた。

苦手な父、あまり口を交わさない長男、煌びやかではあるが男運のない長女、アウトローな世界へ舞い降りた次男。はつきり言って家族はバラバラだった。崩壊状態と言ってもいいだろう。

全ての歯車が狂いだしたのは母が死んでからだ。自分も含めて子供達は母の事が好きだった。いかに父が厳しかろうと母の愛情はそれすらも癒してくれた。自分は特に母親に可愛がられたと言ってもいい。末っ子というのが大きい。人見知りが異常に激しく母親に常に守られていたと言ってもいい。

今現在で深い話が出るのは祖母の凜。執事の喜一。幼馴染の美咲、正確には男と女の関係になっているが、彼女と捉えるのは自分では照れてしまう。最後に美咲の父であり自分の理解者でもある司郎。

随分と他人に比べれば少ないのだろう。しかし友達が多い人間でもいざ裸のままの自分をさらけ出せる相手は少ないものだ。自分には少なくとも5人居る。しかし自分の中で変化が起きたのだ。自分自身ではよく分からないのだが他人から明るくなったと言われる事。しばしばあった。

特に執事の喜一から最近言われる。実家に戻った時の事。「坊ちゃん、最近どうもおかしいねえ。」笑うと銀歯が目立つ。「何が?」「いやいや、隠したって分かるんだよ。俺も伊達に長年生きてねえ。」喜一は今では珍しい江戸っ子気質であり堅苦しい如月家の中だけ

に余計目立つ。光寿はそれが嫌いではなかった。

「何も隠してないよ。」半ば面倒に返事をした。「これだね？」喜一が小指をクイッと上げる。「ふふ。」自然と笑いが出てしまった。実は喜一の間抜けな顔がおかしかったのである。「ほら、やっぱり。俺の勘も捨てたもんじゃねえ。」得意げな喜一の顔を見るとまたおかしさがこみ上げて来た。

「坊ちゃんが最近嬉しそうな顔をしてやがるから俺まで嬉しくなっちゃまう。へっへっへっ。」「そりやどうも。」「少しおじぎをして部屋に戻ろうとすると、背中から喜一が呟いた。

「あの美咲ちゃんって子かい？それなら間違いねえ。ありやいい女になるよ。今でも可愛いがね、何てったって器量がいいよ、あの娘は。」「しかしよく僕の事を好きになったもんだ。」降り返って言った。「坊ちゃんよ、そりや自分の事を悲観しすぎだ。俺は子供全員が俺の孫みたいに思ってる。だけど一番可愛いのは坊ちゃんよ。」「そんな事言ったら兄さん達や姉さんは怒ると思うよ。」

喜一が右手でそれは無いというような仕草をした。「まず若は内気な上に何考えてるか分からねえ。そもそも俺の事は避けてるように見えるしな。」喜一は将太兄さんの事を若と呼ぶ。「僕も内気だと思っけど。」「そんなんじゃねえんだ。タイプが違うよ。坊ちゃんは何て言うか子供らしい可愛気があるけどよ、やつこさんはそんなタマじゃねえ。」「どんなタイプなの？」「うーん、俺は言葉知らねえけどよ？何て言うか不気味なんだよ。ここだけの話。」「そんな事言っちゃ駄目だと思っよ。執事なのに。」「あ、いやいや。ここだけの話にしてくれよな。」「はいはい。」姉さんや仁兄さんについて喜一は何か言いたそうにしてたがうんざりだった。

喜一を撒いて自室へ入った。衣類やテレビなどをアパートの方へ移動しただけで以前と何も変わりが無い。今日戻ったのは歯医者に行くのに保険証を取りに来た為だ。他に用事があつた訳でもなかつたが、祖母には一度会つておこうと思つた。

祖母の凜は普段部屋から出てくることはない。視力がほとんど失つてゐるらしく、夫に先立たれ息子の英将とも長く口を聞いていない。息子と喋る機会といえば元旦の挨拶の時くらいのものだ。凜は英将に嫁いだ渚を大変気に入つてゐた。料理を始め、理想の妻というのはどんなものを自分なりに教えたつもりだ。嫌な顔1つせず凜になつた。その娘も失つた。

今の唯一の生甲斐は自分の目の前に居る光寿である。末っ子だが兄弟達の中で唯一綺麗な目をしてゐると思つた。今となつては孫の顔もはつきりとは見えないが声を聞いてるだけで以前と変わりが無いのが分かる。

今でもこうやつて自分に会いに来てくれる事が嬉しかった。他の兄弟達は自分と顔も合わさうとしない。唯一女である冥は実家に住んでるだけあつて顔も合わさうとしない。自分には心を開こうとしていない気がする。光寿だけがいつまでも可愛い孫であつた。嬉しかった事があつた。光寿に可愛い彼女が出来た事である。こんなに嬉しかったのは英将が渚を娶つた時以来である。幼い頃から光寿とよく遊んでいた子だから、今目があまり見えなくても分かる。鼻筋がよく通つていて目のクリつとした美人な子だつた。大学生の今ならさらに美しくなつてゐるだろう。

「美咲もね、ばあちゃんと会いたいつて言つてたよ。」「もう小学校くらいの頃しか知らないから、随分と大人になつてゐるだろうねえ。」

「昔から大人だったよ。」「女は大人になるのが早いんだよ。」
こんな他愛もない孫との会話が一番和む。小さい頃は凜が好きな時
代劇を光寿が横でちょこんと座って一緒に観ていたものだ。

「ところで仁が最近警察のお世話になったと聞いたけど大丈夫なの
かい？誰も教えてくれないんだよ。」「ばあちゃんを心配させたく
ないからじゃないの？大丈夫だよ、父さんがうまくやったらしいか
ら。」仁も昔は可愛い子だった。顔立ちは身内の鼻肩無しで可愛い
顔をしていると思った。今では歌舞伎著でホストをやっている事く
らいしか知らない。あの忌まわしい事件から彼の歯車が狂ったのも
知っていた。息子の英将にしても渚を失ってから変わった気がする。

「もう時間も遅いし今日は泊まっていったら？」「そうしたいんだ
けど明日も学校が早いんだ。」「それならもう出たほうがいいね。
今度美咲ちゃんも連れておいで。久しぶりに会いたいよ。」「もち
ろん。」祖母の部屋を出てまっすぐに家を出た。

午後の9時を過ぎていたが最近暖かくなってきた。あつという間に
夏がくるだろう。駅までの通り道にある喫茶店で兄の将太を見かけ
た。見ず知らずの女性と一緒にようだった。綺麗な女性だがどこか
品性に欠けるものを感じた。仁とは違い女性の噂が立たない兄だっ
たので少し新鮮だった。邪魔をしてはいけないと思いつつすぐに駅
へと向った。弟に現れられても迷惑だろう。

家に着いたのは午後の10時を過ぎていた。美咲がベッドで寝てい
る。寝るには早い時間だが部屋を見る限りすごく綺麗になっていた
ので掃除をしながら寝てしまったのだろう。

最近半同棲生活になっている。父の司郎とよく顔を合わしている
がそれについても一切口を挟まない。一人娘が男と半同性など普通

の父親は許さないだろう。しかし自分は特別らしい。まず娘より自分と居る時間の方が多いようだ。

すやすや寝ている美咲に気を使い電気は点けなかった。シャワーを浴びて出てくると美咲が目覚ましていた。「声かけてよね。帰ったんなら。」「気を使ったつもりなんだけど。」「浴室から陽気な鼻歌を聞かされりや嫌でも起きるわよ。」以前なら自分が浴室で鼻歌などは考えられなかった。これも美咲と付き合ってからだろう。そんな自分の変化が可笑しくもあり悪い気はしなかった。こんな身近に自分の事を想ってくれる女は居なかった。何故今まで避けていたのだろう。避けていたといっても男女の関係からである。もしかすると未経験から恋愛を避けてきたような気がするし、単純に美咲の事が好きで恥ずかしかつただけのような気もする。

「明日のレポートまだやってない事に気付いた！」美咲が切羽詰ったような顔をしていた。「今さらあがいても仕方ないよ。明日早く起きて学校でやりなよ。」「うん、学校にバイトに恋愛と忙しいなあ」「一般の大学生だね。」テーブルにあつたビーフジャーキーを齧りながら言った。

「ああ、そういえば兄さんを地元の喫茶店で知らない女性と居るのを見たよ。」「そりやお兄様はもてるでしょ？珍しい事じゃないわよね。」「いや、上の将太兄さんだよ。」「ええ！それは事件でしょ？」「事件って・・・兄さんだつていい大人なんだから。」とは言うものの自分ももう少し兄さんのその後を確認してみたかったという衝動が今出てきた。

「どんな人と一緒だったの？上のお兄さんつてお父様の会社に勤めていらつしやるのよね？」「うん、今じゃ重役だよ。一緒に居た人は綺麗だったなあ。なんか兄さんとは全然違うタイプのような気が

する。「お互い無いものに惹かれたんじゃない?」「兄さんから誘ったのかな?」「そりゃ男の人なんだからそうじゃないの?」「いや、そんなタイプじゃないよ。僕も内気だけど兄さんも相当内気だからね。絶対自分からは誘えないと思う。」「獣医になるのが夢でそれを理由に彼女を避けてたが、本当は内気で自分自身に自信がなかったからだと今は分かる。それだけに兄の気持ち分かる。」

「付き合ってるのかな?」美咲の顔は先程とは違い生き生きとしていた。女はこういう話が大好きである。「さあ、でもかなり親しもうだったよ。女の人がすごくニコニコしていた。」「上のお兄さんも結構やるわね。」

時計を見ると午前0時を過ぎる頃だった。「やばいな、もうそろそろ寝よう。明日が辛くなる。」「普通の男女はここから愛し合うはずなのだが、自分は明日の事を考えてしまうタイプだった。寝ようといえ寝る。美咲はそんな自分を受け入れてくれる。そんな自分だから好きになったとも言ってくれ。ほぼ毎日一緒に美咲を抱くのは週に1回あるかないくらいである。しかしその日だけは狂ったようにお互いの体を求めあう。」

携帯電話が早朝に鳴り出した。時間は午前の5時半。「・・・はい。」「寝ぼけていたが見慣れない電話番号だった。」「朝からすまないな、光寿。」「声は仁だった。」「兄さん?こんな朝早くどうしたの?」「横で寝ていた美咲も起きたみたいだ。自分の話を聞いている。」

「実は姉貴の事なんだけどな。」「姉さん?」「一昨日からずっと家に帰ってないみたいなんだ。」「昨日に保険証を取りに戻ったけどその時は居なかったなあ。でも1日や2日くらい戻ってなかったからって。」「俺もそう思いたいんだが、喜一やばあちゃん曰く連絡してこないのは珍しいみたいだ。」「確かに自分も最近までは実家

暮らしたったから姉とは近い場所に居た。家を空けるときは必ず連絡があった。だんだん頭が冴えてきた。

「確かによく考えたら変だね。でも何で兄さんがその事を知ってるの？」「ちよつと気になる事があってな。それで家に連絡を入れたんだよ。」「気になるって？」「子供には関係のない話だ。」「そんな歳も離れてないよ。」「まあいい。何か分かったら連絡くれるか？」「うん、いいけど・・・」一方的に電話がそれで切れた。

しかし仁が姉の心配をするのはどうも変だ。もう少し寝ようかとも思ったが目が覚めた。美咲も洗面所で化粧をしている。化粧の後に電話の内容を聞いてきた。

「それは心配ね。お姉さまも大人なんだしって思うけど・・・連絡がないのは初めての事なのね？」「うん、僕が知る限りは。」「お姉さまってブティック店を経営されてるのよね。凄く綺麗な人だったわよね。」「僕はそんなに話さないんだけどそうみたいだね。」「私の周りでもよく話題になるのよ。モデル出身だし何といつてもお洒落だから憧れるわ。ファンも多いのよ。学校終わったらお店に覗いてみようか？」「助かるよ。」

それから学校へ向った。

朝方の歌舞伎町は夜とは異なった顔を見せた。勤務帰りのホスト、ホステス達。酔いつぶれて倒れている会社員。カラス達。早朝に店を開ける風俗店のスタッフ、この街に根付いて1年も経たないのにすっかり顔役の1人になった。

歌舞伎町ホスト店売上第一位であるラピリンズのオーナー。ライブ

ル店達の陰謀により隅田会と対立、相手側は2人死亡。それを如月製薬のドンが出てきて片付いた。日本の中でも指折りの暴力団を引かせたのは親父の力だろう。しかしいずれ必ず超えてみせると誓った。

最近イラン人達の偽造テレカが問題となっていた。イラン人だけではなく90年代に入り大量の外国人達が来日した。目的は主に出稼ぎである。しかしこれだけの大量の数の外国人が要ると不良分子も少なくない。最初から犯罪目的で入国している者達も居るのだ。中国では蛇頭の影響力が大きくなりつつあった。普通のマフィアとは違い大陸から外国までへのルートを多数持っている。

外国人犯罪が深刻になりつつあるこの街から一般客が離れていくのは自分にとっても好ましくなかった。ライバル店、暴力団と問題が解決したかに見えたが次は外国人達である。彼等の失う物のないハングリーさは脅威である。うちのスタッフもたまに街で彼等とトラブルを起こす。ホストの中には血気盛んな人間も数多く居るが、修羅場を潜り抜けた経験が多い外国人と比べると喧嘩というより一方的にぶちのめされることの方が多いようだ。

もう1つ気になる事がある。姉の冥が行方不明である事だ。姉は兄弟の中では一番接した数が多い。仲が良いとは思わないがそれでも大事な姉である。行方不明にするのは今の時点で早すぎるが何か嫌な予感がする。以前、姉に木下 太治の話をした。明らかに動揺していたし、勘ではもうすでに金を貸してしまっているはずだ。プライドの高い姉の事だから分かる。

昨夜にセラヴィの明から連絡があった。あれから手打ちになったとは言え、気持ちの良い関係ではなかった。それでも明は全て水に流したかのように接してきた。それどころか年下の自分にリスクペクト

すら感じられるのである。

内容は姉の事だった。太治が2日ほど店を無断欠勤しているらしい。最後に見たのは2日前に店の後、ファミリーストランで姉と居たというのだ。店長の遼は知り合いのホステス嬢にバイト代を払い見張らせた。下の人間を見張るのは気持ちの悪いものではなかったが、ここ最近の太治は様子がおかしく売上もいまいちであった。下の人間に暴力を振るうし、客との金銭トラブルも問題になっていた。とても荒い声で太治がたびたび叫んでいたらしい。姉に暴力までは振るっていなかったみたいだが店を出てからは分からない。彼の車で何処かに移動したみたいだ。太治の乗っている黒のメルセデスは、彼の家の近所にある月極駐車場に戻っていないようだ。丸2日である。当然家にも居ない。

ナンバープレートも明が控えてあったので、ラビリンズのスタッフにも歌舞伎町周辺で探させた。姉は事件に巻き込まれた可能性が高いと判断した。

仁は財布から一枚の名刺を取り出した。警視庁警視、真田 亮。

救出

「すみませんね、忙しいところを。」「まったくだ。如月英將の子息でなければここには来ていない。」

真田は迷惑そうな表情で俺の向かいの席に着いた。シティホテルのコーヒーショップに真田を呼び出したのは姉の失踪に真田の手を借りたかったからだ。

「つまり如月家の長女、如月冥さんが2日間帰宅していないと。」
「ええ、たった2日間ですが今までの姉の行動を考えると無かった事ですから。」「私に相談する前に街の警察に駆け込むのが先なんじゃないかね？」真田は紅茶をすすりながら言った。注文する時にコーヒーは飲めないと断られた。

「街の警察に期待出来ますか？」「俺の口からは答えられないね。」
ニヤッと真田が笑った。育ちがいいのか下品だとは思えない笑顔だった。「しかしナンバープレートが解っているのならすぐに見つかるといってさっきの電話の後に検索させるように指示してある。何といっても如月家の令嬢が行方不明となると穏やかではないしね。」
「姉と一緒に居るのはホストクラブ、セラヴィの太治って奴です。」
「源氏名かね？」「本名みたいです。星野 太治。」真田が携帯を取り出し星野の件を電話の向こうに伝えていく。

それから姉について思い当たる事を全て真田に話した。

「署で君に会った時、マネキンのような目をしていると思った。」
「今は？」「お姉さんを心配する心優しい弟の目をしている。」
「真田さんは兄弟が居るんですか？」「正確には居た、だな。姉が高

校の頃に強姦殺人の被害者になってね。」平然と真田は言つてのけた。「つらい事を思い出させてしまつてすみません。」「いや、それが私の刑事になつたきっかけなんだよ。優しい姉だったよ。こう見えても昔は気が弱かつたんだ。いつも私をかばつてくれた。」「今じゃ怖い物なしって感じの顔をしていますよ。俺は警察つてのが大嫌いでね。善の面をした極道だと思つてますよ。」「そんなにはずれてはいない。むしろ極道より厄介だな。」

しばらくしてから真田の携帯が鳴つた。

「ラッキーだ。黒のメルセデスを横浜のシティホテルで発見したらしい。ナンバープレートも一致しているようだ。」「早いな。そんな、簡単に見つかるもんなんですか?」「だからラッキーだと言つた。しかし如月家の令嬢の事だからね。手の空いてる警察内の人間を総動員させたんだろう。昨日、チェックインになつてるみたいだ。2人でね。しらみつぶしに黒のメルセデスを探したとしても気の遠くなる話だが、どうやらシティホテルのスタッフが通報してくれたみたいだ。車の全面がかなりへこんでいたんでスタッフの記憶に残つていたらしい。」

「まだ星野には悟られていないですよね?」「そう願いたいね。では、行こうか。」「俺等は横浜市内のシティホテルまで真田の車に乗り込み向つた。真田の車は清潔にされていた。こういうので人の性格が分かる。高速はかなり空いていて30分もかからなかつた。

ホテルの駐車場には確かにナンバープレートが該当しているメルセデスが駐車されていた。バンパーが派手にへこんでいる。フロントで部屋番号を確認し、俺達は702号室の前に着いた。真田が一度ドアに耳をあてて、少ししてからスペアキーで部屋へと入つた。

中にはベッド上で両手、両足をロープで縛られた姉が居た。ガムテープで口を塞がれていたので剥がしてやった。

「仁……ありがとう。本当に。」「星野はどこへ？」「俺を遮って真田が聞いた。「恐らくどこかへ逃げたはずよ。ここへも私からお金を引き出すために拉致したの。警察の手が回る前に逃げたんでしょ……」姉の声や表情から覇気は感じられなかった。当たり前だろう。自分の男に拉致され金を脅し取られそうになったのだ。ただでさえ男性経験に良い思い出がないのだから泣き叫びたいはずだが、疲れているのかもそんな気力もないようだ。

「すぐに星野太治を手配しろ。」真田は携帯でそう伝えるとこちらに向いた。

「疲れているでしょうが少しでも彼の情報が知りたい。署まで同行して頂ければありがたいのですが。」「姉は疲労で駄目でしょう。一度自宅へ戻してやってくれませんか？」「行くわ……」「でも、姉貴……」「こんな姿をあの男に見られたらまた冷たい視線で見られるだけよ。それにあいつはこの事を知ったら太治を殺すわ。」「まだあいつに同情してんのか？姉貴は拉致されたんだぜ？」「これっぽちも同情なんてしていないわ。ただ私も太治の事は馬鹿に出来ない。私が惚れる男は全て私を見ていなかった。金よ。地位かしら？」「もういい。今日はゆつくり休もう。俺のマンションに来いよ。あそこならあの男も知らないし。」「ええ、ありがとう。でも迷惑なんじゃないの？」「俺は同棲している女も居ないし平気さ。なんなら飯でも作ってやるよ。」

あの男とは如月英将に間違いはないと思しながら、真田は兄弟のほのぼのとしたやり取りを眺めていた。

真田は今日は2人を帰した。仁が自宅の住所と電話番号を教えてきたので無理に拘束する必要もないと判断した。なにしろ仁から自分に連絡してきている。信用は出来るだろう。署にも携帯でこの事を報告したが問題なしとの事だった。相手は如月家の長女と次男である。厄介事は警察も嫌だった。

初めて弟の部屋に訪問する姉は興味深そうに部屋を眺めた。

「綺麗にしてるのね。見直したわ。」「寝るだけの部屋さ。汚れよ
うがない。」「女の子に掃除させてるんじゃないの?」「他人に部屋をいじられるのが嫌いでね。料理も自分でするよ。たまにだけど
ね。」「そう言うと仁はキッチンの冷蔵庫から数種類の野菜を取り出
しては水洗いし、包丁で器用に切っていた。

「太治の事・・・どう思う?」不意に冥が切り出した。野菜を炒
めながら仁は答えた。「どうって、まあ、心の弱そうな男だとは思
ったけどね。よく分かんねえや。」「彼は仁と違って自分に自身を
持てない人なのよ。」「まだ彼を擁護する気があるんだ?」「違う
わ。だけど、今回も私には手をあげなかったわ。」「それは評価し
ているよ。正直、姉貴を心配したよ。」携帯電話が鳴り出した。

「ちよつとごめんな・・・あ!忘れてた。光寿だ。」「兄さん。美
咲に店を見てもらったけど出勤してないって。どうしよう・・・」
「すまん、光寿。姉貴はここに居るよ。伝えるのが遅れた。」「良
かった・・・でもよく見つけられたね。」「知り合いの刑事さんに
頼んだんだ。姉貴は無事だ。」「さすが兄さんは刑事の知り合いま
で居るんだね。」「自分が厄介になった刑事だとは無垢な弟には伝え
なかった。

適当に会話してから電話を切った。「光寿も心配してたよ。可愛い弟だよな。」「本当に・・・私達の弟だとは思えない。」「考えたくもないんだけどさ、兄貴も姉貴も俺も・・・あの野郎の血を色濃く受け継いでるんだよ。でも光寿だけは母さん似だな。」「あら、仁も母さんにそっくりだから女の子が騒ぐんじゃないの?」「顔だけは似たな。でも俺のひねくれた性格はあいつに似たとしか思えない。」「私も。」「そう言っつて初めて姉が笑った。

「ほら、味は保障しないけど。俺の野菜炒め食べよ。」「香ばしい匂いが部屋に広がった。」「美味しい・・・料理の才能あるんじゃない?」「誰でも出来るよ、こんなの。お茶でいいか?」「ありがとう。こうやって兄弟でゆっくり話すのは初めてなんじゃないかって思うわ。」「そう考えるとそのきっかけを作ってくれた星野に感謝しなきゃな。」「

「太治・・・何処にいるのかしら。」「勘だけどあいつの単独犯じゃないね。姉貴の前で失礼かとは思うが、バツクに誰か居るよ。」「そう思うわ。悪い言い方すれば小物なのよね。」「そういう意味で言っただんじじゃないさ。ただ、今回のような思い切った行動をあいっつがするとは思えないからね。」「姉は空腹だったのかすぐに仁の料理を平らげた。

「おかわりいる?」「大丈夫。ありがとう、本当に美味しかった。」「寝る時は俺のベッドを使ってくれ。シャワーも自由にどうぞ。俺は店に顔を出さなきゃいけないから一度出るよ。」「ごめんね。何から何まで。」「兄弟なんだよ。俺たちは。」「そうね。」「

姉を残して街に出た。

真田の携帯を鳴らした。「やあ、姉さんはどうだい?」「意外に落

ち着いてますよ。今回は本当にありがとうございます。」「まだ事件は終わってないぞ。」「星野ですね。裏に誰か居ると思うんですが。」「そうだ。隅田会の田岡って男だ。」「もう割れたんですか？」「これでも色んな事件を担当してきたんでね。これくらいは何てこと無い。星野の交友関係に片っ端から当たってみた。店のホスト達からも同じ証言が取れたが、最近その田岡って男とよく会っていたらしいんだ。」「どんな男ですか？」「チンピラさ。それ以上でも以下でもない。どうせ星野を利用して大金を得て組でかい面がしたかつたんだろう。」「でもさすがですね。解決したようなもんじゃないですか。」「それがそうでもない。あいつは板倉が可愛がってる男でね。」「

板倉という名前を思い出した。確か徹の兄貴分だったあいつだ。

「知ってるんだろ？過去に君も会った事があるはずだ。」「何だ・・・知ってたのか。真田さんって世の中の事何でも知ってんじゃないの？」「知るか、そんなの。君の従業員の徹君に聞いただけ。いいか、板倉を舐めたら駄目だ。奴は悪党だぞ。君は手を出してはいけない。次に事を起こせば君の親父さんでもみ消すのは不可能だろう。」「奴は俺を見限っていますよ。既にね。」「まあ、この件は警察に任せて欲しい。」「お願いしますよ。俺も店が大事だし。ただ、姉貴から手をひかせたい。」「ああ。とにかく君は姉さんと一緒に明日署に来て欲しいんだ。」「形だけの取調べですね。分かりました。」「物分りがいいな。あんな事件を起こしたとは思えないくらいに。」「根は素直なんですよ。」「電話を切ってから店に出た。

相変わらず大盛況だ。俺の姿を確認して三浦が駆け寄ってきた。」「仁さん。お姉さんの方は大丈夫だったんですか？」「真田という刑事に助けられたよ。」「名前は聞いた事ありますよ。」「元デカだ

もんな、お前も。「若いのに優秀でしたね。上からも下からも愛想が無いって評判でしたが。「出来る奴はそんなもんさ。売り上げは？」「いいですね。俺たちも富豪の仲間入りですよ。それと、言い忘れてましたがセラヴィのオーナーが仁さんに会いたいです。「明さんが？分かった。」

店を出て明の携帯を鳴らした。「仁か。太治の事なんだけどな。「隅田の田岡って男ですか？」「何だ。知ってたのか。「刑事さんに聞きましたよ。「真田さんか？」「ええ。「田岡はただのチンピラだが板倉が出てくるとなると厄介だぜ。「真田さんより？」「そうだな。あの人と比べると板倉も小物だな。一応伝えとこうと思つてな。また近いうちに飲みに行こうや。「是非。」

自宅へ戻る頃には深夜1時を回っていた。姉はぐっすり眠ってるようだ。煙草を1本吸ってから俺も寝た。

妄想

北区にある冴えない雑居ビルの一室に将太は居た。

8坪程度の狭い部屋には粗末な来客用のテーブルとソファ。将太と向き合っているのは誰が見てもチンピラだと思つような男であつた。

「確かに50万受け取りましたよ。これでも全然足りてないんですがね。ま、兄貴にはこれでしばらく嫌味を言われなくて済みますよ。」
「下品な笑顔に将太は吐き気を催した。」

「悪かつたね。今後はもう少し上乘せして返済していくつもりだ。」
「助かります。でも不思議なんですよね。あんたともあるう人間がうちみたいなどこから借りるのもね。お客様は神様ですから構わないんですけどね。」
「高い買い物だつたよ。それも終わりだ。今後は御宅から借りる事もないさ。」
「俺がこう言つのも変ですが、世間からの目つてのを考えるとそうした方がいい。」

まさかサラ金稼業のチンピラに説教されるとは思いもしなかつたが、この男の言つ通りこれ以上この類の人間と一緒に居ると自分の格が下がるのは当然だつた。

「では次の返済日は来月の頭で。」
「え？ちよつと待てませんよ。」
「だから上乘せすると言つたらう。給料日はいくら俺でも月に一回なんだよ。今日より30万上乘せだ。兄貴によろしくな。」

そう言つと将太は外に出た。

会社に戻ると父から社長室に来るようにと内線で伝えられた。

「営業に出てたらしいな。俺はそんな事聞いてなかったぞ。」相変わらず人を見下した顔をするもんだと嫌気がさした。

「申し訳ございません。私の使っている飲み屋で知り合った客がどうしてもうちの製品のカタログが欲しいとの事だったので。」「飲み屋？スワンの事かな？」一瞬の動揺を隠せなかった。

「・・・そうですが？」「ふん。あそこは銀座でも指折りの高級店だ。お前も立派になったものだ。」会話のふしぶしに皮肉を織り交ぜないとこの男は死んでしまうのだろうかと思った。

「その女に熱をあげてるようだな。別に悪い事ではないが部下ではなく父としての忠告だ。商売女は所詮それ以上でも以下でもない。」「ご忠告承りました。」「本題に入ろう。冥の事について何か気付いた事はないか？」「冥・・・ですか？普段から顔も合わせないもので。社長の方が詳しいかと。」「妹の異変にも気付かないほど墮落したか。兄として失格だな。」「異変ですか？」「警視庁のトップから連絡があつた。昨日、男に拉致されたみたいだ。もつとも仁が動いて救出出来たみたいだな。」

事実、冥はこの何年も口を交わしていなかった。弟達とも当然距離を置いていたが。

「仁のお手柄だった訳ですね。見つかつて良かった。犯人は捕まっていないのですか？」「全力で捜索中らしいが目星はついてるみたいだ。どうやらホストクラブのくだらん男のようだ。」妹がホストに狂ってるという事らしい。自分も批判出来る立場ではなかった。

「そうですか。社長は報復を考えていらっしやるのですか？」「た

だでさえあのクズ、いや仁の件があつたばかりだ。俺も派手に動きたくない。お前、警察が身柄を確保する前にその男を消せ。」「・・・おっしゃっている事が理解出来ませんが。」「お前に俺の苦勞が分かるか？女経験の足りないホステスに金をつぎ込む長男。ろくでなしのホストである次男。クズホストに拉致される長女。何を考えているのか分からない三男。どうして1人もまともな人間が居ないんだ。

それはお前の狂った血のせいだ。言葉には出せなかつた。仁とは仲が良いとは言えないが何故かクズと呼んだこの男に対して嫌悪感を感じた。

「それは引き受ける訳にはいきません。殺人など無理です。」「おまえ自身がやる訳じゃない。このご時世、少量の金で殺人を請ける輩は少なくない。」「この男は今までに何人の人間を葬り去つたのだらう。

「お前が会社の金に手をつけていた事を俺が知らなかつた訳ではないぞ。舐めるなよ。」「そうやって英将は俺に背を向けて外へと目をやった。

何故ばれたのか？自分もこの男を舐めすぎていた。しかし俺にはケツに火がついている。借金を返済しなければ地獄の取立てが始まるだらう。如月財閥の長男がサラ金に手を出していたともなれば一大スクープである。俺の社会復帰は不可能となる。

震えた手である男に電話を入れた。

「頼まれてもらいたい事がある。今回はでかいヤマだ。ああ、金に糸目はずけん。ターゲットは・・・」

光寿のアパートに泊り込みしていた美咲も父に遠慮してか昨日から帰っていた。その父親は一人娘が男の家に泊まりこんでいても文句一つ言わない。

相手が自分だからというのもあるだろう。その父親の唯一の助手だからだ。美咲と幼馴染であることも大きい。ここ数日、姉の件などがあり学校の課題がおろそかになっていた。今夜は美咲も居ないし集中して勉強が出来そうだった。

美咲以外の女と経験のない自分は今までそういったものに興味がなく人生を終えるのだと思っていた。美咲と男女の関係になってからは嘘のように今までの価値観が崩れ去った。かといって美咲以外の女に興味があるかといえばそうでもない。

美咲がすぐ横にいただけで胸が苦しくなってくる。自分が異性に対してこういう感情を持つのは意外だった。それだけに勉強していても美咲の体が頭によぎる。中学の頃に少しやんちゃだったクラスメイト達が姓について熱心に討論していた。体育の授業での着替えの時間中だから女子に遠慮せず、卑猥な単語をまくしたてていた。

自分には全く興味のない会話だったのだが、そういうことを知っていたクラスメイトの一人が光寿に大きな声で話しかけてきた。

「如月。お前もよく聞いとけよ。これは男にとって大事な事なんだからな。」「僕は別に……。」「本当は家でマスかいてんだろ？お前みたいなムツツリはな、一度女にやみつきになったら猿みたいになっちまうんだよ。」クラスの大部分の男子が大笑いした。

自分には不快感しか残らなかったのだが、今思い出すとあのクラスメートは的当たりな事を言っていたのかも知れない。

小さい頃に母や姉とお風呂に入ったときでも女性の体にたいして何も感じなかった。ただ、美咲の着替えをたまたま松山家にお邪魔していた時に見てしまったことがある。不可抗力というやつだが美咲は真つ赤な顔して自分に罵声を浴びせてきた。その時は悪くもないのに酷い言われ方だと腹が立ったのだが、帰宅してから寝る前にその着替え姿を想像すると、自分の物が大きくなりやがて硬くなつていった。

保健体育でも習った事だがこれがそういうものだったのかと理解した。ただ、美咲と付き合いたいとかセックスをしたいという願望はなかったようにも思える。ただ恥ずかしかった。

そんな妄想を繰り広げているうちに携帯電話のバイブレーションに気がついた。自宅からだった。こんな時間に自宅からというのは珍しく何かあつたのだろう。

「もしもし。」「坊ちゃん・・・」「喜一か。こんな時間にどうしたの?」「大変な事になつちまつた・・・」いつもの喜一の様子ではない。声が沈んだ状態なのである。

「姉さんにまた何かあつたの?」「いや・・・旦那さんが・・・死んだ。」

僕は喜一の言つた意味がすぐには飲み込めずにただ、口を開けたまま携帯電話を持っていただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8402e/>

パズル

2010年10月28日08時55分発行